915.9
H736n
00405630

春陽文庫

1175

二本の指

（社会部記者の手帖から）

北條清一

春陽堂

春陽文庫

二本の指

（社会部記者の手帖から）

北條清一

春陽堂

915.9
H736n

405630

目　次

生き馬の目を抜く男……二
きびしい掟……東京の掏摸系譜……異人を狙つて大失敗……恐れ入つた山高帽……五通りの手口
二本の指……一八
日暮里元金杉の妾宅……銀次の生たち……東京一の親分となる……一味全滅す……赤坂署は大混雑……仕立屋の末路
銀次という親分……三八
親子相擁して泣く……銀次という男……獄窓に生涯を送る
拳銃無宿……五三
品川駅構内の警官殺し……頻々と起る兇盗事犯……不良少年から旅役者……百人斬りの森守健次……冷たい世間に怒りのピストル……女装の寝巻姿で捕わる
二等寝台車殺人事件……六九
寝台車から滴る血……頸動脈切断が致命傷……遂に記事差止め……招待された怪人物……政治的殺人か？

深夜の来訪者……八一
警官射撃さる……養父は警視で九犯の兇状持ち……不忍池観月橋の捕物
俺を死刑にしろ……九二
怪盗、寝室を罷り通る……神出鬼没の説経と講談……松坂屋デパートの大捕物……
前科五犯の兇状持ち……運命の悪戯、指紋の謎……法廷で死刑を絶叫
追跡者……一〇六
永い記者生活でたつた二度……謎の人物謙次……養母と不義の仲……行李詰めにして床下に埋める
ガニ股の男……一二〇
懸賞づき捜査……勘の捜査か科学捜査か……保険外交に化けて踏込む……報知の虚報に驚く
おはぐろどぶの謎……一三三
おはぐろどぶの浴衣包み……事件の名づけ親……犯人の仏心……鰯の鱗と事件の虫
消えた国宝……一四四
国宝四十八体仏……嘘つきの心理……純金と思いきやメッキに唖然
強盗になつたアナウンサー……一五四
女中に出刃をつきつける……青葉城下の奇怪事……二重人格の明暗映像……恋女房は名妓蔦若

二本の指

（社会部記者の手帖から）

生き馬の目を抜く男

東京という都会は、江戸の昔から生き馬の目を抜く恐ろしいところと相場がきまっている。しかし、誰も生き馬の目を抜いている現場を見たものはない。しかし、抜かれた被害は無数にある。いったい生き馬の眼を抜く男とは、どんな男か。

きびしい掟

明治の掏摸社会には、厳しい仁義の掟があった。博徒、遊び人の社会とは、別の意味で渡世人としての義理人情に生きていた。法網をくぐる裏街道に、陽のあたらない稼業で暮していながら、盗っ人の社会を軽蔑していた。掏摸社会の盃は、博奕打ちや遊び人のようにやかましいものではないが、簡単に盃のやりとりをしないだけに、儀式は厳粛に行われていた。

親分、立会人、盃を貰う子分が床の間を背にして座につく。膳の上に鯛が二尾、背中合せで皿にのせて置かれる。酒と盃。

立会人、「この若えのは、野州宇都宮生れの吉でごぜえます。親分の名声を慕ってめえりました。子分の端にお加えなすッて、末ながく眼をかけてやっておくんなせえまし」

「あッしゃア、ただいま、立会人清水の親分さんからお引き合せ願えました野州宇都宮生れの吉でごぜえます。どうぞ、面倒を見ておくんなせえまし」

「おら浜の藤吉だ、これを縁に出入りをして貰おう」

これだけの口上があって、立会人が盃をとり浜の藤吉親分に献す。親分は盃を右手でうけて、ぐいッと飲み干す。盃は袂の中から懐ろを通して、左の袖口から左手へ持ち換える。左手から子分の端に加えてもらった吉へ渡す、吉は盃を両手でうけて、立会人の酌で飲み、盃は立会人に納める。

この時、皿の上の背中合せの鯛を腹合せに置き直して箸をつける。

こうして盃をもらった子分も、いったん、掏摸社会の掟を破ると親分、子分の縁をぷっつり切られる。掟にもいろいろあるが、掟のうちでいちばんやかましく云われるのは、親分を売ることで、この罪は極刑である。稼ぎ高を誤魔化して親分の前に報告したり、仕立屋の身内が、仲間の眼を忍んで巾著屋と款を通じていることが露れると、親分を売った罪として、掟に従って仕置になる。

子分一統を集めた満座の中に、掟破りの子分を坐らせる。そこへ親分が現われて子分一統にむかって、

「俺の面に泥をぬった子分をこれから仕置をする。みんなよく見ておけッ」

声がかかると子分が剃刀を盆にのせて、親分の前におく。親分は掟破りの子分の右手をぐいッと手元へ手繰りよせる。

「えいッ」

子分の右手中指と人さし指がコロリと落ちる。

「手前のような奴に用は無え、さッさと出てうせろッ」

血のポタリ、ポタリしたたる指を押えて立ちあがる後ろから、子分が腰のあたりをポンと蹴りあげる。異端者はよろめいて、子分達の冷笑を浴びておっぽり出される。

なにしろ、掏摸にとって、右手の中指と人さし指は、命から二番目に大事なものだ。指先の洗練が彼等の生命である。その生命の二本の指を根元からぷッつりと切って落されることは、掏摸としての前途を奪われたことだ。もう二度と掏摸は出来ない。

こうした厳しい掟のもとで親分と子分の組織の繋がり、集団的に掏摸が活躍したのも、明治十四、五年ごろから大正初期までで、その後は次第に衰微して、今日では明治時代のような大きな組織は見られない。終戦後少数の徒党を組んだ掏摸が出没しているが、往時にくらべれば取るに足らぬもので、一人々々の単独犯が殆ど大部分を占めている。

東京の掏摸系譜

明治時代東京の掏摸がどんな風に分布していたか、その時分の資料にもとづいて、主なその生態と系譜（次頁参照）を調べてみよう。

この系譜の中で、新宿組は関西から流れこんできた掏摸の持寄世帯であった。いずれも関西流の手口で、ドジを踏んで露れるとひらき直って「なにをこの野郎ッ」隠していた剃刀で顔といわず、身体といわず、手当り次第に斬りつけて逃げる。そんな風だから東京の渡世人はかれらの手口を軽蔑していた。ランプ屋の銀次と云う男は、若い者を一人前に仕込むことに特別の才能をもっていて、掏摸の養成に力瘤をいれた。ランプ屋に仕込まれた若い者の中からは、後年警視庁を悩ました腕利きが輩出している。べっ甲の勝は、日本橋のべっ甲屋へ十二の時から年期奉公に住みこみ二十歳で年期があけ、べっ甲職人で店をもった男であるが、掏摸の贓品に小金を貸したことが縁となって、掏摸の渡世人仲間に入った。掏った贓品を捌く商売を渡世人の間では通屋（つうや）と呼んでいる。通屋から渡世人になった勝は、腕一本で叩きあげた仲間からは、腕を笑われ「あいつア、親分面をしているが場違えの通屋あがりじやアねえか」と侮られていた。

女親分豚花お芳は、その頃、三十八の大年増で、眉をおとし、おはぐろで歯を染めていた。十八貫もある女で器量がわるく、誰云うとなく豚のような女だと蔭口をたたかれた。紺絣の着物に黒繻子の帯をしめ、腕をまくると白粉彫りで牡丹の入墨をしていた。男の子分が四、五十人、強

東京掏摸系譜の一部

- 清水の文蔵 ― 仕立屋銀次（二代目 直參身内四十名 身内二百六十名）
  - 禿
  - 虎
  - 王 ― 磯次
  - 王 ― 定吉
  - 天 ― 常雄
  - 四 ― 友治
  - 小林仙吉（三代目）
  - 王 ― 金杉お政
  - 天 ― 金杉お光
  - 四 ― 辻お周
  - 女 ― 金田お実
- 新宿組 ― 木村熊吉（世話人）
  - 斬られの栄公
  - 金公
  - ちか公
  - 伊之助
  - ちび清
  - 卵屋
- 京橋八丁堀 ― 天鉱 ― べつ甲勝（二代目 身内三十余名）
  - 人形の春
  - 足丸の鶴
  - あなぐらの三公
  - 栄公
- 浅草界隈 ― 女親分豚花お芳
- 市内一円 ― ランプ屋の銀次

盗、窃盗の兇状をもった無頼漢十二、三人を情夫にもっていた精力絶倫の女親分だった。

巾著屋の向うを張った大親分清水の熊にはちよつした物語がある。

熊は本名清水文蔵と云つて播州姫路藩士清水又左衛門の一子として嘉永五年に播州で生れた。父親又左衛門は律義者で曲ったことの大嫌いな性分だった。伜文蔵の躾も厳しかった。こうした厳格な家に生れた文蔵は、どうしたことか怠け者で二本差しの肩肘張った生活が性に合わず、剣術の稽古や論語を読むよりも、町人の子供の仲間に入って遊びたい方だった。手癖が悪くて、十五の時に伯母の屋敷へ遊びに行って伯母の巾著を盗んだことが露顕して、物堅い父親は烈火のように怒った。いくら叱言を云っても末の見込みのない伜だ。このまま成長したら、三百年来の家名に疵をつけるのが関の山だ。お前のようなものは家門の汚れ、一日も屋敷におくことは出来ない、勘当するからすぐ出て行けと、きつい怒りようである。母親と伯母が父又左衛門の両袖に縋って、子供のことだし他人さまの物に手を出したわけじゃないのだから、一ぺんだけ母と伯母に免じて勘弁してやって下さいと涙で頼んだが、頑固一徹でいったん言い出したら後へは退かない。母親も伯母もその気性を承知しているから、文蔵に因果をふくめ、路用をもたせ江戸にいる親戚に預けることにした。

悲嘆の涙にくれているのは母親で、当人の文蔵は悲しむどころか、けろりとしたもの、窮屈な屋敷住居よりもどんなにいいかしれない、願ったり叶ったりで、これからは羽をのばして気随気儘な生活が出来ると喜んだ。

江戸へつくと、添状のある親戚へは行かないで、姫路にいたころの知り合いの髪結が、芝の烏森に世帯をもっているので、そこを頼ってころげ込み草鞋を脱いだ。そこで、ぶらぶら遊んで一年たった。

十六の年には、早くも、そこの娘と恋仲になったが、娘の両親に知れ半殺しの憂き目を見そうになったので、風をくらって逃げだした。それから、賭場の使い奴をして小遣い稼ぎをしていたが、そんなことじゃアうめえ酒も飲めねえ、何かいい仕事がないものかしらと考えた末、当時、日の出の勢いで幅を利かせていた掏摸の仲間に入ってどうやら飯が喰えるようになった。

熊が新橋の往来を歩いていると、ばったり出会ったのが父親又左衛門のところで中間奉公をしていた雁貞と云う男。

「これはお珍らしい、清水の若旦那様じゃございませんか」

声をかけられた熊は、尾羽うち枯してその日の生活に追われているので、どう慾目で見ても、歴っきとした武家の若旦那様とは見えない。落魄した身の上を聞いた律義者で昔気質の雁貞は、熊を自分の家に連れ帰り、小ざっぱりした着物に着かえさせて「若旦那」と鄭重にもてなした。当時、雁貞は中間部屋の部屋頭をしていたので、暮し向きも楽で仲間に勢力もあった。熊も、雁貞の昔に変らぬ忠義が身にしみてうれしく、浮浪癖も出さず、掏摸仲間から遠のいて神妙に居候をしていた。そうなると、雁貞は尚更若様の熊がいじらしく、一日熊をよんで、

「若旦那もお一人じゃあ何かと御不自由でしょうから、下郎奴がお内儀さんをお世話申しましょう」

熊に否応はない。すっかり喜んで十八で女房を持ち、一軒の世帯を張ったが、これと云う職もなく生活は不如意である。そうそうは雁貞に無心も云えないし、ええ、ままよと再び掏摸と博奕の世界に飛び込んで行った。その頃、仲間では巾著屋の全盛で若い者はみんな巾著屋の親分に盃を貰いに行った。熊は心の底に、俺は二本差しの出であるとの誇があって、痩せても枯れても牛の尻っ尾にゃなりたくねえ、と痩我慢を張って巾著屋の門を叩かず、いっぱしの親分気取でなけ無しの財布の底をはたいて仲間の面倒をみてやった。そんなことから、熊は若えに似合わず、他人の世話をよく見る男だ、と噂が立って、いつの間にか「清水の親分」とたてられるようになった。子分の中からは、日本一の掏摸名人と謳われた華族の新助、違いの名人「徳」なんてえ男が出た。違いと云うのは仲間の符牒で、すれ違った途端に素早く掏る手口のことである。

異人を狙って大失敗

花井お梅が箱屋の峰吉を浜町河岸で殺したのが明治二十年の六月。その翌二十一年には根津の遊廓が洲崎に移った。角藤定憲が大阪新町の高島座で自作の脚本で「豪胆な書生」という外題で芝居をやったのが書生芝居のはじまりだった——その時分に、違いの名人の一人に数えられていた小鳥の龜が、異人を追いこんで箱（列車）の中で大縮尻をして、両足をとられ、舎弟分の金公が列車から田圃に飛び降りて逆立ちとなり命を落した事件が持ちあがった。違いの手口は、時と

所にお構いなしで相手の内モサ（内ポケット）から財布を掏って中身だけ抜き、空の財布はもとのところへ納め、ボタンもちゃんとかけておく芸当の出来る腕がいる。この腕前をもった掏摸ら、全国どこの親分のところへ行って草鞋をぬいでも、客分の扱いがうけられた。龜は弟分の金公をつれて、銀座をぶらついていた。今の松坂屋デパートのあるところあたりで、通訳をつれた異人さんが買物をしているのに出会った。チラリ横目でにらむと、鞄の中に紙幣束と公債が確かに入っている。金公の耳もとで龜が、

「金公、異人さんの鞄を買ったぞ」

「あいきた」

鞄を買ったといえば、鞄を掏るぞと云うことだ。二人は異人さんの後からつかず離れず、一定の距離をおいて新橋の方へ尾ける。掏ろうと眼星をつけた相手を町から停車場まで尾けることを追いこむと言う。追いこまれた異人さんは、そんなことは露知らず通訳をつれて神戸行の一等車に乗った。龜と金公も品川までの一等切符で同じ客車に乗りこんだ。異人さんに少しの隙もない。汽車は箱根のトンネルをぬけて、御殿場、三島は下り勾配でひた走り、五分間停車の沼津を出て静岡指して驀進する。異人さんは、両側に怪しい奴がいると感づいたらしい。龜も金公もジリジリしてくる。でも、龜の方は兄貴分で場数も踏んでいるだけに、こんなときに、なまじっかジレてドジを踏んじゃつまらねえと考え、金公に眼顔で、

「ずいたらしいぞ、せいては仕損じるからゆっくりやろうぜ」

と眼に物を云わせたのだが、金公は兄貴の眼顔を、すぐ掏つ払ってしまえと早合点して一人で呑込んでしまった。いきなり猿臂をのばして鞄を掻っ払うが早いか、進行中の列車から田圃を目懸けて飛鳥の早技でヒラリと飛び降りた。掻っ払われた異人さんと通訳も驚いたが、それより、もっと驚ろいたのは龜である。

「ちぇッ、なんてドジな真似をしゃアがるんでえ」

舌うちしたが、もう後の祭。窓からのぞくと金公は飛び降り損なって、頭を田圃の泥沼の中に突きさして逆立ちとなっている。うっちやっておくわけにいかないから、龜は立ってデッキに出て飛び降りようとすると、ついてきた通訳が後ろから衿首をぐっと摑んで宙にぶらさげてしまった。龜の身体は宙にぶらさげられたまンま、足が軌道の砂利の上をひきずられる。汽車の速力が早いから、龜の顔色は見る見るうちに血の気が失せてまっ蒼になり、右足は挫いて血が流れる。通訳もなかなか強情な男でそんなになっても龜をひきあげない。龜が意識をとり戻した時は、病院のベッドの上で、枕許には警官が立っていた。鞄を掻っ払って逃げた男はお前の相棒だろうと訊問されたが、龜は首を横にふって、見ず知らずの男だが、田圃の中に逆立ちになっているのを見て可哀想になり助けてやるつもりで飛び降りようとしたのだと言い張った。仕方がないので身柄を日本橋警察署に引渡したが、口の堅い龜はどこまでも前の申立をおし通して手がつけられないので、そのまま放免されたが、金公は逆立ちになったまま息をひきとった。

びっこになった小鳥の龜は、憲法発布の明治二十二年三人の仲間と東北から信州路を稼いでい

た。信州で商人の財布を掏ったところが、案外中身が重く千四百円あったので四人で分けたまではよかったが、被害者の商人が訴え出てその人相を申立てたのですぐ県下に手配が廻った。馬車の立場に繋いであった一台のガタ馬車を急がせて三人は逃げのびたが、びっこの龜は、昔と違ってそんな素早い芸当は出来ず、逃げおくれて間誤ついているところを召捕られて、信州で臭い飯を喰った。

信州の監獄を出た龜は、北海道に渡って一と稼ぎしようと、青函連絡船に乗った。五月のことで、船があんまり大きくなく、波のうねりに船は木の葉のように揉まれ、乗合客は船酔いで苦しんだ。苦しんでいる商人体の男の懐ろのものを掏ったところを運悪く船員に見つけられ、「この野郎太え奴だ」と踏んだり蹴たりされ、後ろ手に高手小手に縛りあげられ、

「鱶の餌にでもなりやアがれ」

と、どす黒い北海の海に投げこまれた。随分乱暴な話である。

龜はよくよく悪運の強い男で、泳ぎが達者だったので縛られたまま、足をあおって波間に浮きつ沈みつ泳いでいるところを出漁中の漁船に救われた。命拾いをした龜は、船頭の家で四十五日働いた上、礼を云って東京へ舞い戻ったが、最後はうらぶれて死んだ。

恐れ入った山高帽

上野駅発平ゆき常磐線二等車に、大島の袷に黒七子の紋付の羽織、山高帽を冠った紳士が乗っ

ていた。隣り側には名のある実業家らしいでっぷり肥った紳士が腰かけていた。

山高帽の紳士は、汽車が荒川鉄橋を過ぎたころ、袂に手をいれ煙草を一本とり出して口にくわえた。袂の中のマッチをさがす様子であったが、あいにく持っていないらしい。帽子に手をかけ「恐れ入ります。マッチをお持ちでしたら拝借させて下さいませんか」

隣の紳士に丁寧に話しかけた。

「どちらまでお出でですか」

「水戸まで行きます」

話上手の山高帽の紳士は、四方山ばなしに相手の紳士を釣りこんだ。話しっぷりはまことに手に入ったもので、相手の紳士は相槌をうちながら、ニコニコ笑っている。山高帽はその間に三度マッチを借りた。

「かしわ、柏……」

話に夢中になっていた山高帽、

「あッ、こりやァいかん。柏駅だ、降りなきゃならん、どうも、失礼いたしました」

と、あわてて降りて行った。

汽車が動きだすと間もなく、時間を見ようとチョッキのポケットに手をやると時計がない。おやッ、ヘンだと思って、上衣のポケットに手をつっこむと紙入れはある。おかしいなと開けてみると、これはしたり、中身は空っぽだ。さては、柏駅で降りた話上手の山高帽は掏摸だったか。

紳士は、ハタと膝を叩くと、何を思ったか我孫子駅で下車して、上野駅に引き返した。掏られたのは十八金側両蓋二十一型の時計、二十二金の鎖。現金が十余円である。

紳士は、常磐線の列車が著くたびに、改札口に立って、吐き出されてくる乗客を見ていた。一と汽車、二た汽車、三汽車待ったが山高帽は現われない。しかし、紳士は失望しなかった。どうせ常磐線を根城に箱師を働く男だから、きっと現われるに違いないと睨んだ。その眼に狂いはなかった。五度目の列車がホームへ滑りこんだ。

来るぞ、来るぞ。山高帽が乙にすましてやってくる。改札口を出た山高帽のそばに駈けよって、肩をポンと叩いた。

「君、今朝は失敬したネ、野暮は云わない、時計と鎖、紙入れの中から抜いた金を返してくれ」

山高帽、不意に肩を叩かれ、一時はギョッとしたが、かれも強か者、

「藪から棒になにを云っているんだネ、我輩が君の時計を掏ったとでも云うのかね、言いがかりもいいかげんにしたまえ。なんの証拠があって、左様なことを申すのか。失敬な奴だ」

居丈高になって怒った。相手の紳士は笑って一向に驚かない。

「盗っ人猛々しいとは君のような男のことだよ。よろしい、それじゃア警察へ行って黒白をつけよう」

「よろしい、それじゃ、警察へ行こう」

山高帽は道々考えた。待てよ、札に証拠はないが、時計が面倒だ。この野郎おそろしく執念深

いが何者だろう。彼はせっぱつまって、駅を出ると、そっと、時計を溝の中に捨てた。丁度後ろから来た男が、捨てるところを見た。おやッおかしなことをするぞと、溝の中の時計と鎖を拾って、二人の後をつけて警察へ行く。刑事部屋で山高帽が啖呵をきっているところへ、件の男が時計をもちだしたので、山高帽はすっかり悄気て恐れいってしまった。山高帽は仕立屋銀次の片腕「山高帽の磯」だった。掏られた紳士は浅草に住む神谷清左衛門と云う人だった。

五通りの手口

著ている羽織を掏ったとか、穿いている足袋、下駄を掏ったとか、内ポケットの札入れから中身だけ抜いて空の紙入れをもとどおり返しておくくらいの芸は、そのころの掏摸は別に自慢にならないあたりまえの腕とされていた。掏摸の手口には、ぽたはたき、箱師、違い、高町、棚師と地流しの五とおりがある。

ぽたはたきは、俗に、平場といって。公園、縁日、祭礼、見世物などの人混みを仕事場にして出没する。袂に金品のあることを確かめると鋏や剃刀を使って袂を切る。鋏は小型で掌に入るものを用いる。剃刀は普通の日本剃刀を二寸位に切って、指と指の間に人眼につかないように挟む。仲間の符牒で剃刀は「おいそれ」又は「あたり」と云う。鋏はばねである。だが、おいそれやばねを使って袂を切るような渡世人は、ずぶの素人で、仲間うちでは一人前に扱ってくれない。

ぽたはたきで、一人前の顔になるには、胸あてが出来る腕にならなければ駄目とされている。

胸、あて、と云うのは職人などがしている腹掛のどんぶりの底をすうッと切って、中身をぬきとる芸当で、これは、なかなかむずかしい技とされている。

高町は郡部の祭礼、縁日などを稼ぎ場にしている。仲間には、ぼたはたきもいれば、箱師もいるといった具合で、種々雑多で、親分子分の関係とか、筋の通った仲間ではなく、不遇の老掏摸、もぐりなどである。高町と同じ種類に、ずッと組と云うのがある。これも田舎廻りが専門で市の日だけ稼ぐ。市の立つ日はどこでも掏摸の出没が激しいので刑事の眼も絶えず光っている。いつまでもぐずぐずしているとドジを踏んで捕まる。だから市の立つ帯のように長い町を端から端まで通りぬけて仕事をして再び後へ戻らないところからこの名が出たものだ。

棚師は、汽車、電車の網棚の上にのせてある荷物を掏る一派で、東京では箱師の中にいれているが、これは、掏摸と云うよりも掻っ払いだと云うものもある。棚師でも上手なものになると、荷物には手をつけないで鞄やバスケット、信玄袋などの中に入っている現金や金目のものだけを掏りとって行く。

掏摸の身上は、なんといっても、相手にそれと気づかれないように掏って、後になって懐ろへ手をやってみたら財布がなかったとか、洋服の内ポケットから札入れを出してみたら、中に入れてあった札だけが抜かれていたと云うような鮮かな手際にあるのであって、当節のように電車の中で、なかばギャングのような男が袖屏風をつくって、相手を脅迫半分で掏るような手口は、昔の名人掏摸から見れば、まったくの外道である。掏摸師の腕も今日ではがた落ちしてしまった。

明治時代の腕のよかった掏摸が当節の掏摸の話をあの世で聞いたら「下がっちゃア怖いよ」とにがにがしく思うことだろう。

二本の指

これは明治時代、警視庁を向うに廻し五百の子分を踊らせた巾著切の親分仕立屋銀次の懺悔ばなしである。

日暮里元金杉の妾宅

梅雨晴れのむし暑い天気。

雲のきれめからのぞいた六月の太陽が、じめついた路上に、強い光をきらきらとなげつけている。その光に、紫陽花（あじさい）の花の藍が眼にしみいるように冴えている。

明治四十二年六月二十三日の朝十時すぎ。北東の風が庭の植込みの楓の枝をなぶっていた。ところはご存知の日暮里元金杉、そこに柱一本の木口も吟味して普請した一と構えがあった。利休好みの庭、泉水の美、まことに凝った邸宅で、いずれは、なんのそれがしと名のある住居と見える。門に出した表札には「広瀬くに」と書いてあった。道をゆく人が表札を眺めて、ハテなと小首をかしげるのも道理、この一と構えは、当時、北は北海道から南は九州まで全国に網を張った掏摸の大親分仕立屋銀次が、世間体をつくろう住居である。

おくには、親分銀次の愛妾で、この妾宅が、銀次直参（じきさん）の子分五百と、全国数千の仲間を手足のように動かす本拠である。

この時、銀次は男盛りの四十四、にが味走ったいい面構えの親分だった。十畳の居間で床ノ間を背に、大あぐらでどっかと坐る。その前に、飲ンべいの勝、づや常、らくだなどの子分が行儀よくかしこまっている。

「勝ッ」

「へえ」

「てめえは、きょうは、新橋駅から汽車（はこ）にのれ」

「へえ、承知いたしやした」

「づや、てめえはエンコ（浅草）だ」

「らくだ、てめえは、上野から白河まで汽車（はこ）だ、ドジるなよ、しっかり稼いでこい」

「へい、承知しやした」

大ぜいの子分は、毎日、こうして職場の指図をうけて、犬のように走り去ってゆく。

ちょうどその時、玄関の格子戸のあく音がした。つづいて

「ごめんよ、親分は家かい」

声をききつけて、女中が玄関に両手をつくと、見たことのない男が

「赤坂署からきたンだが、親分にちょいと顔を貸して貰えてえンだ、手間はとらせねえってな、取次いでおくれ」

女中の取次ぎに、銀次の顔がさっと曇った。さてはと、胸に思いあたる節がある、というのは——

この月の二十一日夜七時、赤坂区高樹町に住む新潟県知事柏田盛文が、麻布まで用達に行っての帰り広尾橋から電車に乗って、青山一丁目に行く途中で帯の間に挾んでいた金側両蓋懐中時計を掏られた。この時計は、柏田が伊藤博文から記念に贈られた二十二型で、時計の蓋には「為記念公爵伊藤博文　九月二十日　柏田盛之殿」と彫ってある。柏田にとっては家宝の珍品、それが、まンまと掏られたのだから、柏田は蒼くなって赤坂署に届出たのだった。

なにしろ、柏田はもう老人で、自分の傍にどんな男が腰をおろしていたか、前にどんな男が立っていたか、質問されてもはっきり記憶していないが、とにかく、青山墓地下の線路のカーブで電車が動揺した時に、どうも掏られたのじゃあるまいかと申添えた。訴えに接した赤坂署では、主任の本多留吉警部がこうした家宝の時計だけに、うっちゃっておくわけにはいかない。しかも、被害者が県知事閣下とあるので、さっそく、内偵してみると、どうも、銀次身内の仕業らしいとの見込みがついたので、銀次に「ちょいと顔を貸してもらいたい」と下手(したて)にでて呼びだしをかけたのだが、銀次の方じゃア、たかのしれた赤坂警察あたりの「ちょいとこい」に「へい、さようでごぜえますか」と腰はあげられないと、大きく構えて貫祿のほどを見せたつもりでいたので、

もしや、そのことではあるまいかと、頭へピンときた。

いつもなら、こんなことに、胸騒ぎがする銀次じゃないのだが、虫が知らすというものか、今日に限ってなんとなく気にかかる。

にがい顔をした銀次は、敷居に手をついて返事を待つ女中に

「かまアことはねえ、留守だといって追い返しちまえ」

吐きだすようにいった。

「なンだって、留守だ？　俺の目は節穴じゃねえよ、そんなべら棒なことがあるかい、じゃア、上って探すぜ、ごめんよ」

刑事は、外にむかって、合図をすると、表から四人、裏手から四人、都合八人が、鳥打帽に角袖、尻を端折った恰好でどかどかと踏みこんだ。

物音に銀次は、素早く「それッ」と眼くばせすると、三人の子分に

「手前たち、すぐズラかれ、後は俺が引受けたッ」

「親分、だいじょうぶですかい」

「なにいってやアがる、早くしねえかッ」

三人の子分は、龕燈(がんどう)返しの逃げ道から体をかわしてさっと逃げた。そこへ、刑事の一隊が雪崩れこんだ。

銀次は煙管をくわえ、天井へ煙の輪を吹いて涼しい顔。

「やア、親分じゃござんせんか、留守だなんて、からかって人が悪い、お手間はとらせませんから、ちょいと、お顔を貸してくださいな」

「この俺の顔がそんなに借りたきゃア行ってもやらあね、じたばた騒ぐなよ」

銀次はうそぶいて、金煙管の頭をポンと吐月峰(はいふき)で叩いた。

「おいッ、おくにや。赤坂署で俺の面が借りてえっていうから、ちょいと、行ってくるよ、著物をだして出かける支度をしてくんな」

「あいよ、でも、お前さん。一人でだいじょうぶかい」

おくには、鬢のほつれ毛をかきあげて、不安そうに、銀次の顔を見あげた。

「なアに、たかのしれた赤坂署だ、この銀次の身体に指一本だってふれさせるもンか。そんなことをしゃアがったら子分が承知しねえってことよ。あッ、はッ、はッ、はッ」

支度はできた。

「おくにッ、じゃ行ってくるぜ、留守はしっかりたのんだよ」

「あい、気をつけておくンなさいよ、留守は妾があずかったから心配おしでないよ」

玄関に立った銀次をおくにはきり火でカチカチ送りだす。

銀次この日の身支度は、五分刈頭に山高帽をかぶり、ピンとはねた八字髯、本フランネルの単衣物にセルの羽織、鼠色縮緬の兵児帯に紺足袋を穿いた。左手薬指にはプラチナの指環を光らせ、甲斐絹細巻の洋傘を杖ついて曳かれてゆく。

後姿をじっと見送っていたおくに、たまりかねて、ばたばた駈けだした。

「親分、ちょいと待って――」

銀次はふりかえってたちどまった。息せききって駈けつけたおくには

「警察の旦那、どんな御用か知らないが、親分の代りに妾を連れて行っておくンなさいな、これ、このとおりお願いです」

刑事の袖をひいて、掌を合せた。銀次は横合から

「おくにッ、女の出る幕じゃねえ、早く帰えンなせえ、みっともねえよ」

睨みつけられて、おくには、しょんぼりと引き返した。

男まさりのおくにの眼に、涙の雫が光っていた。物蔭で見送る子分達が、この愁嘆場を見て顔をそむけ、

「姐御もいいところがあるなア」

雨がまた音もなく降りだした。

指の本二

銀次の生たち

一代の大親分と謳われ、日本の掏摸史にその名を残した銀次は、本郷区動坂町二十四番地に生れた。動坂町二十四番地というのは、現今の駒込病院の横丁あたりである。

父親の富田金太郎は、ここで、紙屑問屋と銭湯を営業にしていたと云うから、暮しむきは裕福

だったらしい。慶応二年三月十七日この土地で生れたのが後年の銀次である。両親は掌中の玉と可愛がり、名前を銀蔵とつけた。銀蔵が七、八歳のころ、一家は駒込吉祥寺町に移って、父親金太郎は浅草猿屋町警察署（後の蔵前警察署）の刑事になった。

なんの因果か、父親が刑事で伜が一代を風靡した巾著切の大親分——銀次は、この世を去るまで親父が刑事であったことを自慢の一つにして、警察署の辞令書を後生大事にもっていた。その辞令には

富田金太郎
傭申付候事　但月給金七円給与候事
明治十六年二月九日
浅草猿屋町警察署

とあり、判もなにも押してない。

御維新から明治の文明開化に世が変り、鉄道馬車が都大路を通って、御用聞きが刑事に変っても徳川時代の岡っ引根性の名残は断ち切ることが出来なかった。明治時代に掏摸団が跳梁跋扈して、警視庁を向うに廻し傍若無人の振舞をしたのも、刑事と掏摸の腐れ縁に起因している。そのころのもさ（掏摸）のび（窃盗）博奕うちなどの常習犯は、絶えず刑事の自宅へ出入していた。

御多分にもれず金太郎の住居もこうした連中が、朝に晩に出入した。格子戸ががらがらっと開くと、玄関に飛びだして行くのが可愛ざかりの銀次。「おじちゃん」と首ったまに飛びつく。「おお、坊やかい、それ、おもちゃを買ってきてやったよ」「それ、お菓子を買ってきてやったよ」「おじちゃんはお小遣をやろう」——そんな風で毎日三両、五両と金を貰う癖がついた。

銀次はそのころを追憶して、

「今でこそ、二分、一両の金は子供だってそんなに驚かねえが、その時分は、一人前の月給取りだ、官員様だと肩で風をきる連中が、月に五両か七両しか貰えねえのだから、鼻たれ小僧のあっしが、日に二両も三両も貰ってたんで自然、金の有難味ってえやつを知らねえようになっちまった、これが、悪の芽ばえとでも云うんでござんしょう」

銀蔵はわがままで、金遣いの荒い子供に性質がだんだん変った。両親も一と粒種の息子の行くさきざきを案じて、銀蔵が十三の時、日本橋通り旅籠町十六番地仕立職井阪浜太郎方へ仕立職人に指の仕込んでもらうよう年期奉公にだした。この井阪は、当時一流の仕立屋で大丸呉服店の仕立物を本一切引受けていたので、職人も二、三十人いてたいへん繁昌していた。十三の銀蔵は、多勢の奉二公人の中でいちばん年が若く、可愛らしくて、眼から鼻にぬける機転に主人浜太郎はもとより兄弟子達からも「銀坊、銀坊」と評判がいい。出入のお得意へ仕立物を届ける使いに出しても愛嬌があって得意の気受けがよく、帰りには駄賃に塩煎餅の一と包ももらってくることが多かった。

仕事の方も手先が器用で物覚えがよく、どんどん腕をあげて、年期の明ける二十歳のころには、

袴、丸帯、婚礼衣裳のようなむずかしい縫物も、針一本で見事に縫いあげた。一年のお礼奉公も型通りに無事済ませて、銀蔵は義理堅くていい奉公人だと褒められ、包金をもらった上、主人井阪夫婦の媒妁で女房を娶り、下谷御徒町四丁目二十八番地に店を持った。井阪で受取る大丸呉服店の仕立物の下請をさせてもらう傍ら、弟子をとってお針の師匠になった。

お針っ娘達の中に一人ひと際美しい娘がいた。水々しい結綿（ゆいわた）の髪、鹿の子しぼりの帯、色がくっきりと白くて、眼鼻だちのととのった小町娘、名前をおくにと呼んで年齢は十八。このおくにと銀次が師匠と弟子の墻を乗越えて割ない仲となった。噂は忽ちひろがる。銀次の女房が見かねて意見すると

「うるせえ、手前なんかの出る幕じゃねえ、黙ってひっこんでいな」

機嫌を悪くして、家を飛びだす。おくにの家は、そのころ、早くも売りだしていた掏摸の一家清水の熊の一人娘、親分の熊はこの話を耳にして、

「女房持ちの仕立屋の職人風情に俺の娘はやれねえよ」

と剣もほろろで、おくにもとりつく島がない。夫と娘の仲に入って、板挟みとなった母親おしんが、熊親分の機嫌をやっととりむすんで、銀次は女房に因果をふくめて里に帰し、戸籍面は兎に角として、実質上の夫婦となり、相変らず仕立屋の商売をしていた。時に銀次は二十六でおくには八つ違いの十八である。

親分の娘を女房にしたとなると、子分達が銀次をただの仕立屋職人では承知しない。子分達は、下谷の方へ稼ぎに出ると、銀次の店によって挨拶をして行く。銀次も挨拶されれば、渋茶の一杯も出す。銀次も最初のうちは、掏摸を恐ろしい巾著切と思っていたが、眤懇につきあってみると案外捌けた人間がいる――子分が博奕で身ぐるみとられてシケているときや、いい獲物にありつけずにあぶれていると、

「少いけど持って行きな、なにさ、目の出たときに、返えしてくれりゃあいいんだよ」

金をやったり、酒を飲ましてやったり、よく面倒を見た。江戸っ児で生れながらに親分肌の銀次は、何時とはなしに熊の子分から「若親分」とよばれ、自分もその気で子分の世話をするようになった。銀次が二十八の時、義理の兄貴分「役者の寅」と綽名をとった掏摸の手引で熊親分から盃をもらった。しかし、銀次は掏摸としての生涯で、落魄した晩年は別として、その全盛時代――人のものをただの一度も掏ったことのないのをせめてもの自慢にしていた。

東京一の親分となる

当時は、大阪が掏摸の本場で、千日前を中心に有名、無名の掏摸師（大阪では掏摸をチボと云う）が昼となく夜となく多勢出没して、行人を悩ましていた。

東京はまだ、有名な掏摸はもちろん一家を養うほどの親分もなく、微々たるものであった。それと云うのも、東京には腕の立つ掏摸がいなかったためだと云われている。ところが、明治二十年ごろ（註、銀次が二十二歳でまだ掏摸の仲間に入る前）「巾著屋の親分」と云うのが忽然とし

て、東京の掏摸渡世の仲間うちで、親分の名乗をあげた。市内に散在した掏摸が、忽ちこの傘下に集まって、ここにはじめて、掏摸団と名のつくものが生れた。だから、東京の集団的掏摸の草分けは、巾著屋の親分と云うことになる。

もっとも、御維新前にも、神田今川橋の伊勢、塩物屋の金、浜の秀奴、浜の藤吉なんて連中が存在はしたが、前にも云う通り掏摸の腕がなく、その勢力も大阪にくらべて物の数ではなかった。

そこへ巾著屋の親分が現われて、掏摸で身を立てようと思うものは、みんな俺ンとこへこいと胸をぽんとたたいてみせたものだから、市中のちんぴら掏摸が、われも、われもと、盃をもらいに集まってきて、たちまち東京一の大親分にのしあがってしまった、

銀次も、巾著屋のことを、

「なかなか、腹の据った度胸っ骨のあるいい親分でござえました」

と追憶している。

巾著屋の名乗につづいて、おくにの父親「清水の熊」が親分の貫祿で世に出た。熊の親分としての格式勢力は、東京市内では、とても、巾著屋と覇を競い、肩を並べるわけにはいかなかったが、一歩、東京を離れて旅に出ると「熊親分」として、なかなか顔が利いた。

そのわけは、巾著屋は腕が鈍く素人に近いものだったが、熊の腕は確かで、一度この野郎と睨んだが最後、きっと獲物を持って帰る凄腕をもっていた。熊には腕の自信があった。掏摸の生命は右手の人さし指と中指の二本にかかっている。熊は若い者を集め、自分の右手の指二本を示して、

「おらあ、稼ぎに出てこの二本の指が一度だってドジを踏んだこたアねえよ」

と自慢した。

その熊と巾著屋が、東京で対立して互に縄張りをつくり、顔を利かせたのは、明治二十五年から二十八、九年にかけてのことであった。（註、銀次三十歳の頃）面白いことには、この二人の親分が東京で売出してから、チボの本場、京大阪から両親分を頼って上京し、そのどっかへ草鞋をぬいだ。多少でも顔が売れていて、腕のある奴は、客分の扱いをうけるし、駈けだしのチンピラは、子分の盃をもらって、腕を磨いた。両親分は、はっきりと掏摸道の流儀を異にしていた。剣道でいえば、真影流と一刀流とでも云うか、子分の気質、掏摸の手口――つまり流儀もまったく違っていたので、その手口を見れば、巾著屋の身内の仕業か、熊の身内のやった仕事かすぐに判った。この両親分のどっちが勢力があったかと云うと、東京市内では、巾著屋の身内のために、熊の一家は圧倒されがちで、熊の身内はそれだけ肩身も狭く、口惜し涙をのんでいた、

兎角するうちに、時代はうつって、明治三十二年巾著屋の跡目を「湯島の吉」が相続、清水の熊の跡目を仕立屋銀次が三十二歳の男盛りで継ぐにおよんで、この勢力はひっくり返った。

度胸があって、子分の面倒をよくみてやる銀次の評判がよかった。銀次がめっきり男をあげたのは、その頃、大阪の喜三郎、名古屋の越中竹、宇都宮の幸太、高崎の喜三郎なんて親分が縄張り争いから、喧嘩がたえず、血の雨を降らすような騒ぎを起していたのを、仲に入り、関西、東北、信越の親分を東京に集め手打ちをさせてから、度胸っ骨の据ったいい親分だとどっと人気が

出て、子分が各地から集まってきた。

人気はおそろしいもので、そんな噂がたつと巾著屋の繃張りは、次第に銀次の手に収まって、ついに、銀次は東京一の大親分にのし上ってしまった。

一味全滅す

赤坂署長本堂平四郎が、警察を愚弄し市内に跋扈する掏摸団の掃蕩に乗りだす決意をかため機会をねらっていた矢先、柏田盛文の金時計事件が起ったので、それをきっかけに、銀次召捕で、検挙の口火をきったわけである。

銀次の権勢が盛んで、掏摸の仕打ちがずいぶん眼にあまるようなことがあったのであるが、それを、どうにも、手がつけられなかった事情の一つは、前述の如く掏摸と刑事が切るに切られない腐れ縁を結んでいたところに原因があった。銀次御用弁の知らせは、その日のうち、東北、北海道、名古屋、京都、大阪、九州と兄弟分や身内に伝わった。赤坂署はいつなんどき、子分達の襲撃をうけるかもしれない形勢となった。

本堂署長は、署長室に陣取って、縦横無尽の秘策で対抗した。銀次が召捕られた翌日、銀次の住居の家宅捜索が行われた。この捜索で押収された証拠の品々は、

慶長小判一個、宝石六個、婦人持十八金側懐中時計一個、金鎖二本、衿掛金鎖一本、贓品台帳一冊。

このうち、贓品台帳はまことに珍品で、西洋紙綴りで厚さ一寸、B5版型で表紙には鴛鴦(おしどり)の絵を描き、二百五十円也と云うような落書がしてある。頁を一枚一枚めくっていくと、きん、はる、○、どて、ちび、はげ、中村などと子分の名前を索引にして、明治四十二年四月十五日が筆はじめになっている。五円、十円、二十円、三十円と云うそのころとしては大金の記入で「内庄かし」「受取り」と書いてあったり、判を押したところもある。筆跡はすべて姐御おくにの筆で、刑事はこの台帳を手掛りに捜査の糸をたぐった。

角袖に鳥打帽子、股引にシャツ、尻端折りでゴム入りの靴ばきと云うのが、そのころの探偵の扮装だった。ふだんは金モールに金ボタンの厳めしい本堂署長もこうした探偵姿に変装し、署員も、それぞれ、思い思いの変装で三隊に分れて、上野、浅草、下谷、日暮里と銀次の子分を虱つぶしに探し廻った。

姐御おくにと、おくにの実母泉しんの二人も、金杉の住居で御用となった。銀次の身内で顔のいい大清、本名松浦清吉はその時三十。親分が繃についてから三日目の二十六日の暮れ方、鳥打帽を目深にかぶり、紺絣の単衣に黒メリンスの兵児帯をしめ、尻端折りで靴を履き、上から鼠色のインバネスをすっぽりと羽織って、三河島の停車場近くを、あたりに気をくばりながら足早にすたすた歩いていた。

「おいッ、大清！　珍らしいじゃねえか」

ふり返って、声のする方を見ると、夕闇の中に本堂署長と探偵の顔が五つ、六つ……ぽうと浮

き出している。みゝな変装である。

とたん「しまった！」もうこうなっては、じたばたしても、往生際の悪さをさらけだすだけだ。

大清は、頭に手をやって、

「エヘ、ヘッ……みなさんおそろいで」

お世辞笑いにまぎらせて、夕闇のどさくさの人混みに逃げこむ算段。相手の隙をうかがって、さっと横っ飛びに、すっ飛んだ。探偵の手がぐっと伸びた。

大清は銀次身内でも、力自慢の男だった。

「それ逃すなッ」

左右から一時にどっと組みついた。必死の大清が夜叉と暴れる。上になり、下になり、組んずもつれつの渡り合い。この時、柔道二段の中村探偵の技にかかって、さすがの大清も高手小手に縛りあげられてしまった。

泥だらけになって、顔の皮をすりむき、血のにじむ大清の顔を、物見高い野次馬が十重、二十重に取りまいた。

赤坂署は大混雑

親分はじめ兄弟分を根こそぎあげられた銀次身内の逃亡組が、無念の歯がみをして、この仕返しをしなくちゃ肚の虫がおさまらねえと、銀次就縛の翌二十四日の夜から上野の山に客分の禿虎をはじめ、主だった子分三十余人が集まった。禿虎が一同の前に、こんどの手入れは一通りの拝み倒しや嘆願じゃあ、とても親分を救い出すことは出来ない。そこでそうなったら荒療治の一手が残されているだけだ。赤坂署を襲撃して警察へ火をぶっ放してやろうじゃないか、そのどさくさに親分を救いだすのだ――みんなそれに賛成した。だが赤坂署側でも充分に用心して、襲撃の裏をかいて署内には、柔道師範町井百太郎をはじめ警視庁流の使い手中村、瀬戸山、金子、太田、遠藤等の猛者を待機させたので、署内の情勢を察知した乱暴者の子分も手も足も出ず、遂に、襲撃計画をやめて、泣き落し、拝み倒しの嘆願に出た。その時本堂署長のもとに子分一同として郵送された嘆願書にはこう書いてある。

嘆願書

指本　奉申上候小生幽かに承知候処掏摸の親分と称するは仕立屋銀次計りにも無之、大阪等には幾らのもあり又、大賊、人殺しもあるに拘らず我等親分計り左様にいじめられては誠に以て我等社会はたまり不申候

二　今日天下の法網を見逃し呉れとは不申候得共今度計り是非御許し被下度、何卒々々今度丈の処、非常御寛大の御取扱い乾児一同より奉嘆願候

何卒々々国家のため忠義申上候間、親分の罪を軽く相成るよう奉願上候

四十二年六月二十六日

赤坂警察署御中

銀次乾児一同

留置場の銀次は、大名生活から一夜で豚箱生活に転落し、南京虫、虱、のみ、蚊の攻撃にあってしかめっ面をした。臭い飯も碌々咽喉へ通らず、南京虫に嚙まれた痕が腫れあがる。半狂乱になって独房の中を暴れ廻り、鉄格子に前歯をぶっつけて二枚折ってしまった。実はこうした狂暴を働いて放免策をはかったのであるが、効力がないと見てとると、こんどは泣き落しにかかったがそれも駄目。そこで更に一策を案じ、留置場から出してくれたら竊盗故買団一味を密告すると上申したが、これもウソであることを見破られて取上げられない。さすがの銀次も逃れられぬところと観念して、今までの罪状を逐一自白した。その自白にもとづいて、贓品は毎日荷馬車に二台三台と運びこまれ、被害者の判らない品物を警察署に陳列して、心当りの者に見せることにしたので警察はたいへんな雑沓——赤坂署ちょっと白木の向う張り——こんな川柳が出来たのもその時である。署では混雑整理のために展観時間を午前八時から午後六時までに制限して、入口に天幕張りの受付を設け番号札を渡して見せた。往来にはパン屋、氷屋、駄菓子屋などの商人が店を並べて繁昌したと云う、全く嘘のような話であった。大検挙のきっかけとなった柏田盛文の時計もこの展覧会に現われ、令嬢文子が出頭して、厚く礼をのべて受取って帰った。

仕立屋の末路

留置場へぶちこまれて十日程、調べ室に引出された銀次は、髪も伸び思いなしか頬の肉が落ちて髯が蓬々。そこへ、禿虎が引出されて来て調べ室で二人の対面。

「虎、おらの年貢の納め時がさたのかも知れねえ。たぶん、この調子じゃ検事局送りになって予審に廻されるだろう。そうすりやァ調べも長くならァ。いつまた、お前と逢えるか見当がつかねえ、今のこの身の上。なあ、おめえも身体をでえじにしろよ」

豪気な禿虎も、鼻を鳴らして涙をごくりとのむ。銀次は後事を禿虎に托して別れを惜しんだ。

それから三日目、七月十三日午後零時半、世間はお盆の支度に忙しい。留置場の格子から薄暗い牢内を覗きこんで刑事が、

「銀次、いよいよ裁判所へ廻るぞ、さあ支度をしろよ」

「いよいよ送られますか」

銀次の顔が曇る。銀次は留置場の前で髪を刈り、髯を剃ってさっぱりした顔になる。家から差入れの帷子に着換えようとしたが、また思い直して、来る時に着てきたフランネルの着物をきて、紋羽の腰巻をしめ、セルの羽織を頭からすっぽり冠った。

「旦那方、えらいお世話をかけやした。留守中、家のことをお頼み申しやすぜ」

「ああ、心配するなってことよ」

「もういちど、娑婆の風にふかれる時がきたら、銀次、改めて旦那方にお礼に上りましょう。改悛してお国のために尽すか、それとも、それとも、――悪党の箔をもう一枚つけるか――」

物凄い形相で刑事をジロリ睨み皮肉った。

「監獄へ行くのに、こんなものは要るめえから、虎の奴にやっておくんなせえ」

左手に箝めていたプラチナの指環を抜き、現金十両と山高帽子を刑事の前に出す。

「酒も女も博奕も法度の監獄への小遣は五両もありゃ沢山だろう、えッ、へッ、へッ……」

五両を懐中に立ちあがると、刑事が腰縄をかけに後ろへ廻った。

「おっと、とッ、とうッ。ちょっと待っておくんなせえ、痩せても、枯れても天下に聞えた掏摸の親分銀次様だ。いまさら、こうなつて、逃げも隠れもしねえ。外聞が悪いから縄なんか、かけねえでおくんなせえ、真っ平御免蒙るよ。それから、人力車はこの赤坂で一等新らしい綺麗なやつを頼みますぜ」

銀次のわがままも、これが云い納め、聞きじまいと思って、署員も云うがままにしてやった。銀次は幌を倒した車上にふんぞり返って肩で風をきる。二人挽きの車は威勢よくほいッ、ほいッと人混みを掻き分けて、裁判所の赤煉瓦の建物さしてまっしぐらに走る。

銀次は全盛時代、下谷金杉を本拠に、駒込動坂に本宅、下谷坂本におくにの実母しんに質店を出させ、深川に五、六十戸の家作を持ち、月々上がってくる家賃がその時分の金でざっと二百両あった。湘南江ノ島に別荘があって、現金で五、六万円はいつでも手許に置き、預金も六、七十

万円あった。四十一の厄年に縄張りを子分の仙公に譲って、仕立屋二代目を襲名させた。銀次は掏摸の仲間に身を投じて十年余、相当の金を貯めこんだが、こんな危ない商売は、いつまでもやっているものじゃないと、しみじみおもった。

この辺が見切り時、堅気になって雑貨屋でもはじめ、のんきに世の中を送ろう――そんな考えから跡目を仙公に譲った。ところが、大親分銀次が四十台の若さ、働き盛りでの引退は、子分がうんと承知しなかった。その反対が二代目親分仙吉排斥の火の手となって燃えあがり、どうにも治まりがつかないので、仕立屋の身内をまるく治めるために銀次は不承無承引退をひっこめて、再び親分の座に据った。それから一年――明治四十二年の大検挙でとうとうお縄を頂戴したのである。

銀次の仕置で、彼の築いた巨万の富も、浮き雲の跡形なく消散した。おくにも、銀次の入牢中に冥途へ旅立ち、父親に離れ、母親に先だたれた子供は、可哀そうに路頭に迷った。

銀次という親分

明治一世を風靡した掏摸の大親分仕立屋銀次を荒川のほとりの隠れ家に訪ねた。泣く子も黙るといわれた銀次親分とは、こんな男だった。

親子擁して泣く

説教強盗事件の捜査の苦労が募って、ついに、警察病院のベッドであの世の人となった名捜査課長中村知二氏が、まだ、元気だったころのある日――

警視庁捜査課長室で世間ばなしをしていたら、中村課長が突然

「君、面白い話があるよ。仕立屋銀次が近く出獄するらしい。あの男の話を聞いてみたまえ、きっといいタネになるよ」

とご機嫌で教えてくれた。

私自身も、仕立屋銀次という名前は、幼いころの印象に、はっきり残っている人物だったので、明治の掏摸で鳴らした親分の風丰も語り草に見ておきたいし、どんな話題をもっているか、

それにも興味があったので、是非会ってみたいという好奇心も手伝って、その日の夕暮れ近くに、巣鴨刑務所に自動車を飛ばせた。

刑務所の鉄門が、陰気な音をたてて、ぎいーッと八文字に開いた。赤い獄衣を著た刑期の軽い囚人が、四、五人で土運びをしていた。娑婆の風にあたっている人間をうらやむように、かれらの視線が一斉に私の方にむいた。

なんとはなしに気の毒なような気がする。

刑務所の受付口から、名刺をだして所長に面会を求めると、会議中で会えないという返事。あらためて、典獄補に面会を申込む。

受付が

「御用件は」

と聞く。

「近く出獄するもののことについて聞きたいのです」

「しばらくお待ちください」

それから、卅分ばかり殺風景な応接間の火の気のない冷たいところで待たされた。典獄補の部屋に通されて、さっそく

「仕立屋銀次はいつ釈放になりますか」

と聞いてみた。

「仕立屋銀次――それは本名じゃないのでしょう。本名はなんというのですか」
「さァ、実は私も本名は知らないのですがね。とにかく、明治時代に掏摸の親分として鳴らした男ですよ。おわかりにならないでしょうか」
「ちょっと待ってみてください」
釈放者名簿を丹念にくって調べてくれた結果、通称、仕立屋銀次は本名富田銀蔵であることがわかった。
出獄後の落ちつき先は、東京市外×××町××番地の伜の家。
それだけ聞いて、私は刑務所を出た。

昭和三年の暮。
銀次は典獄と教誨師の情の言葉に送られて再びこの娑婆へ帰ってきた。
「富田、お前もいい年だ。子供のことも考えたら、こんど、ここへ来るようなことのないようにしてくれよ。寒い季節だ、身体に気をつけてな。
それから、心配ごとがあったら、遠慮はいらないから、いつでも相談にくるんだぞ。思案にあまって、悪い了見を起すより、その方がどのくらい、いいかしれないぞ、わかったね」
「典獄さん。永え間、えらいお世話になりました。もうこれに懲りて、どんな苦しいことがごぜえましても、ご厄介はかけませんよ。

皆さん、ご機嫌よろしう……」
剃刀の刃のような師走の冷たい風が、電線を掠めて、ひゅう、ひゅう唸っている。幾年ぶりかで娑婆に出た嬉しさで、銀次の胸はいっぱいだった。
面会所には伜たちが著物などを持って迎えにきていた。
「お父っあん……」
「伜か……」
抱き合って泣いた。言葉も声も出なかった。
巣鴨の赤煉瓦の鉄門が音をたてて開いて、銀次は吐きだされるように町の風にあたった。
籠から放たれた小鳥のように。
震災で東京の町もすっかり変った。伜に連れられて郊外の町にあるささやかな住居の二階に落ちついた。
「お父っあんが監獄に行ってから、孫は世間から爪弾きされ、いろんな圧迫や冷たい眼で見られながら、泣きの涙で大きくなった。でもなァ、中学も卒業して今じゃァ立派な会社に勤めるようになったよ。
懺悔をすりゃあ昔の罪は、みんな消滅するんだ。もう、年も年だし、孫が可哀そうだと思ったら、この辺で真人間になっておくれよ、ねえ、お父っあん」
銀次は、伜の涙語りをだまって、じっと聞いていた。そして

「お、おれが悪かった。す、すまなかった。勘弁してくンな。おめえたちの面倒もろくろく見てやらねえで、俺あ、こうして意見されたり、老ぼれておめえたちの厄介になるのが、ほんとに、面目ねえよ」

銀次は、すすり泣く。伜も泣いている。

「善が亡びて、悪の栄えたためしゃあ、昔からありゃあしねえ、もう真人間になるよ」

銀次は伜の前に誓った。

その夜は、親子水いらずで、安らかな一夜をあかした。

私は、出獄したその翌日の朝、荒川にほど近いその隠遁の家に、銀次親分を訪ねた。

二戸建二階家の、さよう、家賃にしたら二十五円くらいの家である。

表札は「富田」と出ている。案内を乞うと、年のころなら廿六七の、ちょっと粋なおかみさんが、乳呑児を背負って、玄関の二畳に出てきた。

「親分はおいでですか」

おかみさんは、胡散臭そうに、私をじろじろ眺めたのち

「どなたさまですか」

名刺をだして、ぜひ、親分の懺悔話を伺いたいと考えて、やってきたものです。実はなかなか会っていただけないだろうと思いましたので、親分が昔、昵近にしていた警視庁刑事△△さんの

紹介状を持ってきました——と紹介状を出して、来意をつげた。

銀次という男

おかみさんは、もじもじして、当惑そうな様子だったが、

「お父さんは、今、外出しておりましてわかりませんから、また、来て下さい。でなければ、私の方から、御返事しますから、お所を書いて置いていって下さい」

で、私は住所を書いて、封筒に切手まで貼って、きっと、御返事を下さい、と、言ってその日は帰った。

二日待ったが、何の返事もないので、三日目に、菓子折りを持って、また出掛けた。

前に会ったおかみさんが、気の毒そうな顔をして、

「お父さんは、会うのは厭だと申しておりますので」

という。

私は、親分に会っても、決して、悪いことを書くのでなく、出獄後の親分の懺悔の生活を知りたくて、斯うして、幾度も、足を運んでいるのであるから、そんなことを云わずに、どうか会って欲しいと頼んだ。

私の熱心に動かされて、それでは、もう一度、聞いておきますと、云ってくれた。

私は菓子折りを無理に置いて帰った。

翌日、返信つきの電報で、返事を促したところ、会うから、朝十時に来てくれとの返事を得た。

約束の時間に出掛けた。

銀次の佗住居は、玄関の二畳を上ると、すぐ二階へ上る梯子段になっている。

顔馴染になったおかみさんが「どうぞ、お二階へ」と案内してくれる。

二階は四畳半と、六畳の二た間で、四畳半の方には、今時、見られないような、かなり時代かかった箪笥や、戸棚が置かれてあって、銀次全盛時代を、忍ばせるに充分な気がした。

床には、安物ながら、何かの絵がかけてある。

おかみさんが、お茶、菓子、火鉢などを如才なくすすめてくれる。

座布団の上にのって、初めて、見る銀次親分の容貌を、ああか、こうか——と想像しながら、一ぷく吹かしていると、みしりみしり——梯子段を上る足音がして、待った親分が唐紙の向うから、中腰になって、入ってきた。

坊主頭に、やわらかい立縞の着物をきている。面長で、顔色も艶々しく、これが、ながい間、刑務所に入っていた顔とは思われない。さすがに眼光が鋭く、ジロリと一と眼、見られた時は、恐らく、気の小さいものは立ちすくんでしまいそうだ。

でも、年は争われぬもので、抜けた歯の間から、いきが洩れて、話すたびに、唇がぱくぱくする。

「ええ、お待たせ申しやした。あっしが銀次でごせえます。

さあ、どうぞ、おあてなすって。洋服じゃ座っちゃ窮屈でげすよ。お楽になすって下せえ。

あっしゃね、こうめえても、でえのハイカラで、若い時分には、洋服がでえ好きでげしたよ」

客をそらさぬ才気が口をついて出る。

「刑務所では何をしていました」

「裁縫をしてましたよ」

「永い、牢獄生活で随分、苦しかったでしょうね」

「昔と違って、近頃の監獄はよくなりましたよ。それに、典獄はじめ、いい人でな。なにか、機会があったら、是非、褒めてやって下さい。大事にして貰いました。年もとっているし、婆婆にいる時分は、親分と立てられていたので、入っているうちも、まア、言えば仲間の頭のようにして、月日を送ってきました」

それから、親分の古い記憶を辿って、明治時代の掏摸の話を聞いて、その日は二時間くらいで辞去した。

銀次の言うには、なにしろ、古い話で、そう一ぺんに、畳みかけて聞かれても、すらすらと出て来ないから、暇を見て、ぽつりぽつり想い出を話すという。

私も尤もなことだと思って、じゃ、よろしく頼みますよ、と言った。
玄関へ送ってくれた銀次は、僕に後ろからオーバーを着せてくれた。
そして、紙にひねった物をさっと出して、
「先生、お恥かしうございますが、出たばかりで貧乏してますから、笑ってお納め下せえ、これは俥代です」という。
私は笑った。
「親分、つまらないことで心配してはいけない。そんなものはいらないよ。実は、この話を聞かして貰ったら、私から、心ばかりながら、お礼をしようと思っているのだから——」
銀次は、私の言うのを聞いて、そのおひねりをひっこめて、しまった。
その後、銀次から聞いた話をまとめて、サンデー毎日に「仕立屋銀次懺悔録」と題して連載するようになってから、私の家や、勤め先きや、警視庁でしばしば会った。
出獄後の銀次は、人に会うことを恐ろしく嫌っていた。だから、突然、訪問しても決して会わない。前もって、手紙で会いたいから、何日の何時に××で待っているようにと言ってやると、その時刻に指定の所に顔を出している。
「親分、どうして、そんなに顔を見られるのが、いやなのかい」
と聞くと、えへへ……とよく頭をかいた。
私の妻は、銀次が来訪すると「あなた、大丈夫、暴れやしない、お気をつけなさいよ」と、ひ

やひやしながら、銀次を私の書斎へ通すのが常だった。
夏の頃はよく、五時頃にやってきた。朝寝坊の私は八時にならなければ起きない。すると銀次は、私の家の門が開くまで五時頃からじっと待っている。
時々、待たせて気の毒だと思うことがあるが、本人は「何さ、かまやァしません」と笑っている。
私の妻は、恐ろしく、彼をこわがったが、このように、人がよく、時々、愛嬌をふり撒いて、
「ねえ、先生、お宅の御新造さんは、なかなかよく出来ていますね、大事に可愛がってやらなきゃいけませんぜ」
なんて、言ってゆく。
夏の頃、何時もお邪魔するからと言って、妻に浴衣かなにか持ってきたことがある。
「親分、そんな義理はよした方がいいよ」
と、云うと、
「何さ、気持ちだから、機嫌よく受けておくんなせえ」
と、いって、どうしてもひっこめない気性の男でもある。
ある日。
私の書斎で、煙草を吹かしながら、
「親分、今でも、掏摸が出来るかい」

と聞いて見た。

「先生、あっしゃあ、いつかも話したように自分で掏摸を働いたことはない。でも、掏摸の仕方は心得てます。

まず、こう云う手つきでね」

と云って、右手の人さし指と、中指の二本を出して、掏摸は、この二本の指の活動でげすよ。この指を、こう云う風に、ポケットへ入れるんでげす——と、私の洋服へすうと突き込む。

気を許した、なんでもない仲でも、そうされて見ると、薄気味の悪いものだ。

二人で、一緒に電車に乗ったことがある。電車の中で、銀次がニコニコしながら云うのだ。

「ねえ、先生、こないだ、団子坂のところで、昔の子分が相変らず稼いでいやァがるので「やいツ」と睨みつけてやりましたよ。するとね、奴さん、恐ろしく驚きやがって、おお、お珍らしい、親分じゃごぜえませんか、お出なすったってことは、風の便りに聞きやしたが、何処にいなさる、とこう云う訳でさ。で処を知らせてやって、堅気になるように言ってやりましたらね、二、三日して、小遣にしておくんなせえと二十両送ってきやしたよ。

あっしが、出たことを知ると、昔のやつらが集まって来て、また、舁ぎ立てやがるので、なるべく、人に知られねえようにしています」

こんなこともあった。

私の勤め先きへ、忙しく電話をかけてきて、

「うめえ、金儲けがあるから、知慧を貸して貰いてえ、今すぐ行くから会ってくれるか」

という。会うから直ぐ来るようにと、返事をしてやったら、三十分程してきた。

ニコニコしながら、

「先生、この話がうまく行くと、安く見積っても、これでがすよ」

と、指を二本出した。

「二本てえといくらだい」

「二タ箱の仕事でさあ、つまり二千両」

彼は、非常に乗気になってその話をして、私に、やってもいいかと聞いたが、あんまり感心したことでないので、折角、悔悟した親分が、そんなことで、また昔に返ってはならないから、やめるように注意してやった。銀次は私の云うのを聞いて、

「先生が、そう仰言るなら、やめます」

と、あっさり、あきらめて帰った。

その頃の銀次な、ずっかり善人に立ち帰っていた。

子供がみんな成人して、それぞれ堅気の商売をして、小遣を銀次のために送ってくる。

娘は、ある処で、自前芸妓をして楽な生活をしているところから、銀次は、多くこの娘の世話になっていた。

銀次が昔の我儘を起して、娘をうったり、なぐったりしたことがある。

耐えかねて娘が、銀次が昔、馴染にした警視庁刑事のところへ泣き込み、
「お父さんが乱暴して困りますの、どうにか説諭して下さい」
と持ち込んだことがある。その話を、あとで聞いた私は、銀次に、
「年甲斐もなく、娘をいじめたりしちゃよくないね」
と注意したら、
「どうも面目ねえことをしました」
と頭を掻いたことがあった。
銀次も、昔は随分贅沢な生活をしたらしいが、それにくらべると出獄後の生活は実に気の毒だ。
いつだったか、私は銀次に、検挙された時分には、随分、財産があったというではないかと聞いた。すると、銀次はほろりとして、
「本所に二、三百の家作と、江ノ島に別荘を持っていた時代もあったのですが、あっしが挙げられてから、その財産がどこへ、どうなってしまったのか、皆目ゆくえ知れず、悪因悪果とあきらめてはいますが、全盛時代に足を洗って、堅気になっていたらと、つくづく思いますよ」と涙を流していた。
こんな風に、その昔、飛ぶ鳥も落す勢いを見せた銀次も、六十四の春を迎えたころまでは、静かな懺悔のうちに朝夕をおくり迎えていた。

獄窓に生涯を送る

ところが、死んだおくにや、子分の冥福を祈って、時折の墓参や、可愛いい孫の守に他愛ないのどかな日を送ったのも、ほんの束の間だった。
いちど、身にしみこんだ悪夢は、容易なことで洗いおとせない。見果てぬ夢に栄華の昔を追った。世間の波風は荒く、酷しく、改悛した老銀次の生活は、嶮しい茨の道だった。
真人間になろう、どんな貧乏にも堪えようと誓ったのであるが、意志の弱いかれは、集まってくる子分にそそのかされ、誘惑に勝てず、出来もしないのに、下手に掏摸を働いて娑婆の風にあたったのも一年足らず、淀橋警察署に検挙されて、再び牢獄に繋がれる身となった。
昭和六年秋のことで、獄窓に冷たい風が吹きこみ、獄舎の雑草に秋の虫が鳴いていた。その虫の鳴く声が細つてゆくように、銀次の五体も衰えて、もういちど、この世の人とはなれない最後であった。

拳銃無宿

旅役者のなれの果てが、拳銃無宿のやくざになって、時に支那服をまとい満洲を跨に飛び歩き、時に女装して捜査網を突破、ポケットに忍ばせた拳銃の引金に手をかけたが最後、ずどンと一発血しぶきをあげて警官を斃し、市民を殺した稀代のギャングの捕物奇譚。

品川駅構内の警官殺し

三十年の新聞記者生活で随分いんろな殺人、強盗事件にぶっつかったが、アメリカ製ギャング映画を地でゆくスリルと、日本と満洲を舞台にしたスケールの大きい点でピス健事件は、蓋し大がかりな捕物であった。一時、ピス健と云えば泣く児もだまるほどに世間を騒がせたものだ。大正十四年十一月九日午前四時四十分、品川駅構内請願巡査派出所の電話がけたたましく鳴った。勤務中の飯束喜代政巡査が受話器をはずして耳にあてると、八ツ山橋下にある品川駅構内南側信号所からの電話だ。電話口に出ている駅員はよほど狼狽していると見え、言葉もひどくせきこんで早口である。

「モシモシ構内の派出所ですネ、たった今、八ツ山下を一人の男が歩いているので駅員が呼びとめると、ピストルを発射しながら構内の方へ逃げて行きましたからお知らせします」

飯束巡査は剣道二段の腕前である。帯剣のバンドをぐっと締め直し、同僚の久保田巡査に情況報告をした上

「じゃアちよつと行ってくるぜ」

と勇ましく夜明けの線路へ駈けだした。構内の赤と青の信号が明滅している。早曉の風が頬に冷たく、構内で入換え操作中の機関車の響きが耳をつんざく。

飯束巡査が出かけて十分も経ったろうか、また、派出所の電話があわただしく鳴った。久保田巡査が電話口に出ると

「こちらは、東高輪信号所ですが、只今、貨物列車分離所の近くにお巡りさんが斃れています。怪我をしているようですから、すぐ来て下さい」

ガチャリ……久保田巡査は急いで現場へ駈けつけた。斃れているのは、たった今、別れたばかりの飯束巡査の変りはてた姿だ。飯束巡査を抱き起して

「飯束君！　飯束君！」

返事がない。胸に手をやって見ると心臓の鼓動はもう止っている。飯束巡査は頭を北に線路外に仰向けに仆れ、上衣の第一釦から第三釦まで外して胸部を開き、右手をまっすぐに伸して、左手を軽く握り創痕の個所にあてていた。兇漢にやられた後で自分で傷を調べたものらしい。傷は

右鎖骨直下胸骨縁に致命的な重傷を負っている。兇器はよく切れる短刀らしい。これは犯人が捕まってから、その自白で判ったことであるが、この時、飯東巡査は殺された現場附近で線路伝いに逃げてくる犯人とぶっつかった。賊はピストルを擬して巡査目がけて引金をひいた。弾が出ない。もう弾がきれてしまったのだ。賊は「しまった」と叫んだ。飯東巡査は腕に覚えがあるのでこれを見て得たりかしこしと相手を脅すつもりで帯剣を抜き放ち正眼に構えて、ジリ、ジリと詰めよった。一分の隙もない身構えだ。賊は、手にしたピストルを線路上に投げ出し

「恐れいりました」

と頭をさげた。そして、地べたにうずくまった。

「神妙にしろッ」

飯東巡査は安心して手錠をかけようとした。その途端、賊は隠していた短刀で巡査を一と突きに刺したのである。

この兇悪な賊は一体何者であろうか。品川署の捜査本部ですぐに会議がはじまる。結論として出たのは、その前夜南品川浅間台小学校の校長関根喜四郎さんの宅に押入いって同居の寺内訓導をピストルで射殺した犯人と同一人とほぼ断定された。さらに、同一犯行の手口と思われるものを調べて行くうち、その前月の十月二十八日午前二時、横浜市久保町六丁目二十九番地大塚沢次郎さんの家に押入って、家内のますさんをピストルと短刀で脅して現金三円を奪って立ち去った賊。越えて二十九日午前二時半、鶴見町生麦一三九六番地菓子屋荻原昌次郎さんの家に侵入して、

昌次郎さんを縛りあげ、妻のふみさんを脅しつけたが、気の強いふみさんが、商売用の饅頭をいれる箱を手当り次第投げつけたので、さすがの賊も逃げだした。

十一月五日午前零時半には、東京大森不入斗（いりやまず）一四七一番陸軍御用商人河合清次郎さんの家に忍びこんで、雇人の桃瀬よしさんを脅し、現金五円を奪った上、よしさんに案内させて隣の杉山さんの家に押入ろうとしたが失敗して逃げた。

頻々と起る兇盗事犯

以上三つの強窃盗も、どうやら、この賊であるこ.とに間違いなしとの断定がついた。同一犯人の犯行と云う断定はついても、犯人がどんな男で、前科があるのか、ないのか？　人相は？　指紋とか手懸りとなる遺留品はないのか――捜査本部では、こうした捜査資料を集めるのにはまた一と苦労である。そうこうしているうちに、また、新らしい犯行が続々発覚し、いずれも同一人の仕業であると云うことになった。

無宿銃挙

その一つは、十一月十一日午前三時に神奈川県戸塚町吉田の宝蔵院に押入り、住職成島隆徳さんの家人二人を縛りあげ、現金八十円を奪った。

その二、十四日午前二時、大阪府三島郡茨木町茨木上中条飲食店喜楽亭増井増吉さんの家に押入り、騒いだ女中田中あいさんを射殺し、追跡する警官に乱射を浴びせながら逃走した。

その三、喜楽亭を襲った翌日――十五日午前五時、大阪市東淀川区東片町一三九番地正福寺に

押入り、住職中井玄郎さんら四人を脅し現金二百円を強奪した。

その四、京都市下京区梅小路西入七条大門貴金属商前田沼作さんの店へ押入り、現金百二十円を強奪した。

その五、兵庫県加古郡高砂荒木村医師石山薫さんの家に現われ、ピストルと短刀で脅し、現金と金時計を奪った。

その六、京都洛西京極村川勝寺内尼寺地蔵院に短刀をもって押入り、尼さんを脅して現金十余円を奪った。

この外、木村医院に押入った時、隣家の伊勢薬店を襲ったのも同一犯人と見られた。

十、十一の二カ月に兵庫、大阪、京都、神奈川、東京と風の如く現われ、風の如く姿を消す俊敏な兇盗――警察はまったく愚弄されている形だ。ところが、これらの犯行中に悪運の尽きと云おうか、犯人の全貌が捜査当局の手にしっかりと握られてしまった。と云うのは、茨木町で喜薬亭に押入った時は、二人連れで逃げる時片われが捕まった。この片われは呉市今西通り鍛冶職姫野薫（十八）と云う青年。姫野を追究して主犯を質したところ彼は

「相棒の男とは、十三日午前九時ごろ大阪中ノ島公園のベンチで偶然に知り合った。二人で中ノ島図書館に入って時間をつぶし、二人でうまい仕事をしようじゃないかと誘われるままに、つい、一緒になって悪いことをしてしまいました。その相手の男と云うのは、名前もなにもまったく存じません」

この供述にもとづいて、十三日の中ノ島図書館の閲覧券を調査すると次の一枚が現われた。

大阪府立図書館図書普通閲覧証

世界奇聞全集、蠻勇豪語、偽ジゴマ、大大阪案内、最新大阪府地理、大阪（二字不明）風土記、大阪府市要覧

東区淡路町二〇五会社員　本田　俊

兇盗は本田俊と名乗る人物である。この筆蹟を手掛りとして、本田俊――実はピス健こと大西性次郎（三十九歳）と判った。さて、ピス健とは、どんな過去を持った男であろうか。

不良少年から旅役者

田舎の小学校を卒業した鼻たれ小僧の性次郎は、親の家を飛び出して東京へ来た。年は十三だが強情できかん気の小僧だった。親に無断で家出して東京へ来たものの、別に寄る辺があるとか働き口の目的があっての上京ではない。東京へ出てウロウロしているうちに、知り合になったものの世話で、浅草馬道辺の経師屋の弟子に住み込んだ。経師屋の小僧で朝から晩までこき使われるのがたまらない。根が怠けものでぶらぶら遊んでいたいのだから始末が悪い。叱言を云えば反抗して喰ってかかるし、どうにも手がつけられない。あんまり叱言を云われるので経師屋を自分

から追ン出てしまった。近くは浅草公園の享楽街である。毎日浅草六区をうろつく浮浪人となった。夜は観音さまの縁の下や寺の境内に野宿することもあった。そんな生活をしているうちに、六区の少年達の間でいい顔になった。不良少年××組の団長とかなんとか云われるようになった。悪の花はこうして日増しに身につき、足を洗うことの出来ないドン底に沈んで行く。公園でタカリの一つもやるチンピラの上前を刎ねるほどの顔になり、六区の映画館（当時は活動写真）や寄席、芝居小屋なども木戸をツカれないで出入りする顔になった。

「性ちゃん、お前さんそうやってぶらぶらしているなら、一座に入って田舎廻りの旅に出ねえかい」

チャンバラ芝居の楽屋へよく遊びに行く性次郎をつかまえて番頭が誘った。楽屋で役者の化粧するところを毎日のように見ているので、見よう見真似で下手なりにも顔の一つもつくれようというもの。

「役者か、面白いな、一つ使ってもらうことにしようか」

田舎の町から村へ渡り鳥のように興行して廻る旅役者の群に投じた。町の小屋から人力車を連ねて町廻りをする時には、人力車の上から太鼓を叩いた。そうしたふしだらな生活をつづけるうち、博奕はうつ、女は買うで放蕩三昧にいよいよ身を持ち崩し、どどのつまりはお定まりの金に困ってつい悪い事をして、明治三十七年十一月まず最初は警視庁管下で挙げられて禁錮四年の刑を受けた。濡れぬさきこそ露をもいとえで、「前科者」の烙印を押され刑務所を出てからの性次郎は、悪党の金箔をつけた。刑務所を出ると、親につけてもらった大西性次郎では都合が悪く、守神健次、札本森之助、河井性次郎、本田俊一などの偽名を、その場、その場で、使い分けながら、悪事の数々を重ねた。

明治三十八年三月には窃盗罪で懲役六カ月、同年七月と云うから六カ月の刑期を終って出るとまたすぐ窃盗を働いて捕われ、懲役八カ月を言渡された。四十年十月には、またまた窃盗罪で捕われ、懲役一年六カ月の処刑で東京、浜松、和歌山の刑務所で苦役に服した。

百人斬りの森守健次

和歌山の刑務所を出た性次郎は、悪党の貫禄を誇示するために自分から「ピス健」「百人斬りの森守健次」と名乗って凄味をきかせた。そして、和歌山から神戸に流れこんだ。

明治四十一年六月のことで神戸は海軍大観艦式で賑っていた。わが海軍の威容を誇る艦艇が神戸港に集結し、見物は京、大阪、岡山、広島、四国の各地から集まって神戸の町はお祭り気分で賑った。性次郎は観艦式景気の神戸に職を求めてやってきた。しかし、神戸にも前科者の彼には好ましい仕事は待っていなかった。ええ、ままよ毒を喰えば皿までだと、むらむらと悪心がまた燃えあがった。神戸市元町三丁目の善照寺と云う寺に押入った。この時は、はじめから強盗のつもりで押入ったのである。寝ている住職はじめ四人の僧侶を枕を蹴ってたたき起し、針金で縛りあげて金品を強奪した。荒仕事をした後で座敷の柱に「東下り（あずまくだ）ハリガネ強盗義賊森神健次」と書

いた紙を貼りつけて、薄気味悪い笑みを口もとに漂わせて立去った。出掛けに善照寺の提灯を持ち出し、途中で非常線を張っている警官に会うと「ご苦労さまです」と素っとぼけて、警戒網を悠々突破したほどの糞度胸をもっていた。この善照寺の強盗を手はじめに、神戸市内で数件の強盗を働き、立ち退く時には申し合せたように、例のハリガネ強盗云々の貼紙をして行った。傍若無人、警察を愚弄した犯行に、兵庫県警察部と神戸市内各警察署は、警察の威信と面目にかけて検挙しなければならないと全警察官を激励した。県下一斉に非常警戒が連日行われ、蟻の這い出る隙もない有様。さすがの性次郎もこの非常線を突破することが出来なくて、西宮署御影分署の西田刑事の手で御用になった。西宮署に連れて行かれた性次郎はもう自暴自棄（やけくそ）で司法主任の調べにも、気がむかなければ返事一つしない。捕われて前非を後悔するどころか、毒を喰えば皿までだと警部や刑事に毒づいた。箸にも棒にもかからない強盗犯人として検事局に送られた。検事の調べにも同様の態度だった。公判廷に立った時も、裁判長の問うことにも、満足な答えをしないで不貞腐っていた。判決は改悟の情のないものとして無期徒刑を言渡された。神戸地方裁判所の公判廷においてである。性次郎は九州三池炭鉱で知られた三池の懲治監に送られて下獄し懲役に服した。この服役中に大正三、四年両年の恩赦減刑で再び娑婆の風にあたれないと思っていた彼の身の上にも喜びの日がおとずれて、大正十二年八月三池監獄を釈放された。娑婆に出た彼はその足で台湾に渡り、更に上海、天津、大連を放浪し、満洲に流れこんで馬賊の群に投じて一方の頭目になろうと大望を抱いたが、志破れて敗残の身を内地に舞い戻った。

なつかしい神戸に帰って、彼が第一番に訪ねたのは、免囚保護会の村松浅四郎さんだった。村松さんは傷心の性次郎を両手をひろげ温い心で迎えてやった。この時ばかりはピス健の眼にも涙が光った。村松さんが身許を引請け、県刑事課や神戸市湊川署長の庇護で更生を誓い、尼ケ崎市高地卯之助氏方で働き、一切の過去を秘して高地氏方の女中を妻に娶って人生の新らしいスタートをきった。

結婚生活に入ると同時にその頃神戸市兵庫でいい顔の親分大島組で使ってもらうことになり、大島組で出している「俠友」と云う雑誌の編集をやることになった。彼の周囲は過去に想像もすることの出来ないような善意の人達ばかりで、同じ世間にこうも違った社会があるものかと、彼は過去を顧みて人生の光明をそこに見出した。仕事に精を出して昔のピス健ではなかった。実直な働き者の大西性次郎であった。新家庭は勤め先の大島組とはさほど離れていないので、昼飯の時間には家に帰って新妻の給仕で茶漬をかっこむのだった。仕事が終って疲れて帰れば愛妻が笑顔で迎えた。夫婦仲も睦じく、女の子供が産れて一家はいよいよ春のおとずれである。刑事課長はそんな家庭内の様子をわがことのように喜び、妻女に内密でコッソリ官舎に彼を呼んで牛肉をつっつきながら、彼を激励してやった。

宿無銃挙

冷たい世間に怒りのピストル

周囲の理解のある人達の善意と、妻の愛情でひたむきに更生の路をたどるピス健のささやかな

「幸福」が心ない警官によって、掻き乱され、ピス健をして再び狂暴の本性に戻らせる事件が持ち上った。かれの幸福はあまりにもはかない砂上の楼閣であった。

性次郎はいつものように「俠友」の編集の仕事を終って、夕暮れの街をたのしいわが家を指して急ぎ足で帰った。玄関のガラス戸を開けて「只今ッ！」と声をかけた。いつもなら「お帰りなさいッ」といそいそと玄関に出てくる妻女の声も姿もない。彼は夕餉の支度に買物にでも出掛けたのであろうと靴を脱ぎ座敷に通ると、座敷の片隅で、両方の袂を顔に押しあててていとしい妻がシクシク泣いている。彼はハッとした。おや、なにかあったナ。でも、出来るだけ心をおちつけ

「どうしたんだい」

後ろから抱きかかえるようにして起した。涙にほんのり薄化粧の白粉がよごれている。妻女は彼をうらめしそうに見あげて泣きじゃくりながら

「あなたは私を騙していたのね」

「騙していた？　お前をどうして僕が騙していたのさ」

「いいえ、空っとぼけて、かくさなくてもいいわよ。警察のお巡りさんにみんな聞いてしまったわ、あんたは恐ろしい強盗の前科者なのね」

「強盗の前科者」

「ええ、そうよ、嘘じゃないでしょ、私を騙してたンでしょ」

彼は脳天をハンマーでガンとうちのめされたほどの衝撃を感じた。ああ、俺の幸福もこれで凡ての終りだ。彼の全身から一時に力が抜けてしまったように見えた。

それも、これも、心ない戸口調査の警官が、何も知らず幸福に陶酔している妻女に口を滑らせて性次郎の前科を喋言った結果である。しばらく、じっとうつむいていた性次郎は、妻女の怒りに対して一言もしなかった。なにか心に決するところがあるのか、眉がピリリッと動いた。

それから数日の後、ハッキリ記せば大正十年十月某日。刑事課長の机上に

さらぬだに淋しき秋の夕暮に情振りすて立つやつらさを

の一句に「満洲へ行きます」との手紙と最近撮った写真が添えてあった。

社会を呪い、世間に挑戦するピス健が、世話になった刑事課長に遺す善人として最後の言葉であった。

銃無宿

悪に返り咲いたピス健は、神戸から姿を消すと、その足で満洲奉天に高飛びした。奉天で質屋を襲撃して現金二百円を奪った。つづいて奉天大西正門の満人の豪商邸にピストルを突きつけて侵入し現金二千円を強奪した。しばらく奉天市内に潜伏して、官憲の様子を窺がった上安全であることを確かめて、奉天を脱出し大連から淡路丸で神戸に帰った。神戸では警察にも顔が通っているので、本船からランチに乗り移り、ランチの中に半日隠れていて警戒のゆるむのを見極めてコ

ッソリ上陸し、地理に明るい神戸から大阪に逃れ、梅田駅から上り特急で東京に入りこんだ。彼が上京の目的は時の内閣総理大臣加藤高明、内務大臣若槻礼次郎暗殺のためであった。彼は政治の改革は政界の大官巨頭を槍玉にあげて、政界の浄化をはからなければ駄目だと、常日頃から不穏の言動に出て、警察から尾行をつけられていたこともあるほどで、強盗殺人で荒みきった心は最後に、首相を暗殺して一層悪名を高からしめようとの魂胆もあった。首相、内相の身辺を偵察したが、警戒厳重で近づく隙がない。あきらめて、日本銀行の襲撃を思いたち、毎日日本銀行附近に出かけて附近の地理を探り様子をうかがった。日本銀行の襲撃は、倉庫を破って大金を奪い、政界革新の資金を稼ぐためだと、後になって供述している。兎に角、周到な計画で自転車一台を買い、満洲で買ってきた支那服を著て、変装して探索の手をいれて見たが、警戒が厳しくてとても襲撃の目的など果すことは困難であることを悟った。やむなく、この計画も断念して、再び満洲に逃亡を思いたち、十一月二十日に下ノ関を出発して二十二日奉天につき、そこでまた五、六軒の強盗を働いて旅費を稼ぎ、支那人に変装して十二月五日にまた内地に戻った。この逃亡中に彼は太田警視総監、小栗大阪府警察部長、高輪警察署長等に脅迫状を送り、ピス健の神戸の留守宅にも二十二日に奉天についたと知らせてきている。

警視総監宛の脅迫状には

「警視総監はじめ各署長よ、どうか部下を督励して自分の人相書を全国に配って乗降客を一人一人調べて下さい、自分はこれから上京します、厳重な捜査を祈ります」

また高輪警察署長宛のものには、飯束巡査を刺殺した顛末を詳しく述べて

「自分はあの時飯束巡査を殺すつもりではなかったが、巡査が抜剣して来たので、巡査を殺すか自分が殺されるか二つに一つを選ぶ場合だった。あとで同巡査には多勢の家族のあることを知り、実に気の毒に堪えない、子供に免じて自首したいが、まだ大望のある身故、それを遂行するまでは自首することは出来ない」

と義賊気取りで書き送っている。また国民新聞宛のものには

「俺の犯行であることを世間に知らせてくれて有難う、このお礼には必ず社に出かけて行く」

言ったことは、きっと実行する犯人だったので、この脅迫状が舞いこんでから、国民新聞社には屈強な警官が泊りこんで、警戒にあたった。

彼は非常線警戒網を巧みに突破して東京、大阪、神戸、下ノ関、満洲と自由自在に出没し、逃亡術に妙を得ていたが、その秘訣について語るところによると、非常線を突破する時は、必ず途中で道づれを一人つくって、親しそうに話しながら、網の目をくぐる。もし、連れのない時は、自分の方から交番に立寄るか、警戒している警官に話しかける。この時は、必ずズボンのポケットの中でピストルを握っていて、巡査の態度が怪しかったら、いつでも射撃して逃げる態勢をとることだ。また汽車に乗った時は用がなくても、必ず途中で三回下車することにきめていた。途中下車して自分が尾行されているかどうかを確かめるのである――これが逃亡術の秘訣奥の手ですよと苦笑した。神戸から満洲に高飛びするときも倉敷で下車して、四分間の停車時間を利用して、

駅前に駈け出し、自分の手でポストに投函している。ホームで駅員に頼むようなことは足がつくから要慎してしないのである。一事が万事このように細心の注意を払っていた。

女装の寝巻姿で捕わる

十二月十一日の真夜中、神戸三ノ宮警察署の刑事部屋を訪ねてきた男が、刑事さんに内密で話があると云う。当直の刑事がどんな話かと会ってみると

「実はピス健が今夜十時ごろ私を訪ねてきて、只今北長狭通り二丁目の星の家に泊っています」

――星の家と云うのはチャブ屋である。

刑事は意外な密告に

「お前さんは誰だネ」

「やつの友達でさア」

それッと云うので非番召集をかけた。のがれられぬとなれば、死物狂いで大暴れに暴れるにちがいない。この上、犠牲者を出してはならないと、腕ききの私服十人が決死隊となって、星の家に踏みこみ、周囲一丁四方は武装警官で物々しく堅めた。指揮官は小林三ノ宮署長である。午前一時、頃やよしと決死隊が先頭に立って星の家に踏みこんだ。一と部屋、一と部屋調べて奥の一室のドアをあけると、髪をハイカラに結った女が一人寝ている。おや、おかしい。相手の男はどこにかくれたかと眼を八方に配る。女は蒲団の上に起きあがると、いきなり私服にピストルを突きつけた。

私服は思わず、一、二歩退った。ハッとしたがすぐ心をとり直して女に飛びついた。途端に女のハイカラ鬘がすっ飛んだ。鬘をとった顔をよくよく見れば、まさしくお尋ねもののピス健だ。

「ピス健御用だッ」

「神妙にしろッ」

なまめかしい長襦袢の女装姿でピス健は手錠をかけられた。不意を衝かれ遁がれられぬと覚悟して神妙に首をうなだれた。三ノ宮署に曳かれて行く彼は、枕元にたたんであった黒繻子の衿のかかった大島の袷を着て、鶯色の女物コートを羽織り、鬘をかぶってしとやかに歩いた。女装がぴったり板についていて、よほどよく見ないと男の変装とは見えないほどの鮮かさであった。円舎廻りの旅役者時代の芸が逃亡の役にたったのである。

こうして、一世の兇盗の最後は劇的な一と幕で終った。

仏のひきあわせとでも云うのか、飯束巡査がピス健の兇刄に斃れてから四十九日の命日に彼は捕縛された。警視庁編集の「警察官善行録」には飯束巡査について次のように記録している。

数丁追跡捜査して一不審者を発見し誰何するや賊は矢庭にピストルを向けて飯束巡査を撃たんとした。剣道二段の腕を有する飯束巡査は抜刀して之に迫り、既に其小手先を斬らんとするや賊

はピストルを発射したが其弾丸が絶えていた為め大地に之を投げすてて反抗の態度を止め只管平伏して頭を垂れたのである。その時飯東巡査は賊を逮捕して同行せんと近寄るや賊は隠し持つ短刀を抜いて、突如君が胸部目がけて刺撃したので君は遂に不慮の死に遭遇した。併し天網は遂に漏さず飯東巡査の死後四十九日の命日に至って賊が神戸の一料亭に女装で潜伏中を発見検挙されたものである。

ピス健は捕われた時、現金七十一円とモーゼル拳銃一挺、実弾四十一発を持っていた。

二等寝台車殺人事件

大正十年のある夜、東京駅を発車した急行列車の二等寝台車内で大阪の顔役が鋭利な兇器で刺殺された。記事差止めのまま迷宮入りしたこの事件の背後に潜むものは、果して何であったか？

寝台車から滴る血

江戸情緒豊かな、新富座にほど遠からぬ京橋新富町に、数寄屋普請の凝った構えの大内旅館というのがあった。震災前の大正十年頃のことである。客筋は京、大阪方面の政界実業界の関係者で、一現の客は殆ど泊めない見識をもっていた。女主人を大内せいと呼び、この旅館の女将におさまる以前に、大阪南地で名の売れた姐さんだった。小肥りの粋な年増盛りで、いかにも女将らしい貫禄が備わっていた。

きょうも、夜の急行で大阪の本宅へ帰る旦那の阿野徳次郎と、差しむかいで盃を傾けていた。ほろよい機嫌の旦那は、女将の弾く三味線の間を拾うように、得意の節廻しで、

『一日逢わねば千日の、思いに私や患ろうて、鍼や薬の験さえ、泣きの涙に紙濡らし……』

と「忍逢春雪解」のひとくさりを語っていた。襖があいて三つ指をついた女中が、

「そろそろお支度のお時間でございます」

と知らせた。旦那の徳次郎は『男も愚痴にからまれて…』のところで、唄をやめて立ちあがると洋服に着換えた。

女将と書生に手廻りの荷物を持たせ、東京駅に着いた時には、もう午後七時三十分発の神戸行下り急行列車（第九列車）がホ！ムに入っていた。東海道線が電化される以前のことで機関車は黒煙を吐いていた。機関車の次が貨物車、一輛おいてその次が二号車で、二等寝台車が連結されていた。その二号車の入口のドアをあけて入ったすぐの、とっつきの下段2号が彼の寝台番号だった。月に二、三回は東京、大阪間を往復する彼は、手廻り品をボーイに托すと、ホームに降りて女将と話していた。

「あなた今度はいつお出でになりますねん」

「仕事の都合で三、四日したら、また出て来ることになるやろ……」

「そりゃ、お忙しいことですな」

発車を知らせるベルが鳴ったので彼はデッキに上った。ホームの大時計が七時半を指した時、汽車は西にむかって滑り出した。女将と書生はお辞儀をすると、

「ご機嫌よう、お気をつけて……」

と、手をふって見送った。

大正十年二月二十日午前一時三十五分、この列車は、深い眠りを乗せて浜松駅に列着した。

「浜松、浜松……五分間停車……」

駅員の声が凍りついた空気をふるわせて響いた。この駅は機関車に給水するので五分間停車である。検車手が白い軍手をはめた手にハンマーを持って、車輛の下にもぐりこんで一輛、一輛仔細に点検した。要所々々をハンマーで叩いて異常の有無を調べる音がレールに伝わる。順次異常のないのを確かめ、二号寝台車のところまできて、車輛の下に首をつっこむと、生々しい血が、ぽたり、ぽたり、雫となって枕木と砂利の上に落ちてきた。

「おや、血が滴る！　おかしいぞ」

検車手が不審を抱いて這い出した時に、汽車は動きだしたので、最後部の車掌室の窓から首を出している車掌の伊藤繁吉に、

「二等寝台車の2号室に異変がある。すぐ行って見てくれッ！」

徐行する汽車を追っかけながら、こう知らせた。伊藤車掌は列車ボーイの三谷敏夫と二人で急いで二等寝台車の2号室に駈けつけた。濃いグリーンのカーテンを開けると、五十がらみの乗客が白い毛布を紅に染めて虫の息である。二人はハッと顔色を変えた。

頸動脈切断が致命傷

明治五年新橋、横浜間を蒸気機関車が走ってから五十年になるが、急行列車の二等寝台車で乗

客が殺されたという事件はこれが最初のことであるから、顔色を変えて驚いたのに無理はない。もちろん、その後、今日まで同様の犯罪は一件もない。つい最近ある夜、十時四十七分ごろ東海道線大阪発上り一二六列車の二等車の便所で乗客が殺害されていた事件があったが、この事件とは犯罪のケースが全く違っている。

それはさておき、車掌とボーイは、この突発事件に狼狽しながらも、咄嗟の考えで次の停車駅豊橋までの猶予はならないと見て舞坂駅に臨時停車をした。乗務車掌の臨機応変の機転である。駅前派出所巡査と舞坂町の鈴木医師が寝台車に駈けつけた。血染めの毛布をとってみると、頬から咽喉まで突いた四寸位の傷と胸の刺傷、右手の擦過傷その他数カ所に傷があり、出血多量で微かに虫のような呼吸をしている。しかし、もう手遅れで処置のしようがない。傍には血糊のついた鋏と、現金二百廿八円五銭在中の鞄と、鉄道省の優待乗車証がある。この乗車証には「大阪市北区綿屋町二〇土木請負業阿野徳次郎」と記入されていた。瀕死の身柄と所持品は、一とまず舞坂駅に下して、列車は四十分の遅延で舞坂駅を発車した。それから間もなく絶命した。

夜が明けると、静岡地方裁判所検事局から吉益検事正（ありふれた殺人事件の場合は検事が出動する、検事正直々の出動は事件をよほど大きく見たものである）小河保安課長、浜松区裁判所から勝井予審判事、島倉検事、鈴木浜松警察署長、池谷警察医、刑事多勢が詰めかけ、駅前派出所で、仮予審を開き、池谷警察医の執刀で死体を解剖した。解剖結果について、池谷警察医の意見書には、鋭利な双物をもって、頸動脈の切断をしたことが、致命傷であると記された。

筆者はこの第一報をつかんで、新聞記者として現場に急行した。この日は、遠州名物の西の空っ風も吹かず、遠州灘から今切岬に押しよせる波頭が白く光って、浜名湖に抱かれた弁天島には、早春の陽ざしが暖かった。

まず、最初に浜松駅長を訪ねた。

「なにしろ列車が駅を動き出すまで、乗務員一同がなんにも知らずにいたのですからね。寝台車の中での出来ごとですから、列車がどの辺を走っている時に、兇行が演じられたものやら、皆目、見当がつきませんやね」

で、最初に手当をした鈴木医師は、

「全身数カ所をめった斬りで、被害者は虫の息でしたよ。出血が甚しかったので私が診た時は、もう手遅れでどうにもなりませんでした」

車掌の伊藤君は、

「阿野さんは、列車が東京駅を発車してから、しばらく、喫煙室におられました。横浜駅を発車して間もなく、二号車の2号室に御案内いたしました。

それから食堂車にお出かけになって、何か召上っていらしたようです。山北駅を通過した頃には、カーテンをおろしてお寝みになっていたらしく、沼津、静岡、金谷間では、私が何遍も車内を歩いていますが、異状を感じませんでした。浜松駅で検車手が発見して急報してくれましたので、2号室のカーテンを開けてみますと、阿野さんは右側を下にして頭を窓の方に向け、紅に染

っていたのです。阿野さんの寝ていた上段――つまり1号室には御婦人のお客さまが寝ておられましたし、向い側の上、下段には男女のお客さまが乗車しておられたのですが、何の物音も聞かなかったと云っておられます。

で、兇行は金谷の長いトンネルの中か、大井川の鉄橋、それとも、天竜川の鉄橋か――列車の驀進する轟音で、少しばかり騒いだり声をたててても、周囲のお客さまの耳に入らない音響を利用しての巧妙な手口ではないでしょうかね」

車掌は、こんな風に探偵眼を働かせてしゃべった。警察当局は二号車に乗り合せた乗客二十二名の指紋をとった。同じ列車に乗り合せて、一夜の夢を結んだばかりに、とんだ災難だと、不平を云う声が乗客の間から起った。

殺された徳次郎の上段のベッドに寝ていた乗客は、横浜市本牧白田謙四郎氏夫人ふくさん（三十八歳）であった。

ふくさんは、

「私は八時五十分に横浜から乗車いたしまして、すぐベッドに入りましたが、うとうとしていて、ぐっすり熟睡いたしましたのは、かれこれ、十二時近い時間でしたでしょうから、もし、殺されたとすると、その後の時間でございましょうね」

終着駅神戸では、神戸地方裁判所から難波予審判事、牧田検事が神戸駅に出張して、寝台車の実地検証と、車掌の伊藤繁吉と乗客専務車掌久保田幸作を参考人として調べた。

兇行の演じられた2号室内の指紋検出をしたり、犯人の遺留品が何かないかと調べたり、それはまことに、慎重綿密を極めた検証である。

徳次郎の持参した二個のスーツ・ケースと、寝台の網棚に載せてあった菰包みは、豊橋駅で下した。菰包みには「横浜市住吉町絹布商三誠堂」と記してある。

大阪から徳次郎の支配人金谷と、徳次郎の友人木村権右衛門、坪田十郎両代議士、東京から愛妾の大内せいが、死体引取りに浜松にやって来た。

遂に記事差止め

犯人検挙の端緒をつかむ手順として、徳次郎平素の行状記から解明する必要がある。彼は大正の初期に大阪西区で薪炭商を手広くやっていたが、商売に失敗してブローカーとなり、その頃、大内せいの営んでいた大阪曾根崎警察署裏の旅館を根城に、政商と取引していた。ブローカーから土木請負師に商売変えをして、とんとん拍子に金が出来たのも、その頃既に他界した大阪出身の代議士本出安太郎氏のお蔭だといわれていた。本出代議士の選挙違反に関連して、当時、大阪で騒がれた曾根崎警察署長の汚職事件にも首をつっこんでいた。これらの事件をめぐって、芸妓上りの大内せいの凄腕も評判になっていた。せいには、徳次郎以外に大阪時代浮いた話もあり、せいは金銭にけちん坊だった。

徳次郎は大阪の政商と取組んで、金儲けに没頭していたばかりでなく、東京に進出して原敬の

信頼をうけていた時の阿部浩東京府知事のところへも、足繁く出入して、利権を漁っていた。鉄道工事にも関係し、鉄道優待乗車証を持っていたほどで、大阪の「阿野徳」といえば、土木建築界では相当に顔が売れていたものだ。

その大阪の顔役「阿野徳」が誰に殺されたか、下手人は誰か？　情痴の沙汰か、意趣遺恨か、もろもろの条件と場面が、走馬燈のように捜査官の頭をかけめぐる。

全国の新聞でセンセィショナルに書きたてられたのもたった二日で、事件は新聞紙面から抹殺されてしまった。警察官憲の奥の手「記事差止め」命令が出たのである。犯人は勿論捕まらないし、記事差止めのまま三十五年の歳月が経った。この間、三十五年相たち申候――である。従って、世間ではこの事件を記憶していないのが、当然かも知れない。

これから、事件の核心にむかって、筆者の記者活動ははじまる。

徳次郎の持っていた懐中時計は、十時三十分のところで停っていた。犯人と格闘していたものとすると、この時刻は、山北駅が九時三十分、沼津駅が十時五十八分であるから、山北、沼津間の兇行と云うことになる。最初に手当をした舞坂町の鈴木医師は午前四時に「五、六時間前の犯行」と診断しているので、かりに六時間前の犯行とすると、山北、沼津間説が有力になるが、それにしては、上段の1号室にいた白田夫人が全然気づかなかったのがおかしい。それに、血潮が寝台を通して軌道にしたたり落ちるようになるまでに、どの位の時間がかかるかと云うことも考えなければならない。十時半前後には、車内はまだ眠らずにいる乗客が相当にあり、誰か物音な

り叫びを聞いている筈だ。特に見逃せないことは、徳次郎が握ったまま死んでいた手を開くと、金製のカフス釦が、ころりところがり落ちた。犯人と格闘の際か、或は熟睡中を刺され、苦し紛れに、無我夢中で相手の腕か手にしがみついて、無意識でむしり取って、つかんでいたものと解することも出来る。

死体の傍にあった鋏は、兇行とは関係のないものであることが鑑識の結果判った。浜松署の刑事が、東海道線の線路伝いに、物的証拠を探しに歩いていると、磐田郡井通村立野の踏切近くで、トルコ帽と兇器らしい双物を発見した。しかし、この二品が捜査上どの程度に有力なものであったかは、今日まで判然としていない。現金二百二十八円五銭の他に三万円の小切手一枚があったが、それらの金品が盗まれていないので、物盗りの類でないことは明かである。二号車乗客二十二名の指紋と、現場の指紋と照合したけれど、該当するもの、怪しいものは一つもない。

招待された怪人物

ここで、当然に起る疑問は、沼津駅以西豊橋、名古屋、京都などで怪しい乗降客はなかったかということだ。調べると沼津駅から、三十歳位の男と二十二、三歳の女の夫婦連れらしい乗客があったほかに、途中で印象に残るような乗客はなかった。

下車客については、二号車に隣接する三号寝台車の乗客で、商人風の二十八、九歳の男が京都駅で下車したが、この男が怪しいと睨まれた。その根拠は、寝台券購入の時に単に「和田」と姓

を名乗っただけであって、何処の誰ともハッキリ判らない。寝台車の乗客については、警視庁で寝台申込票を手掛りに一人残らず調べたが、この和田と名乗る男だけが、最後まで身元を突きとめられなかった。

では、ここで、もういっぺん阿野徳が在京中の行動を調査してみよう。彼が大阪から上京したのは二月九日である。帰ったのが十九日夜だから、都合十日間滞在していたことになる。この十日間のうち、夜間外出は三回あった。昼間は鉄道関係の請負工事のことで、毎日鉄道省へ出向いていた。滞在していた大内旅館への来訪者は、十四、五日頃四十恰好の洋服を着た男が訪ねてきて、一時間ほど話して帰った。それ以外、格別にとりたてて端緒になるような材料は一つもない。

聞き捨てにならない謎は、彼が帰阪に際して自宅に「こんどは東京からお客を連れて行くから北の新地の茶屋平鹿へ座敷を都合しておくように」と伝えたことである。

彼が「平鹿」へ招待して一夕の宴を張るつもりだった人物は、そもそも何者であるか？　彼と一緒に列車に乗っていたものか。それとも、京都で下車した和田と名乗る人物と「平鹿」へ招待するつもりだった人物とが同一人であるか――この辺に案外、犯人の謎を解くキー・ポイントが潜んでいるのかも知れない。

政治的殺人か？

それかあらぬか、当時、捜査官は京都を中心に獲物を追う警察犬のように飛び歩いた。事件そ

のものは、どう考えても、手の下しようのない難事件とは受取れない。況んや、迷宮入りをすべき性質のものでもなさそうに思われる。捜査当局が新聞記事の掲載を禁止する場合は、

〔A〕容疑者の見当がついて、いま新聞に書かれると、犯人が高飛びする心配がある時

〔B〕証拠湮滅のおそれがある時

〔C〕事件内容が刻々に報道され、犯人に捜査の裏をかかれたり、捜査上妨害になる時

等を挙げることが出来る。この事件が起った当時の状況を綜合すると、〔A〕の場合に該当したのではないかと推測される。犯人の目星が皆目ついていないものなら、記事差止めと云う弾圧に出る必要はない。少くも犯人逮捕について、何等かの目安がついたからこそ差止めたのであろう。それが、闇から闇へ葬られたかのように、事件に堅く蓋をしてしまったところに、奇怪さがある。

その真相は何か――数年後になってから、どこからともなく、こんな噂が拡まった。

「阿野徳殺しの犯人は判っているのさ、既に、ある筋から手が廻って、犯人は満洲に高飛びして、舌をぺろりと出しているよ。

事件が明るみに出ると、政界の某方面に関係者が出るかも知れない」

との説と、また別の方からは、

「阿野徳は、政界関連のある事件について、秘密を握っていた。彼を生かしておくと、天下の問題をひき起すおそれがあるので、政界の某方面で暗殺したのさ」

と云う話が、まことしやかに伝わった。この二説は、いずれも、興味本位の流言であったかも知れないが、それほど、むずかしくない事件に対して、秘密の蓋をしてしまったので、恐いもの見たさからの流言と、簡単に片づけられない筋もある。

当時内務省警務局に勤務し、この事件に関係した中谷政一氏は、筆者の頭にこびりついて離れないこの謎について、東京地方裁判所のほの暗い廊下の甃で、

「阿野徳は東京駅から、大阪へ帰る日も、阿部府知事を訪問していましたよ。阿部知事は原敬から可愛がられていましてね、阿野徳殺しの下手人との結びつき、どんな捜査が行われたか、それは、なんとも判りませんね。ただ、当時大阪の警察部長が、確か田中と云う人で、この事件には、随分力瘤を入れて、捜査に当っていましたよ」

と洩らしていた。本稿の執筆中に静岡に住む筆者の友人から、事件当時県警察部にいた刑事金原為次郎氏が現在浜松駅の駅弁を売っている自笑亭の支配人をしている、同氏に問合せると新しい事実を聞き出せるかも知れないと云ってきてくれたが、〆切の関係から訪ねることも、問合せることも出来なかった。

文芸春秋にこうした編集企画がなかったら、近代犯罪史に特異の謎を残した「阿野徳」事件も年とともに忘れ去られて、明治、大正、昭和の新聞記録集成や、編年史にも一行もとどめず、後世に伝わることもあるまい。もっとつまらない犯罪事件が、さも大事件らしく書き残されているのに——

深夜の来訪者

終戦後ピストル・ギャングが流行して世間も戦慄感をマヒさせたが、昔はピストル入手が困難だった。その時代に法度のピストルを擬して帝都のまん中でポンポン射ち合う騒ぎがもちあがって、本郷湯島から不忍池にかけて、時ならぬ西部劇を展開した。

警官射撃さる

昭和三年九月十日午前二時——下落合派出所勤務渡辺鉄夫（二十八）巡査は、静かに眠った町々を密行していた。落合町下落合五五三番地銀行員奥村敬太郎さんの家にさしかかると、家の中から何か口論している大きな声が寝静まった町中に聞えてくる。事件でもあるのかと門のくぐり戸をあけて玄関に入って見ると、争っているのは来客らしい男と、この家の主人である。渡辺巡査は来客の姿に一瞥をくれてから主人にむかい

「何事ですか、深夜にたいへん大きい声じゃありませんか」

「いやどうもすみません、つい、大きな声になってしまって……」

「こちらの方はどう云う方で……」

興奮して蒼白な顔をしている来客に眼をうつした。その家の主人はあわてて

「いやなに、私の知り合いのものですから、どうぞ御心配なく……」

「そうですか、じゃあ引取りますが、あんまり大きい声を出すと、御近所でも迷惑しますから静かにして下さい」

「どうもご苦労さまでした」

巡査は立ち去った。しかし、渡辺巡査は玄関先の口論といい、たった今の様子といい、どうも普通の知り合いじゃない、深夜の来客なんてことも、常識から腑におちない。門を出ると木蔭の暗がりで、来客の男の出てくるのを待ち伏せていた。やがて、男は出てきた。早足に渡辺巡査の前を通り過ぎようとした。

「モシ、モシ……ちょっとお待ち下さい。少し伺いたいことがありますから、戸塚警察署まで同行して下さい」

「そうですか、じゃ一緒に参りましょう」

素直に承知して巡査の右側について歩き出した。怪しい男を同行する時は、必ず相手の男を自分の左側にひきつけて歩くのが護身の心得である。武道の嗜のあるものは、必ずそうする。相手の右腕を自分の傍にぴったりとくっつけておけば、右手の自由が充分に利かない。いざと云う時には、こちらの右手は自由に働く。渡辺巡査はこの心得に従って、怪しい男を自分の左り側にぴ

ったりくっつけて、油断なく歩いた。派出所のあるところから四、五丁離れた丸山三六三番地辺りにさしかかった時、怪しい男が歩度を落してゆっくり、一足おくれて歩き出した。おや、おかしいぞと思って、巡査が立ちどまった時、怪しい男はピストルを右手に持ち、いきなり巡査の頭をめがけて、一発射った。弾丸は急所に命中して、渡辺巡査は無言でその場に仆れた。怪しい男は暗夜に紛れて姿を消した。

闇の中に轟く銃声に、派出所で立番中の同僚栄清巡査が、不吉の予感に襲われて、銃声をたよりに駈けつけると、渡辺巡査が血に染まって倒れている。

「渡辺君しっかりしろッ」

抱き起したけれども、最早手の施しようもない。事件はすぐ本署に知らされた。怪しい男の訪問した銀行員奥村敬太郎さんを捜査本部に呼び出して、怪しい男が何者であるか、深夜にどうして訪ねてきたのか、詳しい事情を調べた。犯人は奥村さんを訪問した時「和歌山市有吉一平」と名刺を出している。この名刺を手掛りに、刑事二人を和歌山に走らせた。和歌山警察署の応援を借りて調べると、男は有吉家の元養子で和歌山市九番町二号に住む前科九犯中村一平（四十七）と云う兇状持ちと判った。犯人はこの中村一平に間違いなしと云うことに決って、全国に中村一平の手配をした。

養父は警視で九犯の兇状持ち

前科九犯の兇状を持つ中村一平は数奇な運命に弄された男である。彼れを産んだ母親ひさ子は芸妓である。父親が誰であるのか一平は父親の顔を知らない。母親のひさ子は美人だった。父無(てちな)し児の一平を連れて、和歌山県庁の官員さんの有吉寛と云う人に嫁いだ。明治三十二年に有吉さんは警視になって（その頃の警視は相当の官員さんだった）福岡県に奉職していた。一平は中学の二年生だった、養父の有吉さんは、厳格な人で子供の仕つけも厳しかった。真実の親子であれば、いくら矢釜しく叱言(こごと)を云われても、すぐに気持ちはほぐれるのだが、血肉を分けた仲でない義理の親子には、叱れば叱るほど冷たい溝が深くなった。一平は家にいるのが面白くなくて、学校から帰っても外で遊んでいて、家へは寄りつかなかった。ある時、養父の俸給袋をそっくりそのまま持ち出して、冷たい家庭を飛び出し、あてのない放浪の旅に出た。血を分けた母親の嘆きは傍(はた)の見る目も気の毒なほど痛々しかった。

大正十二年九月十日六カ年の刑を終えて新潟刑務所を出た時には、強窃盗前科九犯の兇状持ちになっていた。刑務所で習い覚えた洋服の裁縫が手職となって、ミシンを一台買って洋服屋をはじめた。洋服屋と云っても仕立直しや修繕物が多かった。養父のもとに詫びを入れたが、怒っていてどうしても寄せつけてくれないので、こんな薄情な親に用はないと、大阪の天下茶屋近くに二階借りをして、斎藤ちよと云う二十六になる女を嫁に娶った。洋服屋もぼっとした商売にならないので、昭和二年頃から石油コンロのセールスマンになって、コンロを諸所方々の家庭に売り歩いた。女房との間に二人の子供が出来て、一家は四人となり、石油コンロの外交で貰う歩合と固定給料では、生活がやっとだった。風邪でもひいて仕事を休むと、すぐその日の米櫃に影響した。女房のちよが云いにくそうに

「あなた、お米がないのですけれど……」

そんなことがよくあった。一平は自分に冷たく邪慳な養父が、常日頃から奥村家（一平が訪ねて行った下落合の奥村さんの家）に対して快よい感情をもっていないことを、よく承知していた。養父寛がどうして、奥村家に対して不快な感情をもっていたかと云うと、養父寛が羽振りのいい官員時代に、奥村敬太郎さんの兄の七郎さん達の世話をしてやった。家運の傾いていた奥村家が、その後盛り返して昔の身代に立ち直り、代議士にもなった。立身出世した奥村さんは、昔の恩義に報いるため養父寛に

「あなたには貧乏時代えらいお世話になりました。そのお礼と申しては失礼ですが、老後を養うお住居と、家作の二三軒も建ててあげましょう。その家賃の上りと恩給で、楽隠居が出来ますよ」

うまいことを云ってくれたが、口約束だけで、一向に実行してくれない。奥村と云う男は世話の仕甲斐のない男だ。口さきばかりで何も実行しない、実行する量見でないのなら、はじめっから、そんなうれしがらせは云わないものだ——とぷりぷり怒っていた。

この事を知っていた一平は、養父への義理立てと一つには生活が苦しいので、満洲へ渡って一

と旗あげる資金を得るために、奥村家を訪ねて、まとまった金を出させようと企んだ。そして満洲へ渡る時の護身用として買ったピストルを懐ろにして上京し、奥村家を訪ねた。奥村家を訪ねたところが、剣もほろろの挨拶で玄関払いを喰わされ、不平やるかたなく深夜の町を表に出たところを、渡辺巡査に同行を求められたのである。彼は逮捕されてから、どうしてあの時渡辺巡査を射殺したのかと問われた時〳〵

「戸塚警察署に連れて行かれれば、ピストルは持つているし、すぐ帰して貰えるとは思われない、そうすれば、あの恩知らずの奥村一家に復讐することが出来ないので、気の毒と思ったが射殺しました」

と陳述している。

この辺で話を前に戻そう。

一平は一発で渡辺巡査を射殺すると、現場から駈け出し、通り合せた円タクを拾って、品川遊廓の近くまで走らせた。品川の宿場の入口で自動車から降りると、通りかかった日雇労働者から汚れた法被を一円で買い、自分の著ていた洋服を脱いで、法被姿の労働者に化けた。こうして、その晩は大森海岸で蚊に喰われながら野宿した。

明けて十一日大森海岸で一夜を明かした一平は、別にこれという目的もなく、市内に入ってあ

っち、こっちうろついて、午下りに本郷湯島天神境内のベンチに腰をおろして、これから先きのことをとつおいつ考えていた。本郷本富士警察署原冬至巡査（三十七）が、湯島天神境内を巡邏していると、年の頃なら四十五、六歳で背中に丸の中に虎と染め抜いた印半天を著た男が、ベンチに腰かけているがどうも挙動がおかしい。一見労働者のようでもあるが、原巡査の方を時々チラリと盗み見するその眼付がただごとでない。原巡査はこの男に近づいて、不審訊問をはじめた。一と言、二タ言諜べるうちに、巡査の隙を見ていきなり懐ろからピストルを出して、つづけざまに三発射った。巡査が血に染まって倒れるのを見澄まして、人ごみの中に紛れこんで逃げた。白昼、人眼の多い天神境内での騒ぎに、散歩にきていた人達もしばし呆気にとられた。みんなが気をとり戻した時には、印半天の男の姿はなく、巡査が血に染まってぶっ倒れ、苦しい虫の息であった。さァ大変だと、本富士署に知らせる。署長さんはじめ判検事、捜査官が駈けつけ、原巡査は帝大塩田外科五号室に担ぎこんで手当を加えた。第一弾は腹部貫通、第二弾は幸い洋服のボタンに命中し、右脇の下をかすってそれている。第三弾は睾丸のわきをそれているので、余病が出なければ命に別状のないことが判った。

さて、大胆不敵なこの犯人は、何者かと云うことになって、警視庁強力犯係の恒岡警部が、一平の写真を病室のベッドに横たわっている原巡査に見せると

「犯人はこの男に相違ない」

と証言したので、一平逮捕の捕物陣は展開された。警視庁から中村捜査課長が総指揮官として

本富士署の捜査本部に陣取り、兇行現場を中心に谷中、駒込、万世、富坂、象潟の各署を動員して、千五百名の警官隊を上野公園を中心に布陣した。同時に全市七十余の警察に対しては、午後七時を期して全員の非常召集を行って、大警戒網を布いた。犯人は拳銃を持っているし、いざとなれば死物狂いで抵抗するに違いないから、充分注意するように注意が出た。護身用ピストルをポケットに忍ばせて出動する刑事の一隊もある。その頃は、今日と違って警官はサーベルで、拳銃は一般巡査には行き渡っていなかった。私も、こんな物々しい捕物陣には、あんまりぶつかっていない。兎に角、警官二人がやられたと云うので、警視庁の沽券にかかわると、意地も手伝って仰々しいほどの手配だった。私達、警視庁記者も社旗をたてた自動車で、本部の本富士署へ詰めかけた。

不忍池観月橋の捕物

本富士署前の電車通りは新聞社と警視庁の自動車で時ならぬ雑沓と化した。私達は、今に犯人と警官とピストルを射ち合う面白い捕物が始まるぞと、半分は興味をもって新らしい情報の入るのを待った。

午後七時、署内の電話がけたたましく鳴った。「それッ出たッ！」

詰めていた捜査主任達が、ピストルをポケットに署の前から、切通しの方向にむかって走り出した。私達も何がなんだか判らず、ただ興奮して、警視庁の自動車の後を追った。

本郷竜岡町二九番地山田作次郎さんの屋敷の植込みに怪しい男がうずくまっているのを、同家の奉公人佐野信次郎さんと云う六十四歳の老人が発見した。年はとっても元気もののこの信次郎さんが、組み伏せようと飛びかかって、玄関のところまで引きずってきた時、同じく奉公人の城戸口幸七さん（二十一）と云う血気の若い衆が、家の中から飛んで出て、いきなりその男の頭をぽかぽか殴りつけた。信次郎、幸七さんの両人が搦めとって手柄にしようとした時、今までおとなしくしていた男が、猛然と反撃に出た。ポケットからピストルを出して、頭を殴られた腹癒せも手伝って、幸七さんの胸板めがけてまず一発、幸七さんはその場にうち斃れた。信次郎さんが驚いて呆然としていると、男は、信次郎さんを尻目に塀を乗り越えて逃げた。そこへ私達が駈けこんだ。湯島天神境内から切通しの坂にかけて、まだ日が暮れたばかり、町の店々には電燈がついて、なんとなく町はざわめいている。山田さんの家から拳銃を射って逃げた犯人は、切通しの坂の途中あたりの庭の植込みの茂みに隠れたらしい。昔から物見高いは江戸の常、夕飯のすんだ腹こなしに、この捕物の実演を見物しようと、野次馬がわんさと集まってきた。電車が通れなくなるほどの人出で、臨時に交通巡査が立つ騒ぎだ。

「それ、そこの草むらが、ガサガサしたぞ。わーッ」

「それッ、そっちの縁の下が怪しいぞ」

兎角、野次馬という奴は無責任なもので、面白半分デマを飛ばせる。相手の顔もハッキリ判らない宵闇である。刑事や私達はデマのまにまにあっちに駈け、こっちに飛び、くたくたに疲れる。

縁の下を懐中電燈でのぞいて、もしもポンと一発やられたらと、おっかなびっくりの逃げ腰で、縁の下へ懐中電燈を光らす。

「そら出たぞッ」

「わーッ」

と逃げ出す。今、思い出しても噴飯に堪えないユーモアだった。それで、とうとう、その辺は隈なく探したが、既に、逃げてしまって影も形もない。捜査本部は第二段の構えとして、捜査範囲を拡げることになった。上野警察署勤務高橋和一巡査は、制服姿で上野公園東照宮附近を警戒していたが、下谷茅町交番附近に移動せよとの部署変更命令を受けて、上野の山を下り東照宮裏手の石段を降りて、池ノ端の電車路を横断して、不忍の池の観月橋にさしかかった。

何気なく橋上を見ると、白シャツに半ズボン、労働者風の男が、今しも橋を渡りきろうとしている。注意してよく見ると、シャツの背中が破れている。高橋巡査は急いで追いつき

「おいッ！　どこへ行くのか」

「はい、私は天神下のすし屋ですが、あんまりむし暑いので涼みにきたところですよ」

落ちついた答えだ。が、巡査はすかさずその男の左のポケットを押え、こんどは右ポケットを押えてみた。手に触れたのはピストルである。巡査は思わず「うむッ」と唸った。

高橋巡査はいきなり向き直って身構え、右ポケットをしっかりと押えたままで力まかせに捻じ伏せようとした。男はそうはさせじとくるり後ろむきになって逃げ出そうとする。巡査はポケッ

トを片手で押え、片手で男のシャツの尻のところを押え

「犯人だッ」「犯人だッ」

大きな声で続けざまに叫んだ。附近にはまだ警戒中の警官が多勢いた。この声を聞きつけて、上野署下山由太郎刑事と私服の今泉泰平巡査が駈けつけ、高橋巡査は犯人を羽交締めにし、二人の警官は両手をしっかり押えて捕縄をかけた。犯人はまさしく中村一平であった。逮捕された時刻は十一時廿五分である。

犯人逮捕の殊勲警官はいずれも表彰され、または昇進した。

俺を死刑にしろ

たった三月の間に強窃盗六十回の記録をつくった恐ろしい男があった。被害者には下田歌子女史、閨秀作家三宅やす子女史などもあって、帝都を戦慄のるつぼにたたきこみ、国会の問題となって、さすがの警視庁もこの犯人のために散々に翻弄された。

怪盗、寝室を罷り通る

三宅やす子女史が、文芸春秋社の座談会に出席して、自宅へ帰ったのは、もう、夜もだいぶ更けた時間だった。その頃、女史の住居は東京府下といわれた砧村喜多見台にあった。昭和四年一月十日のことである。肌を刺すような北風の寒い晩で、空には星が凍りついていた。

「おお、寒いわね」

玄関に出迎えた女中のよし子さんに、そう言葉をかけて、二階の寝室へとんとんと上って行った。雨戸を叩く風の音と庭木の梢を渡る木枯に、女史はなにかしらすうっと衿もとに冷たいものを感じた。隣り合せた寝室から愛嬢艶子さんの安らかな寝息が微かに洩れていた。

女史も寝床に就いた。スタンドの電燈も消されて、あたりは静まりかえった。それから何時間か経って、もう、そろそろ一番鶏が啼く刻限である。一人の賊が炊事場のガラス戸を蠟燭の火で焼き切って、屋内に忍びこんだ。この手口はノビ師と呼ばれる窃盗犯の常習者がよく使う手である。炊事場の隣が四畳半で女中よし子さんの居間になっていた。賊は、右手に短刀、左手に懐中電燈をもって女中部屋に入ると、懐中電燈をぱっとつけて、うす気味悪いほど丁寧な言葉づかいで女中を揺り起した。声は低いがはっきり聞きとれる。

「もし、もし……お宅のご家族はおいくたりですか、どちらにお寝みになっていますか、ご主人の部屋へ案内して下さい」

女中のよし子さんは、素早く起きると着物に着換えた。賊は黒い布で覆面していた。背丈は五尺二寸位と思われた。女中のよし子さんは、賊を案内して二階へ上った。階段を上って近づいて来る跫音に、女史は眼をさまして、何か不吉の予感に襲われていた。賊は女史の寝室へ侵入した。

この時の模様を、後日、公判廷で裁判長と被告は、つぎのように問答している。

×　×　×

裁判長「女中に案内させて女史の寝間に行き、ついで、娘艶子の寝間に行ったら娘が布団をかぶっていたので、お前がとりのけようとしたら、女史が、娘が驚くからどうかやめてくれ——と言ったのだね。

それから、ぶどう酒を一杯飲んで手提金庫から四十五円を奪った。お前が、もっと、金を出せ

と言ったら、女史が、きょうはちょうどよいところへ来た、いつもはお金はないのだけれど、他所から小切手が届いているので、それをあげる、と言ったんだね。

女史が、お前に

あなたは、私が三宅やす子と知って押入ったのか

と質問したのに答え

三宅やす子とは知らずに入った。三宅やす子なら円本を出して印税がウンと入ったろうと質し、女史がこれ以上無いと答えると、時計を出せと言い、講談本とピコレット写真機を奪って立ち去ったと陳述しているが、それに相違ないか」

被告「そうそう、確かにその通りだった」

× ×

これは、昭和八年六月六日東京地方裁判所で垂水裁判長、木内検事係り太田（金）弁護士立会で開かれた公判の一齣であるが、この強盗事件当時の新聞は、女史が愛嬢艶子さんの身を護りながら、怖ろしさにぶるぶるふるえる手先で金を賊に渡した。賊も兇器をつきつけながらも、震えていたと伝えている。

神出鬼没の説教と講談

この強盗事件が、この頃、東京を騒がせた講談強盗である。昭和三年暮から四年の春にかけて、東京は説教強盗と講談強盗と呼ばれた二組の不敵な強盗犯人によって、警視庁は醜弄され、市民は不安と恐怖のどん底に落ちていた。議会では市民の不安を一掃して帝都の治安を確保しろと、内務省、警視庁の無能を痛撃した時代である。

説教強盗の犯人は、被害者をのした上「戸締りを厳重にして、犬を飼いなさい」などと、一とくさりの強盗予防法のあの手、この手を説教して姿を消すところから、新聞記者がこの強盗に説教の二字をつけたものだ。講談強盗は、荒稼ぎをした上、一番電車が動き出す頃までの間を、侵入した家で講談本を読んで時間をつぶし、人通りがあるようになってから逃げ出すところから、同じく新聞記者がこの強盗に講談の二字を冠した。説教と講談の二人の犯人は、手口も違っていたし、荒し廻った地域も、説教強盗が旧市内の城北地区に限られ、講談の方は荒した地域も説教よりは範囲が広かった。しかし、一時は、二人の犯人の手口がよく似たところもあって、ごっちゃにされたり、そのいずれであるか不明の節々もあって、捜査当局の頭を混乱させたことも屢々あった。時の捜査課長は中村という人で、足がすこし悪く、廊下を足をひきずるようにして歩いていたが、さらっとした江戸前で、刑事を手足のようにうまく使いこなしていた。この課長の下に、手塚、田多羅、恒岡、斎藤、中村などという腕利きの主任が揃っていた。

さしも騒がれた説教、講談の両犯人も、昭和四年二月に前後して捕まり、市民をほっと一安心させた。

講談強盗が、昭和犯罪史の一頁に記録されるようになったのは、知名女性である三宅やす子女

史とか、下田歌子女史邸を襲ったほか、昭和三年十二月から翌四年二月までの極めて短い期間に強窃盗六十回の記録をつくり、警戒の網の目をくぐって、神出鬼没に荒し廻った早業によるものである。東京地方裁判所の公判には、このうち十二件の強窃盗がとりあげられている。

神出鬼没の講談強盗が、どうして、捕まったか、その時の模様を語ることにしよう。

松坂屋デパートの大捕物

銀座松坂屋デパート六階の玩具売場の店員小林みさ子さんが、いつものように出勤して自分の持場である玩具売場へ行って、朝の開店の準備にかかろうとすると、黒オ！バーに赤靴をはき、口髭をはやした三十五、六歳の男が、玩具売場の物蔭にかくれた。みさ子さんは不審に思った、まだ、店は開店時間ではない、あの人は誰だろう？　そう思って物蔭に隠れる男を追うようにして「もしもし」と声をかけた。男は、その声に答えないでいきなり走り出して、店員専用の階段を一目散に下へ駈け降りて行く。みさ子さんは、咄嗟に怪しい男と思ったので、

「泥棒！　泥棒！」

大声をあげて、後を追った。その声で近くの売場にいた男の店員二、三人が、逃げて行く怪人物に追い縋った。賊は、店員の手をふりきって、二階から一階へ――そして、地下室に逃げこんだ。絶体絶命、袋の鼠である。壁にぶっつかった賊は踵を返して、別の階段から、再び一階に駈け上り、裏通りの三十間堀の方へ出た。しかし、その時は多勢の店員に追いまくられて、ふらふ

らとなって捕まってしまった。息をふうふうはずませて

「頼む、水をいっぱい飲ませてくれ」

と蒼い顔である。そこへ、警察官が駈けつけ、両手にカチリ手錠が篏められた。

賊は、前夜閉店間際に店内に紛れこんで、物蔭に隠れていた。夜中に夜警の巡回する隙を見て、金庫を合鍵であけて現金二千四百余円と商品切手等を盗み、夜が明けて開店時間が来たら逃げ出すつもりでいたのだが、女店員に見とがめられたのが運のつきだった。金ぶちの眼鏡をかけ、口髭を生やした顔には、そばかすがある。ちょっと見たところ立派な会社員だ。命がけで逃げ廻ったので、心臓はまだ激しく鼓動している。巡査に引きたてられて築地署へ連れて行かれた。

吉田司法主任が調べると、自分は新聞記者で林信行と云うものだと云った。ウォルサムの金側懐中時計と金鎖をチョッキのポケットにぶらさげ、傲然と構えているが、司法主任は、こいつ相当の星と睨んだので、鰻丼を喰わせ、指紋をとって留置場へほうりこんだ。刑事に捕まった容疑者が、留置場入りに臨んで鰻丼を喰わせてもらえるようになると、留置場へ入ってからも、顔である。掻っ払いやコソ泥で捕まって留置されている奴等を尻眼に

「おいらァ、ちっとばかりヤマ（犯罪）が大きいンだよ。お前っちのような、チンピラはお気の毒ながら桁遺いだぜ、えへン……」

と肩を張って大きな顔でいられる。留置場と云うところは、そう云う世界である。

前科五犯の兇状持ち

指紋はすぐさま警視庁鑑識課へ持って行って調査した。すると、この男は案の定、前科五犯の兇状持ちと判った。こういう時に指紋の威力が発揮される。林信行なんて名前はすっとぼけた出鱈目で、実は、神戸生れで原籍大阪市東成区野江町二丁目四十五番地岡崎秀之助（当時三十六歳）である。

翌日、留置場でぐっすり眠った彼は、朝食がすむと調べ室に呼び出された。調べ室は地下室で一方が通路で片側は鉄格子の入った窓である。冬の陽が窓からさしこんでいる。吉田主任が青い羅紗のテーブル掛けをした机の前に腰をかけている。刑事に護られて入って来た彼を見て、ニコニコ笑いながら自分の前の椅子をすすめた。

「まァ、いっぷく吸わないか」

シガレット・ケースを彼の前にぽんと投げた。彼は、軽く頭をさげて一本を抜くと火をつけた。

「どうだい、昨夜はよく眠れたかい」

「ええ、よく眠りました」

「田舎の警察なら口から出まかせの名前でも罷り通れるだろうが、ここは、生馬の眼を抜く東京のどまンなかだぜ、ヘンな真似をしない方が、お前のためだぜ」

「旦那、藪から棒にそりゃアまたなんの話ですかい」

「おいッ。呆けるのもいい加減にしろよ。手前の名前はなんと云うんだ、ちゃんと言って見な、親につけて貰った名前だぞ、お上じゃチャンと調べがついているんだ、さァ、言ってみろ」

「昨日も云った通り林信行で……」

「やいやい、痛い目に逢いてえか。手前は神戸の生れで原籍が大阪にある岡崎秀之助じゃねえかッ」

「えッ！　それじゃ露れましたか。旦那恐れ入りました、申訳ございません。岡崎秀之助に相違ございません」

「そうだろう、ここへ来ちゃア、なんでも見通しだ、あんまり余計な手数をかけるなよ」

「へえ、相済みません」

「身の素性を有体に言ってしまえ」

「申上げます。大正十五年九月兵庫県御影町郡家、貴金属商尚美堂専務江藤嘉吉さん方を襲った強盗未遂、同じく芦屋中之内松代宗太郎さん方を襲った強盗と外に窃盗九件の罪状によりまして御用になりました。昭和二年七月十六日神戸で懲役十五年の判決言渡しをうけて、四国の高松刑務所で服役いたしました。服役中に尿毒症を起して重態になりましたので、刑の執行停止をうけて出獄いたしました。高松から知り合いを頼って神戸に帰り病気の養生をしましたが、病気の方が捗々しくなく、その上、生活にも困り途方にくれて、須磨海岸から投身自殺をしようとしました

がそれも果さず、悩んだ揚句、東京にいると風の便りに聞いた母親が無性に恋しくなって上京しました。金に困ってデパートに忍び込んだのが運のつきでした。木造家屋と違って出入口の鉄の扉が降りてしまうと、どうにも出られませんからね……えらい、どじを踏んだものです」

と苦笑した。

吉田主任は彼に、これだけ泥を吐かせると、この日の調べをうちきって留置場に戻した。

運命の悪戯、指紋の謎

指紋照合で犯人の身許と前科が割れるばかりでなく、ここに意外な新らしい事実が展開した。新事実に警視庁捜査課は、思わず飛びあがって喜んだ。無理もない話だ。と云うのは、警視庁を散々愚弄している講談強盗が、犯罪の現場に残して行った指紋と、この岡崎秀之助の指紋が判で押したようにピッタリ一致していることだ。

つまり、岡崎秀之助が講談強盗そのものであると云うことだ。警視庁鑑識課の指紋照合係は、市内各署から送ってくる指紋原紙を照合台の上に載せて、多勢の係員が朝から晩まで拡大鏡を覗きこんで四つに取組む根気のいる仕事である。照合係の一人が拡大鏡をじっと覗いて、岡崎の指紋を見つめた。拡大鏡を覗きこむその眼が異様に輝いて、顔が見る見る緊張して行くではないか――指の一本一本の渦のまき具合、流れ方、蹄状を見ては仔細に書きとり、強盗現場で検出した指紋とくらべると寸分違っていない。世界全人類を通じ同一指紋の人間は二人ないと学説は教

405630

えている。指紋照合係は鬼の首をとったように喜んで、早速、指紋原紙を持って吉川鑑識課長に仔細を報告した。

岡崎秀之助の身柄は、築地署から警視庁に移され、講談強盗の被害の跡を追って証拠物件をつきつけて、彼の自供を待った。

×　　×

話はこれより先になるが、講談強盗の被害現場には、いくつか完全な指紋が残っていたので、警視庁鑑識課ではこの指紋を検出して司法省で指紋照合をした。ところが、この指紋の主岡崎秀之助は強窃盗罪で高松刑務所で服役中であるとの回答があった。刑務所の鉄窓に繋がれているものが、まさか幽霊じゃあるまいし、娑婆に現われて、強盗を働くわけがない。とすると、現場指紋の検出が不完全であったのか。指紋係は絶対に不完全な指紋ではないと主張する。同一指紋の人間が二人ないことは前に言った通りである。とすると、これは実に不思議なことである。この謎を解く暇もなく、犯行は次から次と起る。指紋の謎を解くどころの始末じゃない。ただ、五里霧中で捜索線を拡げるばかりだ。この時に、司法省から「本人は尿毒症で刑の執行を停止されて出所している、出所後何処へ行ったものか所在が判明しない」との回答があれば、警視庁捜査当局は、犯人の写真や人相書の手配を都下各署に廻して逮捕を早めることも出来たであろうと、当時を回顧する刑事達は今でも残念がっている。しかし、犯罪捜査に限らず運の悪い時には、なんでも、こんな風にとんちんかんに行き違いになるものだ。運命の悪戯と云うものが、こうしたこと

であろう。

×

田舎の警察でどんなに手を焼く犯人でも、警視庁捜査課の手にかかると、泥を吐くと云われた時代がある。鬼より怖い主任さんと粒よりの探偵が揃っていたものだ。容疑者の方も、どうせ、恐れ入って自白するなら悪党にとって晴れの舞台警視庁の手にかかりたいと云うのが、彼らの見栄でもあった。

講談強盗の岡崎は、その鬼より怖い主任さんの手にかかって、犯行をすらすらと白状した。強奪した品物は、渋谷区丸山に住んでいた実弟の岡崎政雄が古物商をしていたので、この弟の手を通して処分していた。弟の家へ刑事が踏みこんだ時には、まだ盗品が十数点あったので、みんな証拠物件として押収した。また、強盗に侵入する時に使う七つ道具は、鶴見総持寺の本堂の裏手の松林の中に埋めてあると云うので、犯人を連れて行って探すと、松の木の根元から刃渡り五寸のジャック・ナイフと大工用のノミ、覆面用の黒風呂敷、懐中電燈、麻ナワなどが出てきた。

犯人は総持寺を襲った後でここに埋めたものである。こうして七つ道具を持って歩いていて、不審訊問に逢うと、動きがとれないから、いつでも非常線を突破出来るように、こうした点にまで、細心の注意を払っていたところは、講談強盗の手練というのほかない。

法廷で死刑を絶叫！

岡崎秀之助に対する犯罪容疑は、強窃盗罪で起訴されたが、公判審理中の昭和五年六月廿八日に拘禁性精神病患者と云うことで一時審理が中止された。

拘禁性精神病と云う症状は、精神的変質者などがよく起す一種の精神病である。たとえば、ある犯罪事件にひっかかって身柄を拘束され、未決や牢獄に繋がれると、監禁生活からなんとかして逃がれたいの一心が昂じて遂に精神に異状を起すものである。彼もこの病状を起した。

もともと、彼の血脈の中には精神病的遺伝があったのかも知れない。彼の告白によると放浪生活の一端がうかがわれる。

十八歳の時から無宿放浪の生活がはじまって、浅草界隈の木賃宿を転々していた。六区の活動小屋で仕立屋銀次の子分で正ちゃんという男と知り合い、悪事の数々を重ねた。

父は早く死に、妹は狂人となり、弟もどこにいるかわからない。腐りきった人生に望みはないと過去を反省して、悔恨の涙を流す時もあった。

×

拘禁性精神病のため一時停止された裁判が昭和八年六月六日に開廷された。彼は哀れにもいたましい衰弱で足腰の自由を失っていた。法廷に出るために歩くことも出来ないのである。

彼は同房の囚人の背に負われて崩れそうな姿で入廷した。でも、気持だけは張りつめていた。

傍聴席には多勢の女学生が聞き耳をそばだてていた。

木内検事は鋭く「被告に対しては、もし、法が許すならば、死刑にも処すべき極悪犯人である

が……」と論じて懲役二十年を求刑した。これを、じっと聞いていた彼は、検事の顔を見上げ、

「所詮、生きて甲斐なき身体です。この病身で二十年も牢獄に繋がれていることは堪えられない。死刑にしてくれッ！　頼む、死刑にしてくれッ！」

と大きな声で叫んだ。

検事の求刑の論告にも述べているように強盗罪では死刑にならない。そこで彼は神戸時代の旧悪に属する強盗や強盗殺人未遂事件を、獄中で陳述した。

それによると、大正十三年九月一日、兵庫県御影町岸本に住む仏蘭西人ビラ商会支配人ジャックマン氏邸に強盗に押入って、ジャックマン夫人に瀕死の重傷を負わせて逃走した犯人は、何を隠そうこの俺だと云いだしたのである。

彼の陳述に基いて兵庫県警察部へ照会したが、取りあげられなかった。死刑を望む彼はそれでもあきらめきれず、神戸の外人殺し犯人は俺だと頑張って控訴した。罪を少しでも軽くして貰いたいのが、犯罪者に共通した願いである。

彼は犯罪者共通のこの願いを無視して、死刑を要求して、法廷で狂ったように血の叫びをあげた。

昭和八年十一月一日東京控訴院で懲役二十年の判決があって、彼も死刑の望みを捨てて下獄した。その時の彼はまったく痩せ細って力がなく、判決をうけて退廷する時に看守が手錠を篏めようとすると、彼はにがい顔をして、

「もう手錠なんかかけないでくれ、この恰好じゃ、逃げろと云っても逃げられやしないよ」

と看守の差出す手錠を恨めしそうにじっと見入っていた。

これが、かつては風のように、飄々乎と出没した隼の如き敏捷な強盗犯人であると誰が信じよう。傍聴席を埋めつくした傍聴人が潮のひくように退廷すると、深編笠をすっぽり冠った彼は、看守に抱きかかえられるようにして、狭く冷たい被告人の通路に消えて行った。

その後姿は弱々しく、生命の火も消えかかっているかに見えた。

追跡者

老練な新聞記者の第六感は、駈出しの刑事など足もとにもおよばない。往時の警視庁記者倶楽部には、そうした赤ダネ記者が幾人かいた。手のこんだ事件が起ると、刑事が新聞記者に捜査の勘をききにきたものだ。この物語もその一つで、新聞記者が殺人犯を捕えて刑事の鼻をあかした。

永い記者生活でたつた二度

東京日日の静岡支局に伊藤と云う老記者がいた。三十余年の昔のことである。洋服を着たことが殆どなく、いつも和服で袴の裾をひきずるようにして、懐ろを原稿紙でふくらませて、県庁の警察部や警察署、市内に散在する交番を克明に廻って、三行の雑報でも書き洩すまいと努力していた。この老記者が交番廻りをして小耳にはさんだ某家の縁の下に他殺死体が埋めてある。もう三年も昔のことだが――と云う話に、喰いさがって、それから月余、雲をつかむような話をとうとう物にして事件の全貌を明かにして、遂に警察を動かし犯人を検挙したことがある。私の三十余年の記者生活で、新聞記者が警察よりひと足先きに犯人を突きとめ、警察の力を借りて逮捕した話は、これから話す村田忠一（後に毎日東京本社社会部長）の浅草の養母殺しをモノにするまでの話と二つきりである。それほど珍らしいことだ。まことに、探偵小説的な波瀾と興味がある。

謎の人物謙次

玉の井のおばぐろどぶに、ばらばら死体が浮きあがって、世間の話題をさらっていた時だから昭和七年――私や忠さん（村田の愛称）は警視庁詰の記者であった。ばらばら死体の身許をつきとめるために、手分けして一生懸命だった。ある日、忠さんが「ちょっと話したいことがあるから、お茶でものみに行こうか」と私を誘った。二人は警視庁内の安喫茶店で紅茶をすすった。忠さんは、ポケットから手帳を出して

「浅草田町一丁目十一番地に住んでいた仕立屋の竹内リカと云う女が三年前に大阪へ行くと云って家を出かけたまま行方不明になっているんだよ。当時、警察へ捜索願は出したけれど、判らないままに今日になってしまった。親戚の人達も不思議だ、不思議だと云っているんだ。ばらばら死体は男で、この失踪者は女だから、ばらばら死体の身許とは関係はもちろんないのだけれど、僕は、どうもこの失踪事件に興味をもっているんだよ。忙しいところを悪いが、僕にこの事件をもう少し掘りさげさしてくれないか」

「ああいいとも。すばらしい収穫があるかも知れない。ばらばらの方は僕達でやるから、君はそ

の方に主力をそそいでくれよ」

忠さんはそれから、この失踪女の調査にうちこんでいった。忠さんが苦労して手繰ったところによって、話の筋は、こう云う風に組みたてられた。

浅草千束町二丁目にリカの姪で森本きんと云う人が住んでいた。このきんさんについてリカの家出当時の模様を詳しくきくことが出来た。その話によると、三年前の昭和四年の暮も押しつまった大晦日の暮れ方、二年越しの借金は気になるものだからと、馬場つゆと云う二十三になる女中に仕立代五円を持たせてリカのところへ使にやった。大晦日の浅草田町界隈は、正月の買物に出る人足で雑沓していた。浅草寺の暮れの鐘がたった今鳴ったと云うのに、リカの家には電燈もついていない。女中のおつゆは買物にでも出掛けて留守かしらと思ったが、表戸に手をかけて開けると、するすると開いた。あら、ではいるのかと思って

「ごめんください」

一と足入って、中をのぞくと、薄暗い座敷にリカの養子の謙次（当時二十九歳）がボンヤリと腕を拱ぬいて考えこんでいる。

「あら、謙次さんいらしたの。なにサ、電気もつけないでボンヤリ考えこんで……わたし伯母さんに借金払いにあがったのよ」

「ああ、そうでしたか。それはご苦労さん。実はね、おつゆさん、養母（はは）は、商売上のことで急用が出来て、今朝（けさ）、大阪へ出かけました」

「あら、そりやァお忙しいのね」

忠さんは、この話を聞いて、いくつかの疑問が湧いた。疑問を解くために、おつゆさんにいろいろ突っこんで聞く。

リカときんは、伯母、姪の仲で住居もすぐ近くのことではあり、朝に晩に、行ったり来たりしている間柄なのに、暮の大晦日に大阪へ旅立つと云うのに、姪のきんにひと言も云わずに行ったのが、どうも、腑におちない。それに、仕立屋が大晦日から元日にかけて商用と云うのもおかしな話だ。日ごろ綺麗ずきのリカが髪の道具や化粧品、手廻りのものなどを持って行かなかった点も常識では考えられないことだ――忠さんが、そんなことを、くどくどと話すと、おつゆさんは「そう云われれば、ほんとに、そうですわネ。でも、わたしには、なんだかさっぱりわかりませんわ」

おつゆさんにしてみれば、かかわりのないことで、そんな詮索だてに興味もないらしい様子である。

忠さんは、おつゆさんに礼を云って、森本さんの家を出た。帰る道々、忠さんは「どうもおかしい」を口の中で連発した。こりや、ひよっとすると、なにか、曰くがあるぞ。こんどは、養子の謙次について様子を探ってみた。謙次が友達に話したところによると「養母は三河の伯父のところへ行った」とも云い「新潟県三条町へ行った」とも語り「年末に伊豆の温泉に保養に行ってます」とも述べて、相手次第で口から出まかせに養母の行先を語っている。謙次と云う養子がど

うも怪しい。一体、この謙次とはどう云う経歴の男であるか。忠さんの足はまめに動く。

謙次と云う男は、女に好かれそうな好い男っぷりである。やわらか調子の物腰、虫も殺さないとは、こんな男のことだろうと思わせるようなやさ男。道楽と云っては、ラジオをいじることで、酒は銚子一本。本職は万年筆の製造職人であるが、その頃は、不景気風に煽られて製造の方は、さっぱりあがったりである。遊んでいる訳にもいかないから、万年筆の行商をしているが、これとても碌な稼ぎにはならず、懐ろはいつも寒い。小遣銭がなくなると、いつも、商売の万年筆を近所の質屋へ運んで金にしていることが判った。この質屋を訪ねて番頭に帳面を調べて貰うと、リカが大阪へ旅立ったと云う大晦日に、謙次の名前でリカが不断使っていた金指環、櫛、笄の類が入質されている。このほか、外出にはどうしても入用の冬コートもちやんと質草になっているではないか——装身具から着るものまで質草にして、リカは一体、何を着てどんな恰好で大阪へ旅立ったのであろう？　謙次の云うことは、全部つくり話だ。嘘でまとめた話だ。

養母リカは殺されている。下手人は謙次か？　それとも誰？　いずれにしても、謙次はこの間の事情を知っている。秘密を握っているのは謙次だ。こうなったら、一刻も早く怪しい謙次の居場所を確かめて、謙次に会って疑問を解決することだ。

忠さんは張りきった。

さて、謙次はどこに住んでいるだろうか。謙次の居所を突きとめるのが、また、ひと苦労だ。特種は足で書け、不精をしちゃいけないとよく云われる。理窟はよくわかるのだが、幾日も幾日も、結論の出ないくたびれ儲けの仕事に精根をうちこむことは、むずかしいことだ。忠さんは頑張った。まず、同業の万年筆屋を片っ端から尋ねて廻った。親戚も尋ねた。答はどれも、これも、「もう二、三年この方謙次とは音信不通だ」と云う。この捜査は徒労だった。だが忠さんは、絶望しなかった。あきらめない。しぶといネバリである。探しはじめてから三日目に謙次の弟が本所向島中ノ郷町に鋳物工場をやっていることが判った。この弟を訪ねて謙次の行方を聞くと、そこから、あんまり離れていない中ノ郷町百番地の石原アパートの二階に住んでいることがやっと判った。

養母と不義の仲

忠さんはゴムまりのようにはずんだ。その日——忠さんが謙次を訪ねた日は、朝から篠つく雨で、濁水が路上に氾濫していた。雨は午後になっても小止みなく降りつづいて、江東名物の出水である。問題のアパートは湖水の中に建っているようだ。忠さんはズボンを膝の上までまくりあげて、ざぶり、ざぶり、道路を横切って、アパートの前に出た。名はアパートであるが、ひどくお粗末な建築である。靴も靴下も濁水の中を歩いたのでびしょ濡れである。階段を上るたびに靴の中で水がだぶつく。二階は六畳一と間、入口の靴脱は二尺に三尺、ドアをあけて中に立つとやっといっぱいの窮屈さだ。

「今晩は！」

返事がない。折角、雨の中をずぶ濡れになって探しあて留守とはいまいましいと舌うちしながら、続けて、大声で二度呼ぶと、銘仙の着物をきちんと着て、頭も綺麗に刈りこんだ物腰のやさしい好い男が現われた。は、はアン、こいつだな、謙次って奴は――肚の中でそう思いながら、忠さんは

「竹内謙次さんですね」

と頭から、きめてかかった。そうじゃないと云わせない高飛車である。

「はい、そうですが、どなた様で――何ご用でしょうか」

胡散臭そうにジロリ忠さんを一瞥する。

「僕、こう云うものです」名刺を出す。名刺を見ても、別に動ずる色もなく

「まァ狭いところですが、おかけ下さい」

上り框に席をつくって、自分もそこへ座った。

「きょうお伺いしたのは、あなたの養母のリカさんが家出して三年になりますが、まだ帰らないのみか、一体全体、生きているやら死んでしまったやら、全然、消息がないので、当時ご一緒だったあなたに当時の真相を伺いに上ったのです」

「ああ、そのことでしたか」

謙次はニコリ笑った。

「養母とは世間に顔むけのならないような関係にありましたので、親戚の者には面目なく、世間

には恥かしく、済まない気持でいっぱいでした。それで、ずっとここに引っこんで佗住居をいたしております」

養母との関係を恥じての佗住居――なるほど世間によくあることだ。

「そうですか――お養母さんもご一緒なんですね」

「ええ、恥かしながら、いまだに清算が出来ず同棲しています」

忠さんは、がっかりした。十数日の苦労も突きとめて見れば、道ならぬ養母と養子の恋の逃避行――ちえッ。忠さんは、雨にうたれて、社へ帰った。忠さんから一部始終を聞いた私達警視庁メンバーは

「忠さん、それで君は養母にも会つたのかい」

「いや、奥の方で声のするのが聞えたが、あんまり莫迦々々しいので会わずに帰ったよ」

「忠さんともあろうサムライが、養母に会わずに帰る手はないよ。上手の手から水が洩れたンだな」

そう云われて、忠さんは再び石原アパートに謙次を訪ねた。

「謙次さんいませんか」

階段の下から大声に叫ぶと、窓があいて五十一、二の女が顔を出し

「謙次は昨夜、急用が出来たと申して上野に行き、まだ戻ってきません」

「あなたリカさんですね」

「リカさん――いいえ、私は謙次の母でございます」
「謙次さんはリカさんとご一緒ではないのですか」
「とんでもございません。リカさんは三年前に家出して行方不明です」
「でも、昨日私が訪ねた時、謙次さんはリカさんは家にいると云ってましたよ」
「そりゃ、私のことを間違えたのでしょう」
「ゆうべと云えば、あの雨の土砂降りの中を上野へ行ったのですか」
「ええ、どんな用事か知りませんがね、周章て出かけましたよ」
しまった。風を喰って、早いとこ逃かったな。忠さんは地団駄踏んで口惜しがったが、もう後の祭で仕方がない。これ以上は、新聞記者の職域でない。司法権を発動する以外に手はない。忠さんは日頃懇意にしている象潟署長森山警視を訪ねて、これまでの顚末を話した。
刑事の活動は、その日から、時を移さずにはじまった。石原アパートに刑事の張込み警戒が続いた。
張込みがはじまってから八日目の真夜中過ぎ、人の気配に注意しながら軒下を石原アパートにむかって、すたすた足早に近づいてくる男。
「竹内君！」
「え！」
謙次はそこから警察へ曳かれた。司法主任の調べに謙次は、覚悟してリカを殺して床下に埋めた次第を素直に自白した。

謙次は、どうして養母を殺したか。

養母リカの亭主浅次郎は、日本橋のさる大きな弁当屋の番頭を勤めていたが、五年前にぽっくり死んだ。後家さんになったリカは勤め先の退職金や、亭主がせっせと稼いで貯めた小金をもって、殺された場所の吉原土手にぬける田町に二階が五畳と二畳、下が六畳と二畳の一軒を借りて「和服裁縫、お仕立物どころ」の看板を出した。浅次郎とリカの仲には子供がなかったので、おゆき（当時二十八）と呼ぶ養女と二人でつつましい生活をはじめた。
この女世帯へ遠縁の謙次が、万年筆の行商の行帰りに足繁く顔を見せ、冗談などいって遊んで行くようになった。女世帯に男っ気が入ると陽気になる。リカはいつか二十も年下の謙次と養女の眼を偷んで楽しむ仲となった。消えのこりの蠟燭のようなリカの恋は、若くて好い男っぷりの謙次をなんとかして、自分の手許にしっかりと繋きとめておきたかった。それには、どうしたらいいだろうか。リカは浅はかな智慧を働かせた。それには、十一歳の時から手塩にかけて育てた養女ゆきが、今は年頃で器量もまァまァ十人並、謙次を養子にしてゆきと娶合せて家に入れることだ。そうすれば、同じ屋根の下で謙次をいつでも、自分の思う通りにすることが出来る。この話を謙次にすると別に異存はない。謙次にしてみれば、両手に花である。ところが、養女ゆきの方

は、二枚目気取りでいやらしい謙次を虫が好かない、謙次が嫌いだった。いくら虫が好かなくても、嫌いでも、十二の年から育ててくれた養母の頼みを「わたしは嫌いですから！」と断わるほど強い女でなかった。涙をかくして結婚を承知した。まァお目出度いと云ったのも束の間で、小さい屋根の下で三角関係の不自然な生活が、うまく続くわけはない。謙次とゆきの夫婦生活も半歳足らずで、ゆきは病身を理由に泣きの涙で名古屋の実兄のもとへ帰ってしまった。

行李詰めにして床下に埋める

謙次も養母の仕打ちに嫌悪を感じはじめた。いつまでも、こんな関係をつづけてはいられない。一日も早く清算しよう。養母リカも謙次の様子で薄々秋風の立ったことを感づいた。一方では、養女ゆきに済まないことをしたと云う自責の念もあった。しかし、夜がくると、焼きただれた愛慾の炎をどうすることも出来ず、なんとかして、謙次を自分の手にしっかりと抱きとめておきたい一念で胸がいっぱいだった。

昭和四年の大晦日、謙次とリカの二人は二階五畳間で小さいちゃぶ台を中に挟んで、昼飯の箸をとっていた。

「昭和四年もきょうが最後の日になってしまいましたネ、いつまでも、こんな不自然な世間に顔むけのならないような生活に、私もしみじみ愛想がつきました。きょう限り私達もきれいさっぱりと別れようではありませんか」

謙次がこんな風に話をきりだした。

「なにが、世間体なのさ。今更、偉そうなことお云いでないよ。誰のお蔭で今日までこうして来られたと思うンだい。きれい、さっぱり別れるッ、ふ、ふン……別れられるものなら別れてごらんよ」

リカが興奮して、謙次を口汚く罵った。我慢していた謙次がカッとなって、いきなり、リカの頭を力まかせに殴りつけた。

「おやッ、やったね、よくも私に手をあげたね、え、えッ、口惜しいッ――」

リカは謙次に飛びかかって噛みついた。優さ男の謙次は死物狂いのリカの猛襲にあってたじたじ。上になり下になり、組みつもつれつ、どたんばたんの大乱闘で、リカはお正月用の結いたての髪をふり乱してしまった。揉み合ううちにリカの帯揚げが解けて、謙次の手に触った。謙次はその帯揚げをとってリカの首にまきつけ、力いっぱいぐっと絞めた。暴れていたリカがぐったりしておとなしくなった。我に返った謙次は、虚空をつかんで死んでいるリカの形相にぞっとした。傍を見ると著物を入れた長さ二尺五寸、深さ一尺五寸の竹行李がある。中の著物をとり出して、リカの死体をその中に詰めた。忙しい大晦日の騒音を外に聞きながら、謙次は重い行李を階下に引きずりおろした。梯子段をおりる一足、一足にどっしり重い行李の重味で梯子段がミシッ、ミシッと異様な物音をたてるのを気にしながら――やっと下座敷の隅まで運んで、ホッとひと息。ぼんやり考えこんでいる時に、前に述べた森本の女中が訪ねてきたのである。

死体の始末はどうしたものかと考えあぐんだ謙次は、戸締りをしっかりして、ここを先途と囉したてるチンドン屋の楽隊を聞き流して、どこと云うあてもなく公園六区へ足をむけた。公園の映画館をあっちこっちぶらつき映画館に入ってみたが気持がおちつかない。そこで飛び出して除夜の鐘を聞いてから親戚の森本の家に行って年を越した。元日の朝、雑煮を祝ってから田町の家に帰り、死体を床下に埋めることに決心した。元日で年始の客などが来ては面倒と、表戸のガラスをしめ、カーテンを引いて不在と見せかけた。奥六畳間の三尺の押入れの襖をはずして、床板をかじやではがした。かび臭いにおいが鼻をつく。台所から持ってきた十能でコツコツ掘りはじめた。なにしろ、元日早々から大きな音をたてて、近所隣りに変に思われては困るので、音の聞えないよう加減して掘るので、一日かかってやっと八寸位しか掘れない。

その夜も森本方に泊り、翌朝、また、前日の続きを掘り下げる。こうして、死体を埋め終ったのは、五日午後五時を廻っていた。

死体の処置がすむと、家財道具を売り払い、近所隣りへは

「大阪の養母のところへ参りますからお別れにきました」

と体裁のいいことを云って、八日の日にこの家を逃げるように立ち去った。うまく、東京を逃げのびた謙次は、一とまず、大阪に落ちついて万年筆の行商をしながら、東京の様子を探ってみたが、別に露顕しそうな気配もないので、東京に帰り手蔓をもとめて農林省倉庫の実直な常傭人

夫となって世間の眼をごまかしていた。

謙次の供述によって、現場の検証をすると、自白と寸分違わず、床下から竹行李の中で手を合せた腐爛して白骨同然のリカの死体が掘り出された。リカの仏は兇行から三年目でやっと浮ばれたわけである。

忠さんには時の警視総監大野緑一郎から表彰状と金一封が贈られた。忠さんは、金で持っていると飲んでしまうからその金で素敵な腕時計を買って、裏側に記念の文字を刻み、それを左り腕にまいて、仕事の励みとしていた。忠さんがこの特種に成功した頃の東日警視庁詰には、忠さんをはじめ、楠本義郎、須藤など云うベテラン記者が揃っていたが、今は三人とも鬼籍に入ってしまった。三人ともまだ死ぬほどの年齢でもなかったのに惜しいことをした。生きていたら、一流記者として新聞界に貢献するところ大なるものがあったであろう。

ガニ股の男

眼に見えない風のような怪盗——姿を見た被害者は、その男の特長はガニ股でしたと答える。足かけ三年東京中の家庭を縮みあがらせた「ガニ股の男」は一枚の指紋原紙が運のつきで、とうとう捕まった。しかし、かれが御用になるまでには、警視庁と新聞社がノイローゼになってしまった。

懸賞づき捜査

説教強盗妻木松吉が東京市民の心胆を寒からしめたのは、昭和二年春から昭和四年正月にかけて、足掛三年十カ月である。満一年十カ月の間、市民は説教強盗の影に脅え、木枯の吹く夜など、カタンと云う雨戸の音にも神経を尖らした。戸締りを厳重にして犬をお飼いなさい——とは、この犯人の捨科白であった。騒ぐと殺すぞ、凄んで現金や金目の品物を奪い、一番電車の通るころに、悠々、引揚げる。帰り際に、もう一度「犬をお飼いなさい。戸締りは厳重にするのですよ」

その捨科白から説教強盗の新語がうまれた。

彼の出没して荒し廻った地域は、本郷、駒込、大塚、池袋、板橋、杉並、中野、淀橋、戸塚、高田の各所——城北、城北西方面に限られていた。彼が捜査の裏をかいて、どんなに、巧妙に荒したか、神出鬼没を文字通りに実行した。

昭和三年三月二十一日練馬楢崎文学博士方◇十一月五日長崎町会社社長大久保方◇昭和三年二月三日野方町青山幸吉方◇同月十八日同町医学博士松田知三邸◇三月二十二日雑司ヶ谷宮内省技師北村耕造方◇四月二十八日杉並阿佐ヶ谷学習院教諭村山熊太郎方◇八月十六日野方町下沼袋早大教授十代田三郎方◇九月七日中高井戸青山師範教諭赤沢隆助方◇九月二十六日中野医学博士堀江春一方◇十二月一日小石川小日向台町筑波電気重役大賀方◇十二月八日大久保百人町浦賀ドック重役近藤昇二郎方

強窃盗の被害百余件と記録された。警視庁無能の非難がごうごうとして起る。議会の問題となり、市内では自警団をつくる。新聞社は社会不安一掃のため犯人逮捕の殊勲者に懸賞金を出すと云う騒ぎ。その頃は、モンタージュ写真も今日のように進歩していなかったので、被害者の話を綜合して似顔をつくり、新聞がこれを紙面に載せて市民の協力を求める。犯人のいちばん眼につく特徴は、ガニ股であることだった。しかし、風の如く現われて、そして消える犯人は、まことに、姿なき怪盗の名をほしいままにした。

警視庁の捜査課長は中村と云う警視で、足がちょっと悪く、足をひきずるようにして歩いてい

た。現在の有楽町スバル座の裏あたりの見当にバラックの官舎があって、家庭は奥さんと、可愛らしい娘さんが一人あった。どんな大きい事件にも驚かず、新聞記者の包囲攻撃に会っても、興奮しないで落ついて話してくれた。取材記者にとって、トボける相手はまァいいとして、嘘を云う相手は一番困るのだが、この中村課長は嘘を云わなかった。警視庁が震災後のバラック庁舎で、馬場先門内の宮城前松林の中に、馬場先門寄りを玄関として、濠の石垣に沿って、一と停留所先の東京駅前まで蜿々と鰻の寝床のような長い、長い建物だった時分の話である。刑事部の捜査課はそのいちばん奥にあったので、玄関からは歩いて一町たっぷりある。そこを一日に何十回と往復するのだから、警視庁記者も相当の重労働だった。捜査課が今のように一課二課と呼ばれる以前のことで、強力犯係、知能犯係と呼んでいた。

強力犯の警部に恒岡恒と云う男がいた。銭形平次を現代に再現させたような男で、犯罪捜査が三度の飯より好きな男だった。何か事件があると、半纏着の鳶職の頭に変装してみたり、商人に化けたり、そんなことが、とても好きだったらしい半面、金縁眼鏡などかけて、警部にしては洒落た洋服など著たモダン・ボーイ型でもあった。

説教強盗捜査陣は、中村課長のもとに斎藤、田多羅、恒岡三警部の部下の強力犯粒選りの刑事が担当していた。各警部はそれぞれ部屋を持ち、部屋には五名乃至七、八名の刑事が配属されている。殺人、強盗などの事件が起ると、これらの部屋に割りふられて捜査に当るのだが、説教強盗は重大事件とあって三つの部屋の連合捜査となったわけである。いずれの社会にもピンからキ

リまであるように、刑事社会でも、かれらの憧がれは、本庁強力犯係の部屋付刑事になることである。市内の警察署の下積刑事を長年やって、遂に警察の刑事部屋を転々して一生を終る刑事もあるし、警察の刑事でしばしば殊勲甲の犯人検挙をして、憧がれの本庁の部屋付刑事に出世するものもある。従って、説教強盗の捜査に当てられた刑事は、日本でも一流と云ってよい。強力犯の刑事は、必しも柔剣道が達者なものとか、力自慢と云う訳ではない。案外弱そうな力のないのが屈強の犯人を捕えてくる。今日のように、護身用のピストルを常時持って歩いてもいない。身に寸鉄を帯びず、ポケットに忍ばせているのは、捕縄一と筋。それで兇器をもった賊にむかってよく怖くないものだ。私がこのことについて、老練な刑事に質問した時、彼は「それが気合と云うものなんだよ。御用ッと一喝する。たいがい、相手は怯む、隙が出来る。そこを飛び込んで捕縄をかける。立廻りをして犯人を捕えるのは、よくよくの場合で、理想は、相手の油断につけ込むか、不意を襲って、手荒なことをしないで、どんな、兇悪犯人でも捕えるようにならなくては駄目ですよ」

捕物とは、そう云うものらしい。

勘の捜査か科学捜査か

社会部記者のベテランを配置した警視庁記者会には、朝日から生江沢、河合、伊集院、三浦の諸君がいた。東日（現毎日）からは筆者、楠本、須藤、村田がいたし、報知からは亘、楠瀬が幅

を利かせていた。

風のような説教強盗は、どうして、捕まったか――

警視庁捜査当局は、世間の非難と冷罵にじっと涙をのみ、ありとあらゆる捜査の手をひろげた。従来から行われている老練刑事の勘を頼る聞込み捜査、それと、犯罪捜査の科学陣を動員しての科学的捜査――岡っぴきの昔から数百年の歴史を誇る勘の捜査が勝つか。科学的近代捜査に凱歌があがるか。犯罪捜査史的に見ると、まことに、興味津々のテーマである。捜査当局は、事件発生以来の説教強盗の押入った被害者について、もう一度入念に手口の再調査と検討をした。その結論にもとづいて、鑑識課の犯罪手口カードによって、説教強盗と同一手口の犯行を克明に調べた。犯罪手口カードは百枚や千枚じゃない。何万とあるカードを一枚、一枚丹念に調べてゆくのだから、その努力と根気は生やさしいものではない。こうして、毎日、毎日調べているうちに、大正十五年七月三十日池袋八十一番地無職岡部ひさと云う家に侵入した賊と、昭和三年十一月二十五日上板橋百十九番地白米商小沼松之助方に侵入した強盗と手口がピッタリ一致している。と云うことは、この手口の犯人がとりも直さず説教強盗であるとの結論に達した。この二つの事件について、なにか手懸りはなかったか――ある、あった。小沼方に押入った時の指紋がある。指紋照合をやってみろ！　前科者なら指紋票もある筈だ。それっと云う次第で、指紋照合を

してみると、指紋の主人公は大正十年二月甲府刑務所を出所した「妻木松吉」と判った。

そこで中村課長は、部下をひき連れてもう一度小沼方に出かけ、指紋の再調査をしてみたが、寸分間違いなしと云うことになった。説教強盗の覆面の主は妻木松吉である。妻木松吉を捜し出せば、事件は解決だ。妻木を一日も早く捜し出せ。捜し出すのが一日おくれれば、市民の不安は一日だけ増大し、犯行は一件ずつ増えてゆく。

刑事は血眼で妻木の所在を突きとめるために駈けずり廻った。すると、都下の警察に妻木が大正十四年に検挙されたことが判り、その報告で、釈放後の妻木が小石川豊川町左官職蛭間兼吉方に雇われていた事実がわかった。謎の糸はかくて次第に解けてゆく。探偵的興味はまさに百パーセントだ。左官職蛭間で聞くと

「妻木なら巣鴨辺に住んでいますよ。所番地はハッキリしませんがネ」

これで万事O・K……巣鴨署の居住者索引で「ツ」の項を繰ってゆくと、西巣鴨町向ケ原三三四〇左官職妻木松吉（二十九）と書いてある。ピッタリだ。もうよろしい。

保険外交に化けて踏込む

刑事の梅野君は、背は高くないが、ガッチリした身体で、眼に凄味があった。これまでに警視総監賞や刑事部長賞を何回も貰っている名探偵である。妻木逮捕にむかったのは、斎藤警部の部屋で梅野君を筆頭に七名、中村課長から黒革二つ折の鞄を借りて目指すは西巣鴨の妻木の住居。

刑事は妻木の家を挾んで表、裏、道路の要所々々に網を張った。

梅野君は二つ折の黒革鞄を小腕に抱えて、妻木の家の隣家に現われた。

「今日ァ、ごめんください」

「ハイ、どなたですか」

「火災保険屋ですが、一口おはいりになっていただけませんか」

「保険なんか入りませんよ」

「そう、おっしやらずに……」

「しっこいわね」

「どうもすみません。時に、お隣の旦那さんはいますかね、お隣へ行ってみようと思うですよ」

「いるか、どうか、そんなこと知らないね」

無愛想なかみさんの挨拶を背に、梅野君は外に出た。つづいて、妻木の家の表戸を開けて

「今日ァ……」

家の中の様子を見ると、上り框につづく二畳で三十がらみの小男が、うつむいて、夕刊を一心に読んでいる。「今日ァ……」の声に新聞から眼を離して、入口に立っている梅野君を眺めた。

「なにか用かネ」

「ええ、火災保険のものですが、一口……」

「折角だけど、家じやァもう入っているから駄目だよ」

「どちらの会社に御契約ですか」

「日本動産だよ」

「そうでしたか、それはどうもお邪魔いたしました。ごめんください」

梅野君は、相手を充分に安心させて、表に出た。

陽もとっぷりと暮れた午後六時半。梅野君を先頭に刑事八名が折重なるように狭い入口から飛び込んだ。瞬間、妻木は手が廻ったと気づいた。さッと顔色が変る。しかし、不意をつかれて、逃げることも、抵抗することも出来ない。

神妙に縄をもらった。

その時、妻木の懐ろには、強奪した時計、ダイヤモンド、小判など、のっぴきならぬ証拠を持っていた。

妻木は山梨県中巨摩郡三恵村の小学校を卒えると、村の農家をあっち、こっち作男に雇われて歩いた。十八歳の時、郡内小笠原町の牛乳屋に雇われたが、ここで罪を犯し大正九年九月詐欺横領罪で八カ月の懲役を言渡され甲府刑務所に服役、大正十年二月十五日出所してから埼玉県深谷町の停車場仲仕谷秀吉さんに拾われて二十一歳まで働き、徴兵検査で帰郷し、その後上京して左官職蛭間条吉方の職人になった、

捕われた妻木は、悪びれることなく、素直にさらさらと自白して、その態度は悪人ながら立派であった。

この事件について、想い出されるのは、私の同僚で今は亡き楠本義郎のことである。楠本の探偵的「勘」のよさは、しばしば私を驚かせたが、説教強盗についても、実に、いい勘をもっていた。警視庁玄関へ自動車を呼んだ楠本は、私を促して車に乗った。

「どこへ行くのだい」

「まァ、いいから一緒にきてくれよ」

自動車は二重橋前を右に牛ケ淵から九段下に出て、飯田橋、大曲、江戸川橋、あれから目白へ通ずる坂を登つて、独協中学前を過ぎ、豊川町の通りでピタリ停った。

「さァ降りよう」

楠本は先に立って、豊川町の通りから右に狭い道路を入る。雑司ケ谷の被害者の北村耕造方の家の周囲を一と廻り廻った後、ミルクホールへ私を連れこんだ。ポケットから一枚の紙をとり出した。見ると、地図で、説教強盗の押入った家と、年月日、被害品が書きこまれてある。一と目で犯行は本郷、小石川、豊島、中野の区域に限定されていることが判る。

楠本は牛乳をのみながら

「僕は説教強盗は、どうしても、この区域内に住んでいる正業をもった男と思うよ。本所、深川や、日暮里、千住、大森、蒲田なんて場所から、この区域まで荒しには来ないネ。押入って説教をひとくさりやって奪いとるものは奪いとって、一番電車の音を開いて立ち去る点から、絶対に犯行のあった区域に円を描いてみて、いちばん、出入りに都合のよい場所——豊川町から雑司ケ

谷にかけて住んでいると思うンだ。僕はこのトチカン（土地関係）に目星をつけて、これから、この附近を洗おうと思っているが、君どう思うネ」

妻木が捕まって、西巣鴨に住んでいることが判つた時、楠本は私に

「やっぱり図星だったなァ、中らずと云えども遠からず、暗中摸索でも急所ははずれていなかったネ」

と自己満足の微笑を洩していたが、確かに彼の捜査眼は鋭かった。

もしも、犯人逮捕をスクープすることが出来たら、その新聞社の鼻が高くなることはもちろん、社会部記者の冥利としても、出来るものなら、特種にしたい事件だ。その特種も、号外で抜いたなンてものでなく、堂々と夕刊なり朝刊に、全面埋めて素っ破抜きが出来たら、こんな愉快なことはないだろう。しかし、実際問題として、こうした事件は一社の独占で特種にすることは、まず困難と云うよりも、出来ない相談である。全市の警察には通信網が網の目のように張られているし、警視庁では腕利き記者が、捜査課長、担当警部の行動を監視している。捜査課長の動くところ必ず記者の眼がある状態であった。

この不可能を可能にして「説教強盗遂に捕わる」と朝刊社会面を全面つぶして書きまくったのが報知新聞である。これが事実なら、まさに世紀の特種なのだが、一場のナンセンスで虚報とわかり、スクープしたい、スクープしたいの一念で、とんだ縮尻を演じた物語がある。

どうして、こんな、早計な思慮のない記事をでっちあげたか——それは、こうだ。

朝日新聞が犯人逮捕に千円の賞金を発表すると、報知新聞はその向うを張って、真犯人を密告したもの、または、捜査に協力したものに賞金を出すと発表した。犯人は小柄で猫背でガニ股と云うような特徴を掲げて、見かけたものは投書してくれと云うのだ。この社告が利いて、投書が社会部の机上に山と積まれる。それを、一々、読んで、これは怪しいと思われるものだけを、警視庁捜査課へ持ちこむ、警視庁捜査課は投書を基礎に内偵する——もしも、この資料の中から真犯人の疑い深いものが逮捕されたら、他社に先んじて記事、写真はもとより、取材にあたっては便宜を与えて貰うと云う密約だったらしい。

報知の虚報に驚く

何百通の投書の中から拾い出された一通に、条件のまことによく揃った、ひょッとしたら犯人かも知れないと云う有力な嫌疑者が現われた。内偵すればするほど怪しい節が出る。九分九厘まで間違なかろう。この上は、引っぱって調べてみなければ、白とも黒とも云えない、ぎりぎりの線まで内偵は進んだ。しめたと喜んだのは、資料提供の社会部だ。計画がまんまと図に当って、すばらしい特種に、読者はもちろん、各社の記者をアッと云わせてやろうと手具脛ひいた。記事、写真は着々整えられる。探偵物語的手法で記事は書き飛ばされる。容疑者は小石川富坂警察署に深夜連行された。容疑者を本庁や新聞記者の出入の頻繁な警察へ連行すれば、各社に気づかれる。富坂警察あたりなら、敏腕の通報員も廻っていないし、他社に嗅ぎ出される危険率も低い。そこで、

深夜、富坂署へ容疑者連行の段取りとなったものだ。

容疑者が連行されて、型通りの取調べが深夜の調べ室ではじまった頃には、犯人逮捕の記事を満載した市内版の輪転機は騒音をあげてインキの色も鮮やかな新聞を吐き出していた。

市内版の八版が刷上って新聞自動車で市内の販売店に積み出されるのは三時過ぎてからだ。各社の申合せで遞送部同士が市内版を刷り出すと、互に交換する。当直の遞送部員が報知新聞を開いて見ると「説教強盗捕わる」ウチの新聞には出ていない。これゃ大変だ、大事件を抜かれちやった。新聞記者でなくても、そこは、新聞社で飯を食つているものだ。電話口に飛びつくと、宿直の社会部員を叩き起した。

「こちらは遞送部の××だがね、報知に説教強盗逮捕の記事が出ているよ」

睡い眼をこすって、半分、夢うつつで聞いていた宿直が、説教強盗と聞いて、いっぺんに眼がさめて大騒ぎとなる。社会部長のところへ電話して、善後処置の指令を求める。

社会部長は

「すぐ追っかけて号外の用意をしろ、市内で敗けても、地方では追いつける。警視庁担当者全員に自動車を出して手配しろッ」

私はその頃、小石川久堅町に住んでいた。久堅町から富坂警察署までは、歩いても十分で行ける。自動車はすぐ来た。敵に抜かれた記事を後から追っかけるくらい気ののらないものはない。洋食を腹いっぱい食つた後へ支那料理を出された以上に、モタついて始末が悪いものだ。抜かれ

ても、事実は事実として報道する責任がある――新聞学ではそう教えるのであるが、担当している責任者の身になってごらんなさい。まったく、立つ瀬のない思いである。

そんなことも云っていられないので、富坂署へ駈けつけた。署の前には各社の自動車が数十台並んでいる。署内は殺気立った記者とカメラマンでただならぬ空気が漂っている。

「署長出をセッ」

「捜査課長は来ておらんのかッ」

叱号する声、罵声、電話のベルはジリジリ鳴る。みんな興奮している。やっと署長が現われた。

「報知新聞の記事は真実か」

「疑わしい点があったので連行して調べてみたが、犯人と断定は出来ない」

「犯人と断定出来ないということは、犯人じゃないってことか」

「いままでの調べでは犯人ではない」

殺気だった記者達の顔から、だんだん殺気がうすれてゆく。

「なんだァ、報知のヨタか……」

号外を出すばかりにして、富坂署からの第一報を待ち構えているデスクに

「犯人じゃない。号外はとりやめにしてくれ。くわしいことは帰って話す」

説教強盗には、こんな一と幕があった。

おはぐろどぶの謎

濯東綺譚でお馴染の向島は寺島のおはぐろどぶに、ハトロン紙につつんだ男の首と胴がぽっかり浮き上った。今から二十四年の昔のことである。よく調べると、この男は、五尺の身体を八つに斬りさいなまれて殺されていた。残忍な犯人を追って捜査陣は張られた。

おはぐろどぶの浴衣包み

昭和七年の春まだ浅い三月七日朝の九時半頃、東京向島寺島町八七九番地川名洪方横手の環状線道路脇の、俗に「おはぐろどぶ」とよばれている下水の中に、白地の浴衣で包み麻の細紐でくるくる巻きに縛った一と包みが、ぽっかり浮いているのを、通りかかった近所の呉服屋広島倉治さんが見つけて長浦交番に届け出た。

下水から取上げて包装を解くと、中には男の胴体の上の部分だけがハトロン紙に包んであった。つづいて、十二間道路をへだてた西側のおはぐろどぶから、生々しい首と胴体の下の部分、両腕などが同じようにハトロン紙に包み、更に白地浴衣で外側を包んだものが浮き上った。

推定するとこの死体は全身を八つに切断されている。年齢は廿歳位から廿三歳、或はもう少し年をとっているらしい。素裸にした上、鋭利な双物で首、両手、両脇、胴の上下といった風に根元から切り落して、これを別々のハトロン紙に包んだ上、白地浴衣に包み、細引をかけて、発見された場所まで運んできて、一つずつ順々に溝の中に捨てたものと一応考えられるのであった。なにしろ、この現場は環状線の大通りで玉ノ井の銘酒屋（当時の赤線地帯）にほど近く賑かな所である。桜にはまだちよっと早いがポカポカ暖かく、噂を聞いて野次馬が東西南北から集まってきて「なんだ、なんだ！」の大騒ぎ、忽ち黒山の人垣となった。寺島署から駈けつけた十数人の巡査が非常線を張り交通遮断をする騒ぎとなった。

型のように、警視庁から土屋捜査課長（この人は退官後に三越百貨店に勤めた）田多羅係長（退官後区長になつた）吉川鑑識課長、浦川寺島署長、検察側からは枇杷田検事、内山予審判事の面々が自動車で駈けつけて、現場検証をして、捜査会議と、手順通りに運んだことはいうまでもない。

死体のあったおはぐろどぶは、幅六尺深さ三尺で、犯人は最初暗渠へ投げこむつもりであったのが、手元が狂って溝に落したものと思われた。被害者は肉付も栄養もいい方で、ヒゲは剃って二月目位、解剖の結果は、最初外見した時よりも年をとっていて卅歳前後、死後一週間を経過している。軽い肋膜を病んだ痕跡が残っている。身体を切り落すとき骨は鋸でひいたものと断定された。死後一週間という点から犯行は月初めと推定されるのであった。また、鼻腔、口などには

蒲団の古綿が詰めてあり、胴体を結えた帯芯のような紐には、女の髪の毛らしい毛が六本くっついていた。その毛を仔細に鑑定すると、うち四本は死毛（抜毛）で、二本が生きている人間の毛で、中に猫の毛もまじっていた。また、鰯の鱗も発見された。

事件の名づけ親

当時の新聞がこの事件を天下の一大怪奇として、朝刊、夕刊と追っかけて報道し、日本中の読者が怪奇小説以上の好奇心をもって、つぎの報道を待ったのは連載小説の比ではなかった。警視庁の記者倶楽部には朝日、東日（今の毎日）、報知、国民、時事、読売、中外（今の日経）、みやこ、万朝報、やまとなど各社の記者が詰めきっていた。今も繁栄している新聞もあり、統合、改題、没落、と顧みて新聞界の興亡もその戦の激しさに感深いものがある。政治部記者がペンギン鳥のように乙につんとすましているのに対して、ここの記者達は、赤ダネ記者を喜びとし、ハンチングを横っちょにかぶって飛び廻る。刑事を相手に、隠語で話のやりとりが出来るようにならなければ、刑事に馬鹿にされて変死人一つの小種さえもとれない。だから、大学を出た若い記者が警視庁へ廻されると、口惜しさに泣いたものである。だが、この赤ダネ記者達は、みんなシャレがよくわかり、ユーモアがあって、雑然たる記者倶楽部は明るかった。昨今の新聞を見て、しみじみ思うことは、記事にも見出しにも、シャレや、ユーモアが少くなったことだ。昔は赤ダネ記者が随分流行語をつくり、見出しがそのまま、映画の題名になった。

話がちょっと横道にそれたようですが、この事件に関係があるので、当時の赤ダネ記者気質をちょっと披露した次第です。事件が起ると各新聞とも、毎日の紙面がこの話で持ちきりであったことは前述の通りである。ところで、この事件を「バラバラ事件」とつけたのは確か朝日であった。毎日が「八ツ切り」それから、どこかの社が「こまぎれ事件」とした。この三つの中では、朝日のバラバラがいかにも残忍な殺人事件の扱いに、一脈のユーモラスを感じさせ、筆者なども、してやられたと地団駄踏んだものである。果せる哉、後世まで、玉ノ井殺人事件と云えば、「あ、あのバラバラ事件だね」と人口にかいしゃするに至った。

さて、事件は、死体発見の三月七日以来、寺島署に捜査本部をおいて大がかりな捕物陣を展開したが、犯人はもとより、被害者の身許さえも、さっぱり見当がつかず、捜査課長もすっかり疲れて、頻がげっそり。毎日本部を出る刑事の靴音も重く鈍ってゆく。

四月廿日――発見の日から数えて五十三日目。浦川署長は寺島署二階の会議室に捜査関係者を集め、捜査本部解散の悲痛な挨拶をした。これで、さしも、騒いだ怪奇事件も迷宮に持込まれるのか――人々の関心も日が経つに連れ、記憶から薄れて行った。世間では、次から次へ目新らしい事件が湧き起っている。社会はいつまでも、おはぐろどぶのように沈滞してはいない。

世間が忘れかけた時が、捜査当局のいちばん苦悩する時であり、新聞記者もいつ事件が新発展するかも知れないという不安に襲われて緊張する時である。素人探偵の活躍がはじまり、玉ノ井の銘酒屋街から、犯人逮捕の殊勲者に当時としては大枚の五百円の懸賞金が出た。探偵作家陣の

売れっ子、浜尾四郎子爵、正木不如丘博士、森下雨村氏、牧逸馬氏など新聞雑誌社から引っ張り凧であった。

毎日新聞の警視庁担当記者に楠本義郎という男がいた。今は他界したが、この男は「事件の虫」だった。蓬頭垢面ひょろひょろっとして一見弱いように見えながら、芯が強く、一度事件が起ると、覚醒剤の注射をしたように全身に生気が吹き返って、その事件が片づくまで、精根の限りをつくして働く男だった。犯人捜査は刑事よりもうまくて、新聞記者という職業意識を忘れて、いい聞込みがあると、締切時間もなにもかも忘れて没頭し、二日も三日も本社へ連絡をとらないような男だった。楠本から連絡がなくなると「そらッ、またはじまったぞ」とデスクが顔を見合せたものである。そんな風だから、締切間際にトップ記事がなくて弱っている時など、楠本をデスクへ呼んで「おい、何か一つ出せよ」と水をむけると、上衣の内ポケットから、くちゃくちゃになった手帳を出して、けちん坊が惜しそうに物をくれるような恰好で、特種を出したもので、当時の警視庁から捜査係長にとの内交渉をうけたほどの変人奇人だった。この楠本が「迷宮か」の烙印を押されてから、俄かに活気づいて、例の調子で鼻をくんくん鳴らし、にんにくのくさい息を吐きながら、何かを目当に動いていた。彼の捜査メモによると、おはぐろどぶで発見された首と胴の包みは、重量にして七貫匁ある。これだけの重量のものを一人で運んできたとは思われない。重い方を男が、軽い方を女が持つという男女二人の共謀の犯行でないか。一人を女と推定する理由は、包みに附著していた髪の毛、帯芯のような紐などからの推理である。そして、犯人と被害者は

生活環境があまりよくない、下町の貧乏世帯と睨んだ。そのわけは、包みに鰯の鱗がついていた——恐らく、火鉢で鰯の焼いたのを食べ、傍に猫がいて、火鉢の周囲で被害者の油断を見すまして、犯人の男が殺し、犯人の女がこれを手伝って、死体の始末をした——そんな風に事件解決への構想を組立てて、この線に沿って、彼一流の捜査をつづけていた。

時は容赦なく流れ去って、事件から八カ月目の昭和七年十月十九日、さしも難事件といわれたバラバラの糸がほぐれて、被害者の身許判明から、犯人検挙へと——急転直下スピード解決へ持ちこまれた。

犯人は本郷区新花町三番地無職長谷川市太郎、当時卅一歳。共犯は市太郎の弟で帝大土木科写真室雇をしていた長太郎、当時廿三歳。それに市太郎の妹で銀座裏カフェー銀鈴の女給をしていたとみ子、当時卅歳の三人である。被害者ミスター・バラバラ氏は原籍秋田県仙北郡花館村南裏手二四〇番地当時住所不定の浅草ルンペン千葉竜太郎、当時卅歳と判った。

兄弟妹三人がかりで、どうしてエンコのルンペン千葉竜太郎をかくも残忍な殺し方をしたか、当時の陳述記録の跡を辿って見る。この陳述は、多くの犯人がそうであるように、彼市太郎の場合も第一回目の陳述と、その後の陳述でいろいろ喰い違いが出来たり、最初の陳述は口から出まかせの嘘でかためている。

しかし、それが問いつめられるままに、事件の真相を語って、最後に恐れ入りましたとなる自白の定石型であった。従って第一回の陳述と、その後では違っているが、一応、話として興味があるので、まず、第一回の陳述から要点を拾ってゆく。

犯人の仏心

犯人市太郎は、警視庁調べ室で被害者竜太郎と知り合った動機を次のように述べた。

昭和六年四月末のある日、妹のとみ子から浅草公園花屋敷の入場券を貰ったので、花屋敷へ行こうと公園六区木馬館の前を通りかかった。木馬館からジンタの哀調を帯びたクラリオネットと喇叭、太鼓の音が幟や旗のはためく街に流れていた。見るともなしに、木馬館手前の道端に眼をやると、一人のルンペンが十歳位の女の子供に泣きせがまれて途方にくれている。

「お父ちやん、お腹がすいたよゥ……」女の子は腹の底から絞り出すような声である。可哀そうになって、市太郎が傍に寄って事情を聞くと、このルンペンが涙ながらに、家内に死なれ、自分も病気で失業し、娘を連れて路頭にさまよっていると語った。市太郎自身もよく知っている貧乏の辛さ、すっかり同情して、現金五十銭と煙草の朝日二個、娘にバナナを一と山買って与え帰宅した。家へ帰ってこの話を母親ふみ当時六十二歳に夕餉の膳に向いながら聞かせると、年老った母親も「そりゃあ、いいことをしたね。人間出来る時に人助けをしておくものだよ」と云って伜の市太郎を褒めてやった。翌日は母親がむすびをつくって浅草に出かけ『一直』の前で市太郎の話したルンペンに出会いむすびを与えた。それから、母親と市太郎ととみ子の三人が交替で毎日浅草のルンペンへ食物を運んだ。ルンペンの娘の菊子当時十歳は三人の姿を遠くの方から見つけて

「おじさんが来たよ……」とうれしそうに可愛い声を出した。ルンペン竜太郎親娘と、市太郎一家の間に親しさが湧いて、間もなく竜太郎親娘は、市太郎の家に引取られて居候の身となった。とみ子は姙娠して男から捨てられ市太郎の世話になっている身の上だった。いつしか一つ屋根の下に起居するとみ子と竜太郎の間にかすかな恋の芽ばえが見えてきた。とみ子が難産で輸血しなければならなくなった時、竜太郎は喜んで自分の血をとみ子に輸血した。二人の恋はそんなことから急テンポに発展して、産後しばらくして結婚した。生れた赤ん坊には清と名づけた。

竜太郎の健康もよくなって、汐留駅の駅夫になったが怠け者で永続きがせず、魚屋をはじめると云うので、道具を買ってやったが、これも三日坊主で駄目。温順そうに見えた性質がだんだん本性を現わして兇暴となり、狭い家の中で険しい眸の対立、喧嘩口論の絶えない日がつづいた。竜太郎は市太郎の家に引取られてから一年の間に、生活費として家に入れたのは、たった三円五十銭きりであった。とみ子の産んだ清を邪魔物扱いにして、虐待し、逆さに吊して、ふり廻すような仕打ちさえあって、清は遂に衰弱して死んだ。こんなことから、とみ子は竜太郎をひどく怨み憎むようになった。昭和七年二月十三日午後三時頃、とみ子が仏壇に手を合せて南無阿弥陀仏を唱えていると、竜太郎がその姿を見て、舌うちをして凄い形相になった。その凄い形相に市太郎は、背筋にぞっとつめたいものを感じ、このままでゆくと一家皆殺しにされるのでないかと思った。そこで、傍の火鉢の中にあった裁縫用のコテを握って、不意に竜太郎の頭を力まかせに一撃した。竜太郎はうーんと唸って悶絶した。母親ふみは、この喧嘩を見るのが厭で菊子ととみ子を

連れて外出した。その後で市太郎は死体を大風呂敷に包み台所の揚板の下に隠し、畳についた血は灰で拭きとった。夜十一時すぎ母親ふみ達が帰ってきた。母親には「竜太郎とは話をつけて国へ帰した」と云い、竜太郎の娘菊子には「お父さんはすぐ戻るよ」と云った。それから、二月廿日まで一週間死体をそのままにしておき、廿日朝家人を外出させ、死体を引きずり出して押入れの中で骨を鋸で挽き、八つ切りのバラバラに始末した。翌廿一日にも家人を外出させ、胸と腹、腰というように処置してすっかり包装をすませ、台所の揚板の下に隠した。

三月六日午後九時、首と胴の上、下体を風呂敷に包み、本郷本富士警察署近くの伝承院前から五十銭の約束で円タクに乗り玉ノ井に行っておはぐろどぶに捨てた。三月十日に残りの部分を帝大内工学部船舶科教室新館北側にある旧土木科教室二階の旧測量実験室の一尺四方の揚ゲ蓋の中に隠した。

鰯の鱗と事件の虫

以上、第一回陣述では、犯人はすべて市太郎一人となっている。ところが、第二回以後の陳述では、市太郎がスパナで一撃し、弟長太郎がバットで乱打、とみ子は表で見張りをしていた。犯行に使用の兇器は長太郎が帝大から運んできたことに変った。検事は市太郎、長太郎を殺人、死体損壊、遺棄罪、妹とみ子を死体損壊死体遺棄罪で起訴し、公判もこの罪名で開かれた。云うまでもなく、とみ子は死体を兄市太郎と二人でおはぐろどぶに捨てに行ったのである。

犯行の動機、殺害方法、処置などにも、陳述の都度いろいろ変化し、紆余曲折がある。例えば殺害の場面でも、芝居がかりに、電燈料の滞納から電燈がとめられていたので、ろうそくの灯の炎が揺れる中で、市太郎が復讐の怒りに狂い、眼を怒らせて、死体をバラバラにする作業をつづけ、手を鋸で挽きながら「この手が俺を殴つたのだッ」「この足が母を蹴つたのだッ。そして妹の子を殺したのだ」と憤怒のほむらに燃えたち、残忍な兇行も、少しも恐ろしいとは、思わなかつたとも語つている。

竜太郎を殺した動機は、もちろん、こうした憤怒の爆発にもあつたが、一面、竜太郎が郷里秋田の素封家だが事情があって今は落魄していると云うような物語をしたので、世話をしておいて、竜太郎の財産を奪おうとしたのが、郷里を調べた結果、竜太郎のつくり話で田舎には財産の全くないことが判つたこと。また、とみ子が銀座のカフエーで働く前、玉ノ井の銘酒屋の酌婦をしていたこともあり、行く行くは竜太郎を殺して菊子を売るつもりであつたかも知れないとも云われている。

市太郎は福井県大野郡大野町の生れで、父は建具職。彼も家の業を継いで建具職で腕もよかった。大正三年金沢野砲九連隊に入隊し上等看護兵で除隊した。上京してからは、器用な男で春画を書いて浅草の暗闇で通行人に売り歩いて生活費を稼いでいた。

最後に市太郎逮捕を記そう。水上署管下の枕橋水上派出所石賀巡査が言問橋附近でルンペンを集めて、被害者のモンタージュ写真を見せて、この男に覚えはないかと尋ねていると、居合せた

二、三人のルンペンが、この男は十歳位の娘を連れた千葉竜太郎と云う男と証言したのが端緒となって、索線の糸を手繰つてゆくと、竜太郎が市太郎の家に世話になり、あの事件の頃から、姿が見えなくなったなどによって、市太郎に疑いがかかり逮捕となったものである。

こうした事件は、被害者の身許が割れさえすれば、犯人は、糸を手繰るように判るのが捜査の常道である。「事件の虫」楠本は、その直後、例の手帳をとり出して、鉛筆の先を舐め舐めこの事件で、自分の勘の通りピッタリ的中していた点、自分の勘と実際が違っていた点などを克明に分析して、彼一流の捜査資料をつくっていた。そして、筆者がその手帳をのぞきこむと、ニッコリ笑った彼は、

「鰯の鱗の勘は、名探偵だったな。火鉢の上に金網を乗せ、その上で焼けた鰯を皿にとらずに、熱いやつをふうふう吹きながら食うのは、東京の下町の貧乏世帯の夕餉時によく見る風景だよ。俺の勘にもいいところがあるね……」と鼻をくんくんさせたが、その警視庁記者会の名物男も今は亡い。もうこんな赤ダネ記者は、二人と出ないであろう。

消えた国宝

世界的名画モナ・リザが盗まれたのは巴里ルウブル美術館での話。
これは日本の国立博物館で国宝の四十八体仏が陳列ケースから消えた話である。犯人は若槻内閣当時商工政務次官の秘書官をした男で嘘つきの天才だった。

国宝四十八体仏

昭和七年の東京は、冬から初夏にかけて奇怪な事件が続発した年だった。まず、玉ノ井のバラバラ事件が起った。上野東京帝室博物館（現今の国立博物館）の御物盗難事件、自動車運転手を殺して、おろしたばかりの新車を強奪した事件――探偵の書入れ年でもあったし、警視庁記者にとって、ひどく忙しい年でもあった。

この三つの大きな事件が、それぞれ特異の事相を語っているが、わけても、博物館の御物盗難は、盗難にかかった御物が、仏像研究家の垂涎おく能わざるところの、国宝四十八体仏であったことと、捕まった犯人が意外にも若槻内閣時代の商工政務次官松村義一氏の秘書官を勤めた男で

出頭信といい、犯罪心理の観点からも一種の虚言変質者ではないかとの説が出て、世間の話題を浚った。血腥い事件とこと変り、こうした話もまた興味のあるものだ。

古往今来、洋の東西を通じて名宝の盗難事件は美術品盗難史にいくつか残っている。たとえば、あまりにも有名な巴里のルウブル美術館で世界的名画モナ・リザの盗まれた事件とか、日本では法隆寺の名宝盗難、ロンドン博物館の同様事件、芝増上寺の名宝盗難、浅草公園にある名優団十郎の「暫」の銅像の刀を盗もうとした話、上野公園竹ノ台の西郷さんの銅像から犬を盗もうとした話――数えればずいぶん沢山ある。この御物盗難なども、世界美術品盗難史の一頁を飾るものとして、おそらく後世に残る話であろう。

犯人は秘書官くずれのホラ信

御物犯人出頭信は、茨城県鹿島郡中野村字林の生れで、捕われた時の年は卅一であった。彼は郷里佐原中学校を卒業して、大正八年東京高等工業学校に入学したが、中途退学して早稲田大学政治科を卒業した。学校を出ると、村井銀行に入ったが、同行が休業したので退社し、丸菱商事に入社して京都支店の支配人になった。その後、昭和五年銚子汽船会社の監査役、阪神急行便船の顧問などしたことがある。昭和六年五月に月百円の手当で若槻内閣の松村商工次官の秘書官になったが、その年十二月内閣が瓦解したので浪人した。――以上がざっとした彼の過去である。すくなくとも、これだけの経歴を持っている彼が、上野博物館に忍びこんで、天下の名宝を盗ん

だと云うことは、その目的が那辺にあったかと云う点で、まず問題になった。

普通、常識的に挙げることの出来るのは、仏像の非常な愛好者で、仏像のもつなんとも云えない魅力に迷って、ついふらふらと盗む場合である。

金色眩ゆい仏像を、純度の高い黄金造りと見て、古点して、鋳つぶして金にしようとする場合も考えられる。また、盗み出して海外の愛好者に売り飛ばす計画でなかったかとの推測もつく。

捕まった彼は、犯行の目的について

「仏像は国宝でもあるし、きっと、純金の黄金づくりだと思った。あれを盗んで鋳つぶせば、莫大な金が手に入ると考えて、盗んだものです」

と陳述した。高等教育をうけた男の考えとしては、随分浅はかなことで、精神的欠陥があるのじゃないかと疑われるほど愚かな犯行である。彼は友人仲間で有名なウソつきで知られていた。友人仲間では彼のことを「ホラ信」と呼んでいた。彼が一躍「ホラ信」の名声を高めた話がある。

それは大正十三年八月のことだ。彼は二十五歳で早稲田の学生だった。学校を出たら女子大出の金広あきへさんという女性と結婚することになっていた。相思の仲で彼は彼女の家に寄寓していた。その時、彼女の耳もとでささやいた言葉は、楽しい新婚の夢物語であった。二人の間には結婚の日が近づいてくる。郷里の実家には金の茶釜がころがっているような話をしてある手前、結婚式は相当派手にやらなけりゃならない。さりとて結婚費用の目当てはさらにない。思案にあまった窮余の一策――その年八月二日の夜、明治神宮裏参道の暗闇で辻強盗に襲われて、結婚費

用にするためその日、日本橋加島銀行から引出してきた現金千二百五十円と彼女へのプレゼントに買った松屋デパート製の婦人服を奪われてしまった。

と警察に訴え出た。警察が驚いて早速調べにかかったのは勿論である。ところが被害の申立てに怪しい節々があるので、呼び出して不審の点を問いつめると、まったくの芝居であったことが露顕した。

その後もう一度。

大胆と云おうか、彼は築地警察署に現われて

「僕は外務省欧米局に勤めているものだが金を落して電車賃に困っているから鳥渡拝借したい」

と云って署員から一円借りて立ち去った。金を落したと云うのは、彼のつくりごとで、懐ろには一銭も持っていなかった。この時分からホラを吹くことの天才だった彼は、御物事件でいよいよその天才ぶりを示し「ホラ信」の真価を遺憾なく発揮した。彼が御物を盗んだ有力な容疑者として、警視庁に連行された当初の四月二十五日、取調べの刑事に

「私が知人の巣鴨の志村さんの所へ持参した仏像は、中野桃園に住んでいる今村勝三郎さんに依頼されたもので、盗難御物であると云うことは少しも存じませんでした」

刑事も政務次官秘書の経歴をもつ紳士が、まさか御物を盗み出したとは思わなかった。彼の云うように、今村と云う人物から頼まれて、売りに行ったものと思った。早速、今村と云う男を喚問する手はずをきめて、呼び出しをかけたが、今村なる該当人物が住んでいない。どうもおかし

いので彼に

「今村なんて人物は、中野桃園に住んでいないじゃないか」

「いいえ、そんな筈はありません、きっと探しかたが悪いのでしょう。私が一緒にご案内いたしましょう」

刑事が付添って、桃園一帯をあちら、こちらと足を棒にして歩き廻ったが、皆目そんな人物はない。嘘とわかった刑事が、カンカンに怒って

「お前はなぜ、そんな化けの皮のはがれるような、嘘を平気で云うのか」

「いいえ、嘘じゃありませんよ。奴はきっと、風を喰って逃げたんでしょう……」

涼しい顔をして平気でそう答えるのだった。彼は強情で、手を代え品を換えして調べたがどうしても、恐れ入りましたと白状しない。

手を焼いた当局は、彼の周囲や知人関係を辿って調べを進めた結果、彼の愛人で近く結婚することになっていた四谷伝馬町の石川しよう（二十四）さんの家の押入れから盗難後十三日目に金銅観音立像（高さ一尺一寸九分、一貫四百匁）の一体が現われた。ことここに及んで、さすがの彼も恐れ入りましたと、頭をさげたが、仏像が盗難御物であることと、石川しようさんの家に隠しておいたことに間違いないと自白したが、肝心の盗んだことになると、自分が盗んだのではなく、今村勝三郎が盗んだものを、預ったのであると言い張った。当局はこれまでの供述から、今村とは彼のつくった架空の人物で、他の二体の御物もどこかに隠してあるものと見込みがついた

ので、彼を攻め落すことに全力をつくした。その努力で他の御物一体は、上野の山に捨て、もう一体は、品川の海に捨ててしまったといい出した。

雲を摑むような話である。刑事も匙を投げてしまった。彼の自白は問題にしないで、傍証からかためて、彼の首根っこを押えてやろうと、外部の捜査に乗り出し、まず、行方不明の御物二体を手分けして探しにかかった。その結果、金銅如来仏像（高さ一尺一寸九分、二貫九十匁）は、勿体なくも上野公園動物園脇の共同便所の中から出てきた。これがほんとの黄金仏だわいと、刑事連は大笑いした。つづいて最後の一体は、盗難後十八日目の五月一日に彼の住んでいた家に近い代々幡の小さい川に架けられた橋の橋桁にぶらさげてあるのを発見した。これは銅板押出観音立像（八寸九分、百七匁）である。

三体の御物は、多少の破損はしていたものの目出度く博物館の手に帰った。

嘘つきの心理

彼の天才的な嘘つき――これは病的なものであろうか？　嘘つきが彼をして御物を盗ませたのではなかろうか。昔から「嘘は泥棒のはじまり」といろは歌留多にも、ちゃんとうたわれている。嘘ゆえの盗みか、盗みのための嘘か。変質者とも見られる彼。

彼のこの心理状態について、多年、警視庁にあって、嘘の研究をしている犯罪心理学者は私にこう話すのである。

人間が嘘をつくのは、多くの場合、自分に不利な場合である。嘘は人間ならば誰しも云えるかと云うと、決してそうではない。嘘がどうしても云えない人もある。境遇に困って嘘出鱈目を云うものと、境遇がそんなに困っていなくても嘘をつくものがある。これを病的虚言と言っている。昔デルブリックと云う学者は、病的虚言者、空想性虚談症、変質者などは、精神変質者の家に生れたから虚言者となったもので、嘘つきは一種の病気だと見ていた。

嘘をつくことに興味を持つ——空想と現実に区別がない。これが昂進すると自分で意識しないで嘘をつくようになる。本当のことを云っているつもりで、知らず知らずのうちに、嘘をついてしまうような状態になる。ところがデルブリックのこの学説は、その後になって、嘘つきと云う一つの独立した変質者があるのではなくて、癲癇性異常性格、ヒステリー異常性格のものが、嘘をつき易いと云うことを、一般心理学者が唱え出した。これらの性格異常者には、ある種の性格異常の天分がある。

その天分と云うのは、第一に我の強いことで、喜怒哀楽の情を現わす時に我を忘れて心から笑い、泣き、怒り、悲しめるものだ。第二には聯想が自由自在に働く——このような素質のものは嘘をつき易い。この天分を犯罪の上にうまく利用する。普通ならひっかかりそうもない嘘に、よくひっかかる。それは、嘘つきが真に迫るように話をするからで、つい釣りこまれてしまうのである。嘘つきの心境は舞台に立つ名優の心境に似たものがある。人間が激情をもって語ることは、空想でも、嘘でも真実性を帯びてくるものだ。従って、聞く人に感銘を与える。これが嘘つ

きにひっかかる原因である。

「ホラ信」は決して、嘘つきの天才と云うほどのものではない。けれども、彼の精神の中には、変質的なところが多分にあると云ってよかろう。嘘つきは嘘をつくとき、決して考え考えしながら、ためらって嘘は云わない。立板に水を流すように、さらさらと嘘をつく。だから、犯罪容疑者などを調べる場合、あまりためらわずに、すらすら自白する場合は、一応嘘と思ってかからないと、思わぬ失敗をする。

嘘つきが女にとても好かれるのは、どう云う訳でしょうか——彼の場合も、女にとても好かれていた。

この点についても、その犯罪心理学者は、云うのである。

嘘つきは、相手に好感を与えるものだ。嘘つきは、常に心そのままを相手に投げかける。表情が無邪気で子供のような純真さがある。これが、人に好かれる最大の原因で、男と云わず、女と云わず、兎に角、人に好かれる素質となる。その代り、嘘つきの人に好かれるのは、永続きがしない。厭きられ易い。けれども、愛している間は、灼熱の愛で何物も溶すほどの熱を持っている。無我の境地にあるような心境で、人を愛することが出来る。それからこうした精神的変質者というものは、一度、何かの犯罪事件にひっかかって、監禁されることになると、拘禁性精神病というのにおかされやすい。牢獄から脱れたい、監禁室から逃げ出したいの一心が昂じて、精神病になる場合が往々にしてある。この事件の主人公も強情で我が強く、出鱈目を平気で云う点で、確

かに虚言性変質者である。

純金と思いきやメッキに啞然

さて、話かわって、散々ホラを吹きまくって刑事をきりきり舞いさせた揚句、恐れ入って自白した御物を盗むまでの筋と、盗んでから捕まるまでの経路はこうである。彼は「これだけはほんとです」と前置して話し出した。

犯行の動機は、まったく生活苦によるものであった。愛人石川しようさんとの結婚日も近づいて来た。結婚について先立つものは金である。しかし、浪々の身でまとまった金などあろう筈がない。なんとかして金策しなければならない。思案にあまった彼が考えついた名案は、博物館に忍びこんで有名な仏像を盗むことだった。彼は、前後の考えもなく四月十四日午後四時ごろ、参観者に紛れて博物館に入った。そして問題の御物が展観されている第七号室の陳列ケースの前に立った。高さ六尺五寸あろ木彫奈良朝仏の蔭に身を潜めて閉館時間を待った。夕方には参観者の人足も絶えて部屋の中は薄暗かった。閉館時間がきて看守の見廻りの時も、発見されずにすんだ。彼はやがて仏像の蔭からのこのこ現われ出た。陳列ケースに掛けてある錠前を持ってきた肥後守のナイフで切り開こうとしたが、厳重でなかなか切れない。ええ、面倒くさいとばかり、無鉄砲にも、部屋の片隅にあった椅子を持ってきて、振りかぶって一枚板のガラス目がけて力まかせにえいっとぶっつけた。ガラスは大きな音をたてて粉微塵(こなみじん)に破れた。その音にハッとして身を

忍ばせたが、ガランとした広い館内に怪しむ人影もなかった。安心してケースの中に安置してある三体の御物を盗んだ。彼はずっしり重い御物を抱えて博物館をそっと逃げ出した。上野の山を歩きながら、これで結婚式が出来ると一人で北叟笑んだ。盗んで帰って座敷の電燈の下で肥後守を持ち出し御物の一部分を削って、友人の歯科医に鑑定してもらったところが、純(むく)金と思ったのはなんとメッキの銅板であることが判った。

結婚の夢ははかなくさめて、幻滅の悲哀と失望が覆いかぶさってきた。

考えようによっては、まことにナンセンスな御物盗難騒ぎであった。

強盗になったアナウンサー

若人の憧れの職種の一つ、ラジオのアナウンサーが強盗、強姦、窃盗の罪に問われた。かれの恋女房は青葉城下の名妓だった。かれをめぐる人生の明暗二タ筋道。

女中に出刄をつきつける

日本にラジオが誕生して、早くも三十一年になる。JOAKが東京芝浦で仮放送をはじめたのが大正十四年三月、愛宕山で本放送を開始したのが同年七月である。今やN・H・Kに対し民間放送も各都市に無数に生れ、文化の尖端で鎬を削っている。アナウンサーの人気はたいしたもので、大学の新卒が放送局の狭い門に殺到している。青年のうちには名アナになることを志望しているものが、随分多いようである。この三十一年間の日本放送史で、私はアナウンサーの強盗事件と云うのを、だった一つ手にかけた。アナウンサーの犯罪は、戦後情死未遂で殺人幇助かなにかの疑いをうけたのが一度新聞に出たことがあるが、私の扱つたアナウンサーの強盗事件と云うのは、こう云う筋のものだった。

仙台市同心町通り二五番地東北帝大学生課長風見謙次郎氏邸へ強盗が押入ったのは、昭和八年三月二十九日夜のことだった。この夜、主人の風見氏は京城で開かれた全国学生主事会議に出席するため旅行不在中であった。時子夫人は主人の留守に間違いがあってはと、女中のたけやを督して戸締りなどを厳重にして午後十時過ぎに床についた。

それから二時間、ぐっすり寝入りばなの十一時五十分ごろ一人の賊が忍びこんできた。賊は風見邸の西裏手にあたる風呂場のガラス戸を取りはずして室内に入った。詰襟の洋服を着て顔はお定まりの覆面、従って、人相ははっきり判らない。が、物腰態度から見て、年はまず二十八か九と推定された。

賊はよほど落ちついていたものと見え、忍びこんだ風呂場で履いてきた靴を脱ぎ、まず台所へ侵入した。ここで脅しに使う兇器として刄渡り六寸余の出刄庖丁に眼をつけた。出刄庖丁を右手に持って二、三度振り廻してみた。それから「これでいい」と口のなかでつぶやきながら、跫音を忍ばせて勝手に続いた六畳の女中部屋へ侵入した。そこには、昼間の疲れで女中のたけやがぐっすり眠っていた。

賊は電燈を消した。

薄明りのなかで、賊は、たけやの掛蒲団に手をかけた。たけやがびっくりして眼をさました。枕もとに突っ立った賊は、怪しく光る出刄庖丁をたけやの眼の前につきつけた。たけやは、怖さに声も出ず、ぶるぶる蒲団の中で震えた。

「俺は医学部の学生だ、課長の留守を承知で押入ったのだ」

歯ぎれのいい凄文句を並べた。その凄文句を聞いて、たけやはやっと勇気をとりもどした。なま白い強盗なんかに負けてたまるもんかと思った。

「暗くて困ります。電気をつけて下さい」

賊はうなずいてスイッチを入れた。周囲がぱっと明るくなった。

「奥さんの部屋へ案内しろッ……」

たけやは、咄嗟に奥さんに会わせては、事面倒だと考えた。

「お金が欲しいのでしたら私があげます」

寝床の下に入れておいた蟇口をあけて、四円五十銭ばかり入っていた金を、そのままそっくり賊に渡した。賊はその金をとると、黙って風のように姿を消した。

たけやは賊が出てゆく跫音に耳を澄まし、遠く消え去つてから時子夫人に「大変です」と知らせた。間もなく警察から署長はじめ大勢の刑事が駈けつけた。邸内を仔細に検証すると、脅しに使つた出刄庖丁が、庭の片隅に捨ててあったほか、手がかりになるような証拠遺留品は、一点もなかった。

青葉城下の奇怪事

この事件の起る一カ月前の三月一日午前二時ころ、仙台放送局会計課係員島村右平氏が強盗に

襲われている。その時の盗人も杳として手掛りがない。

島村氏を襲った時の賊と、風見邸を襲った賊とは、犯行の手口がとてもよく似ている。島村氏を襲った時も、賊は勝手口のガラス戸を器用にはずして侵入した。そして、女中の及川愛子さん（十八）を脅しつけて、机の上にあった一円五十銭入りの蟇口と女持金側時計（価格三十円）を奪った上、愛子さんに手荒なことをして立ち去った。

僅か一カ月のうちに不敵な強盗が二回も出没したことは、たいして広くもない仙台の町にしてみれば、かなりの事件で、市民は夜になると戦々兢々とした。警察は巧妙な犯行にいささか度を失った形だった。前科者の仕業か、それとも、特に風見、島村氏邸などの様子や事情に通じたものの仕業か――いずれにしても、青葉城下仙台の怪事と云わねばならない。

この二つの事件と前後して――と云うよりも、この強盗事件の起る一年ほど前から、仙台放送局で奇怪な盗難事件が頻発した。毎月給料日になると不思議と、職員の給料袋の中から何枚かの札が抜きとられる。誰が抜きとるかわからないけれども、熟練した会計係がきちんと勘定して入れるので、間違う筈がないのに、袋をあけて勘定すると枚数が足りない。神速巧妙、まことに奇術師のような早技の手際である。給料袋の抜きとりだけではなくて、品物までがちょいちょい紛失する。一例をあげると、百五十円もするストップ・ウオッチが盗まれる。他に盗難が六回も続いた。

放送局当事者もなるべくなら表沙汰にしたくないけれども、どうにも、こう被害が頻々と出るの

では捨ておくわけにはいかない。そこで意を決して警察に事情を話して訴えた。全国どこの警察でも同じことだが、こうした犯人と云うものは、刑事もあんまり身をいれないし容易に捕まるものでもない。それやこれやで仙台警察署も、このところ黒星がつづいた。どうにかして借金の黒星だけは精算しないことには、面子の問題だ。で犯人捜査の手掛りを摑むのに焦っていると、四月二十八日この犯人としてＪＯＨＫ（仙台放送局）のアナウンサー及川伊之助（二十九）が仙台憲兵隊に捕まった。

ＨＫの名アナウンサーが強盗、強姦、窃盗の兇状持ちの容疑者と知れたとき、世間はことの意外に驚き且つはあきれ、人は見かけによらぬものだと唖然とした。

二重人格の明暗映像

戦慄すべき罪の容疑者となった及川アナウンサーは、法政大学の出身である。その在学時代は陸上競技部員「及川」の名で全校に知られていた。在校時代軍教にはいつも中隊長で剛健な青年をもって通っていた（曾ての学生にはそんな時代もあったのである）。大正十三年に東北学院中学部を卒業して法政に進み、同大学の商学部を卒業したのは、昭和五年三月である。その年の六月、ＨＫの臨時事務員として仙台放送局に採用され、マイクの前に立つて「ＪＯＨＫ、こちらは仙台放送局であります」を見習う身となった。同年十二月一日輜重兵第二大隊幹部候補生として入営することになったので、局の方は一時依願解雇となった。

昭和六年十二月一日満期除隊して再びＨＫに復職したのであるが、憲兵隊に捕われた当時は士官候補生として四カ月の教育を受けるために、輜重兵第二大隊第二中隊に入営していた。彼が拘引されたのは四月二十八日午後三時頃のことで、田中憲兵曹長が輜重隊を訪い元吉副官に面会して「及川の身体について取調べる筋があるから……」と諒解を求めた上、兵営内で勤務中を同行した。

及川の生家は、仙台市肴町の及川旅館である。彼の実父は昭和五年頃から中風を病んで床についたッきりであるが、若い元気な頃は、仙台きっての顔役で、青竹を割ったような気っぷで曲ったことの大嫌いな親分さんだった。弱いものを助け、強い奴なら二つに挫くと云う幡隨院長兵衛張りの肌合いで、界隈に鳴りひびいていた。親分の徳を慕い盃を貰いにくるものが多く、「及川の親分さん」と云えば、東北で押しも押されもしない顔役だった。

東京大相撲が仙台で興行する時など、及川親分が勧進元でなければ、木戸があかないと云うほどの権勢を見せたものだ。だから、相撲にかぎらず、役者芸人は仙台で興行する時には、かならず及川親分の家の敷居をまたいで、たとえ名刺代りの手拭一本でも持っていって、仁義をしたものである。彼はこの豪勢な親分の若旦那として、中学から大学へ不自由のない家庭にすくすくと育った。

学窓を出てアナウンサーと云う新時代の職業についてからの彼は、歯切れのいい言葉と明朗な性格で忽ちＨＫの名アナと謳われ、スポーツ放送には昔とった杵づかで鮮かなアナウンスにファ

ンを熱狂させたものだ。そのころ、仙台の多門師団長が満州の曠野から花々しく青葉城下へ凱旋してきた日、官民群衆の湧きたつ熱狂的歓迎を眼のあたり見るような名調子で放送したのも彼であった。

花やかな声の人気者及川が、どうしてまた恐ろしい罪に堕ちたか？　ハイドとジキルを地でゆく二重人格に生きた彼の明暗両面を映像するならば――それは、誰しも堕ち易い酒と女の二ツ筋道であった。

恋女房は名妓蔦若

明治から大正へかけて、及川の親分で通った彼の実家も、彼が大学を出る頃には家運が傾き、その上前に述べたように、親分が中気で病の床につく、と云ったような不運がつづいた。家運の傾き出してから、彼は、花柳の巷に遊んで酒と女の味を知った。左前になってから遊蕩三昧を覚えたのだから、このお坊ちやんまことに始末が悪い。話は彼が法政大学在学時代のことである。

及川の若旦那伊之さんは、親の眼を偸んでよく花柳界で遊んだ。東二番町を中心とした盛り場から東一番町の裏町にかけての花街――そのあたりには、宮古川、青葉、八百粂、佐和良、ちよいと離れて東四番町には仙台で有名な対橋楼がある。雪、月、花に――若旦那伊之さんは、紅燈をくぐった。当時、仙台花街の美妓として宴席になくてならない名花、宴会芸妓に「蔦よろづ」の蔦若と人眼を忍び、互に首尾して逢う瀬を楽しんでいた。二人は思い思われる仲だった。伊之さ

んと蔦若の仲と云えば、花街雀が囀るほどで、誰知らぬものない二人であった。深い二人は苦労人で酸いも甘いも嚙みわけた父親の粋な計らいで晴れて夫婦になった。粋な島田から丸髷に――蔦若の名前を返上して及川あきのの本名に帰った。それは、彼が捕われた時から数えて四年前の話である。一緒になると間もなく、二人の間に子供が産れた。

堅気になった蔦若のあきのさんは、見違えるような世話女房になって、傾いた家運を盛り返そうと仕出し屋を開業した。出の着物に裾をひいた身が、ゴム長靴を穿いて一本二十銭の仕出し弁当を仙台交換局や附近の官公署へ運ぶなど、貞淑健気な女房として余所の見る眼も涙ぐましいほどよく働いた。

それにひきかえて、及川は花やかなアナウンサー生活の常として、世間からは持て囃されし、自然に遊ぶ機会も多く交際も広くなって、いるものは金である。放送局から受ける給料だけでは遊興費が足りない。そうかと云って、女房がせっせと稼いでいる家の帳場の金を持ち出すことも出来ない。またよし持ち出せたにしろ、彼が使うためには余りにも少い金額だった。

ああ、金が欲しい。世の中はすべて金だ、ああ、金が欲しい。金に対する慾望が脳裡に大きな渦をまきはじめた。彼はマイクの前に立って放送している時も、念頭から金のことがこびりついて離れなかった。ふと、恐ろしい心がきざして、同じ局に働く島村会計係員の給料袋からそっと三十円を抜きとった。思えば、これが、悪へ踏み出す転落の第一歩であった。それから引つづき局内で小さな泥棒をしたり、給料袋の抜取りをやって遊興費を稼ぎ出していた。

放送局の訴えに、仙台署でも犯人は内部の事情に精通した者か、或は、内部のものと睨んでいたが、その犯人がまさか今売出しの及川アナウンサーとは思い及ばなかった。ところが悪いことは出来ないもので、彼が局から盗み出したストップ・ウオッチを三月二十三日の日に、仙台市肴町一三六番地高田質店に七円で質に入れた。この事実を刑事が洗い出して見ると、入質者は意外にも及川と判った。当時、及川は前にも記したように見習士官として入営中だったので、憲兵隊の手を通じて逮捕となったものである。

鉄窓の下に繋がれた彼は、犯した罪の恐ろしさに泣き狂い、極度の興奮に掻きたてられた。ここに哀れをとどめたのは、恋女房のあきのさんで、事件が噂にのぼってからは、世間体を恥じて店を休み、愛児をしっかりと抱きしめて、悲嘆の涙にかきくれたと云う。

早いもので、この事件があってから星霜は流れて二十二年、その後の彼はどうなっているやら……

——（おわり）——

納本

昭和三十一年九月十五日　第一刷発行

二本の指
定価六十円

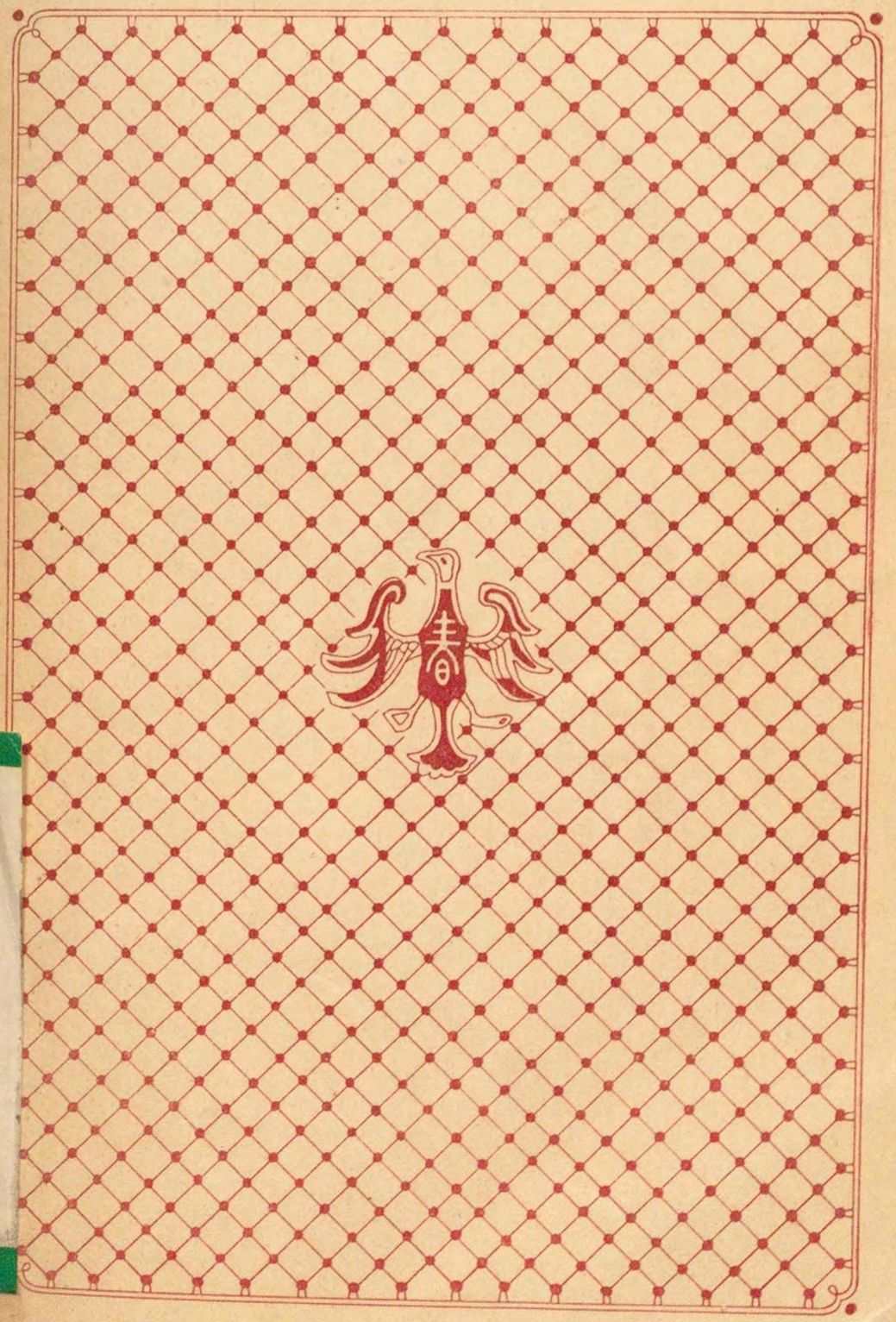
著作者　北条清一
発行者　和田欣之介
東京都文京区音羽町二丁目十八番地
印刷者　新倉誠一

発行所　東京都中央区日本橋通三丁目八番地　株式会社　春陽堂書店
電話千代田五一・四八四八
振替東京一六一七番

落丁乱丁本はお取替いたします

春陽文庫目録

捕錢形平次控1	野村胡堂	55
捕錢形平次控2	野村胡堂	55
捕錢形平次控3	野村胡堂	55
捕錢形平次控4	野村胡堂	55
捕錢形平次控5	野村胡堂	55
捕錢形平次控6	野村胡堂	55
国定忠次（前）	長谷川伸	100
国定忠次（後）	長谷川伸	100
蛇男	角田喜久雄	60
右門捕物帖1	佐々木味津三	80
右門捕物帖2	佐々木味津三	80
鏡地獄	江戸川乱歩	55
喬二捕物集	白井喬二	80
旗本退屈男（前）	佐々木味津三	75
旗本退屈男（後）	佐々木味津三	75
捕物そばや（時代篇）	村上元三	80
捕物そばや（明治篇）	村上元三	80
桃太郎侍（前）	山手樹一郎	80
桃太郎侍（後）	山手樹一郎	80
颯人先生	八田尚之	80
続颯人先生	八田尚之	60
宙に浮く首	大下宇陀兒	70
笑の王国	佐々木邦	60
人間椅子	江戸川乱歩	75
雪之丞変化（前）	三上於兎吉	80
雪之丞変化（中）	三上於兎吉	80
雪之丞変化（後）	三上於兎吉	70
投げ節彌之	子母沢寛	60
若さま侍手帖1	城昌幸	60
若さま侍手帖2	城昌幸	60
捕物手帖3	城昌幸	60
若さま侍手帖4	城昌幸	60
捕物手帖5	城昌幸	60
若さま侍		
緑の風	富田常雄	60
無法松の一生	岩下俊作	60
一本刀土俵入	長谷川伸	60
彌太郎笠	子母沢寛	55
妖棋伝（前）	角田喜久雄	75
妖棋伝（後）	角田喜久雄	75
ガラマサどん	佐々木邦	70
殺人請負業者	大下宇陀児	65
胡椒息子	獅子文六	80
颶風の門（前）	村上元三	80
颶風の門（中）	村上元三	80
颶風の門（後）	村上元三	90
黄門廻国記（前）	直木三十五	90
黄門廻国記（中）	直木三十五	90
黄門廻国記（後）	直木三十五	95
本陳殺人事件	横溝正史	70
さんど笠	子母沢寛	60

新十郎捕物帳1	城昌幸	65
新十郎捕物帳2	城昌幸	65
愛慾の海	竹田敏彦	75
伊豆物語	藤原審爾	70
初恋物語	源氏鶏太	75
顎十郎捕物帳1	久生十蘭	70
右門捕物帖3	佐々木味津三	85
右門捕物帖4	佐々木味津三	90
右門捕物帖5	佐々木味津三	110
いたづら小僧日記	佐々木邦	60
鍔鳴浪人（前）	角田喜久雄	80
鍔鳴浪人（後）	角田喜久雄	80
妖説延命院	土師清二	80
パノラマ島奇談	江戸川乱歩	65
白虎（前）	富田常雄	85
白虎（中）	富田常雄	85
白虎（後）	富田常雄	95
狼煙（のろし）	檀一雄	70
陰獣	江戸川乱歩	50
清水の次郎長（前）	村松梢風	90
清水の次郎長（後）	村松梢風	90
小伝次捕物ざんげ	戸川貞雄	65
嘘つきアパート	大下宇陀児	70
婦人警官捕物帖	城昌幸	65
春婦伝	田村泰次郎	60
南国太平記（呪殺）	直木三十五	75
南国太平記（刺客）	直木三十五	75
南国太平記（宿命）	直木三十五	70
南国太平記（黎明）	直木三十五	75
南国太平記（結）	直木三十五	75
地獄から来た女	田村泰次郎	90
猿飛佐助	富田常雄	80
三浦老人昔話	岡本綺堂	80
眼中の悪魔	山田風太郎	75
笛吹（或るアナキストの死）（前）	木々高太郎	70
笛吹（或るアナキストの死）（後）	木々高太郎	70
能面殺人事件	高木彬光	90
悲願千人斬（上）	下村悦夫	85
悲願千人斬（下）	下村悦夫	85
髑髏銭（前）	角田喜久雄	90
髑髏銭（後）	角田喜久雄	90
屋根裏の散歩者	江戸川乱歩	60
石榴	江戸川乱歩	65
処女峰（前）	富田常雄	90
処女峰（後）	富田常雄	90
大番頭小番頭（前）	佐々木邦	70
大番頭小番頭（後）	佐々木邦	65
求婚三銃士（前）	佐々木邦	65
求婚三銃士（後）	佐々木邦	65
心理試験	江戸川乱歩	50
岩塊	大下宇陀児	60
新編毒婦伝	大下宇陀児	60
真夏の殺人	大下宇陀児	90
午前零時の出獄	島田一男	75
王将	北条秀司	90
姿三四郎1	富田常雄	65
姿三四郎2	富田常雄	65

紅梅行燈　山手樹一郎　90
D坂の殺人　江戸川乱歩　70
愛の高原（前）　貴司山治　100
愛の高原（後）　貴司山治　110
環状線の女　島田一男　80
港へ来た男　梶野鷹三　80
遙かなる虹　富田常雄　90
戦国無頼（前）　井上靖　70
戦国無頼（中）　井上靖　70
戦国無頼（後）　井上靖　70
魔人　大下宇陀児　80
隠密縁起（前）　野村胡堂　95
隠密縁起（中）　野村胡堂　95
隠密縁起（後）　野村胡堂　85
珍太郎日記　佐々木邦　70
天正女合戦　海音寺潮五郎　65
人生初年兵（前）　佐々木邦　70
人生初年兵（後）　佐々木邦　70
密猟者　寒川光太郎　50
人生の阿呆　木々高太郎　80
ひまわり娘　源氏鶏太　95
美しき山猫　香山滋　85
松平長七郎　下村悦夫　90
青春記　中山正男　60
馬喰一代　吉屋信子　80
鏡の花　吉屋信子　90
幻なりき　吉屋信子　90
朝焼け富士（前）　山手樹一郎　110
朝焼け富士（後）　山手樹一郎　100
曠野の虹　竹田敏彦　80
恐怖の歯型（前）　大下宇陀児　65
恐怖の歯型（後）　大下宇陀児　70
右門捕物帖　6　佐々木味津三　90
鉄の舌　大下宇陀児　15
海の野獣　梶野鷹三　65
平手造酒　中山義秀　75
夢介千両みやげ　1　山手樹一郎　75
夢介千両みやげ　2　山手樹一郎　75
夢介千両みやげ　3　山手樹一郎　90
明日は日曜日　源氏鶏太　110
荒木又右衛門　直木三十五　120
又四郎行状記　1　山手樹一郎　100
又四郎行状記　2　山手樹一郎　90
又四郎行状記　3　山手樹一郎　80
又四郎行状記　4　山手樹一郎　100
ホープさん　源氏鶏太　100
顎髭物語　源氏鶏太　95
家族あわせ　北條誠　95
花を吹く風　北條誠　130